胸痛彌劇不能起。口授門生某、令筆錄、以贈。事在

源寵天錫父

序

貴きを欲(ホリ)するは人の同しき心なり人々己にたふとき物あるをとのたまへりしはかけんもさらなる事にしあれとい とも／＼たふとくうれしき数になむありける今又思ふに物知らまく欲し人にまさらん事を思ふもむけにいひかひなき痴(シレ)人をおきては大かたの人のおなしき情なるへし實に世に益ありてしらては得あるましき筋の古へ今の萬の事に深く心を入て物せんはいともめてたくおむかしきわさなりかしろか中には天つ空のありさま地のかきりの事しらぬ國々の海山のたゝすまひ人の心さま時世のならはしなとをさへにまさ目に見たらむか如くさとり明らむる人もおめるよさはいと／＼難きわさなるをやさも難きわ

さをたに庭ひの極み明らむらむ人の心さとりといふもの
はいとも〳〵くすしきものにはありけりしかはあれとい
かなる事にか己か心をはしらまくほりせんとたに思ひも
かけぬ人の多かるはいかにそやから國の聖人の道は其ら
とは心をしり心を正しくする外には出さるを其道に名高
く世にあふかるゝさまなるものもよくせされは心をむね
とする道なることは論はんものとも思はす或は口にはし
かいひなからたのか心をも身をもをさむる筋の事をは露
はかりも物せさる樣に見ゆるもあなるはいかなることに
かといともいふかしくなむわれらを以て思へはかの外に
ある物をもとむるは難きに似てやすく己にある物をもと
むるはやすきやうにてかたきわさにやあるらむさるを近

昔の世より心學といふをたてゝものする流ありて其とき
さまうち聞くにははかなき戯言にひとしく誰も知たらむ
事の様に聞ゆれとも實にはみなもと深くかしこき書籍の
意を俗言（サトビコト）にやはらけて物するにしあれはいたく世の人に
益ありていともれむかしくめてたきわさになんありける
おのれもはやくより此道の書籍をもよみ此筋の人々にも
これかれしたしくものしてかの道話といふをもしはし
きゝたるに己か心をしる事をさきとし心をしり得てもの
學ひよろつに心を用ふれは眞の道にはかなふものそとい
ふ事をむねといへるにて實にさる事になんさてかの人々
おのれにたふときものありとのたまへりしたふとき物とい
ふはやかて此心の事にてくすしとも靈（クス）しくあきらかなり

とも明らかにて行いたらぬくまもなく〳〵らふへき物もな
きものなりといふをもとにていとも〳〵こまやかにねん
ころにもねむころにものすれは此道によく入たては世の
人に名をたにしられすさもありけもなきもの〻中にも思
ひの外にかの泥の中の還砂の中の白玉なといはんさまの
人も出来めるはめてたしともめてたくまことに世に益あ
る事たくひあらしと思ふに合せて己かいひかひなき心に
もいたく益を得たりと覺ゆる事なきにはたあらすかしこ
〻に柴田翁の此道にさとり深く近き世にならふへき人も
なくものせらるれはいたく遠からぬ國々よりは乞ひ聞ゆ
るま〻に年毎にこ〻かしこ行めくりてものせられ其中に
は其守の殿の御前にても彼道話を聞えあけらる〻さまな

その事ははやくより聞居て一度たにたいめしてしかなと
たもひわたりぬるをたのれ思ひもかけす我君に從て四年
はかりか程大阪に在て去年より此京にうつろひ住むに曩
に大阪にて此翁の道話の席ものせられし事を一二度聞つ
けたれはいかてとは思ひつれとあれはかゝりといふ樣
にて得ものせす此所にうつろひても事しけくなと心にも
あらていたつらに月日を過しゝに幸にも近きころ此翁さ
るもおありて我君の御前にうち〳〵にめされてかの道話
をしは〳〵聞おけられけるはいともめてた!!わさにな
むありけるかゝれは己も本意の如く對面して何くれの物
語も聞おかはしなとする事とはなりてうれしうこう覺ゆ
れかくて此ころ彼常にものせられ我君の御前にても聞お

あけられたる説ことゞもを家つける子武修主の露はかり
も洩さす書記してはやく世にあまねかる此流の書籍の例
にまかせて鳩翁道話と名つけて三卷板にゑられさてつき
て此卷をも物せられんとて是かはしに一くたりといはる
れはやかて此はやくよりの事どもをくた〳〵しきまてか
くはものしつるになんありける

天保六年九月京の二條の

堀川の家にて

三河國吉田中山美石識

鳩翁道話續々篇序

書曰。思曰睿。々作聖。夫思者。君子之所尙。而學者之所爲要也。孟子曰。心之官則思。々則得。不思則不得也。夫人方聲色聞見之際。委耳目之感。而不以思。則物引於物。而心失其官。其奚得以立事物之綱維。而定其規則哉。是以君子之於身。視思明。聽思聰。色思温。貌思恭。言思忠。事思敬。疑思問。忿思難。得思義。其而後心爲一身之主。而四體聽其命。身體恭敬。言語誠實。志常正。而義常立矣。聖經賢傳之旨。雖千端萬緒。要其至處。則亦不復外於是也耳。柴田子鳩翁。初從予先人德軒先生。以受石門之學。以講授於四方。不幸得疾而失明。乃不復能讀書。然。其思也愈精。其學也愈進。天豈欲奪不思之官。以令遂其思之官耶。抑將欲令世之有目者。以知思之貴也邪。嗚呼。如翁者。可謂盲於目。而不盲於心。不以目治。

而以心治之者也耳。其子武修。錄翁之所講談。以上梓者已而次。頃者。又錄其三篇。欲以請緒言於先人。而先人忽辭世。今也刻成。乃請之于予。々不得已。而略爲書所聞於先人之旨。以爲之序云。

天保九年戊戌春正月　　　　平安薩埵天放撰拜書

鳩翁道話　前編

男　武修聞書

孟子曰。仁人心也。義人路也。舍其路而弗由。放其心而不知求。哀哉。是は孟子告子上に見へまする本文でござります。扨此仁と申すは。諸先生いろ〳〵に御註をなされたれ共。むつかしう申ては女中方や。子共衆の耳へ入にくい。これをたとへをもつて御はなし申ませう。むかし京に。今大路何某といふ名醫がござつて。名高い御人じや。或時鞍馬口といふ處の人。霍亂の藥を製して賣弘めまするにつき。看板を今大路先生に御願ひ申て。書てもらはれました。其看板に。はくらんの藥と假名で御書なされた。ソコデ頼だ人がとがめました先生是はくはくらんの藥ではござりませぬか。何もゑはくらんとはなされました。先生笑ふて。くらま口は京へ出入の在口往來は木こり山賤百姓ばかりくわくらんと書てはわからぬ。はくらんと書てこそ通用はするなれ。眞

實の事でもわからぬときは。役にたゝぬたとひはくらんと書ても。藥さへ功能があれば能いではない歟と仰られました。いかさま是は面白い事でござります。聖人の道もチンプンカンでは。女中や子ども衆の耳に通せぬ。心學道話は識者のためにまふけました事ではござりませぬ。たゞ家業におはれて隙のない。御百姓や町人衆へ聖人の道ある事をしらせ申たいと。先師の志でござりまするゆゑ。隨分詞をひらたうして譬をとり。あるひはおとし話をいたして。理に近い事は神道でも佛道でも。何でもかでも取こんで。おはなし申ます。かならず輕口ばなしのやうなと。御笑ひ下されな。これは本意ではござらねども。たゞ通じ安いやうに申すのでござります。時に仁と申事は。畢竟トント無理のないと申す事でござります。此無理のないのが。則ち人の心じやと。孟子は仰られました。此無理のない心をもつて。親につかへまするを孝行になり。主につかへまするを忠になり。夫婦兄弟朋友の間も又々此通りで。五倫の道はやすらかに調ひます。其無理のない仕様は親は親のあるべきや

う。子は子のあるべきやう。夫はをつとのあるべきやう。女房は女房のあるべきやう。此あるべきやうが無理のないところで。則ち仁なり。又人の心でござります。たとへて申さば。此扇は誰が見ても扇じや。扇としつて。これで鼻汁かむ人も。尻ぬぐふ人もない。これは是扇のあるべきやう禮儀に御もちひなされるか。開いて風をもとめる歟。この外に仕様はない。此見臺もその通りで。棚のかはりにもならず。又枕の代りにもなりませぬ。やはり見臺は見臺のあるべき様に御つかひなさる。しかれば親御さまを親御さまと御らうじたらば。御孝行になされるが。子たるものゝ有べきやう。是が仁なり。人の心でござります。かやうに申てゐると。余所のはなしのやうなれども。則御銘々さまの御心が。トント無理のない仁の丸無垢。いまあなた方の御心の店おろしをいたして居まするのじや。よそ事のやうに御聞なされては迷惑にぞんじます。もしあなた方が親御へ口ごたへをなされたり。また親を泣せたり。主人に心配させたり。難儀をかけたり。夫に腹を立させたり女房に心づかひをかけた

り。弟をにくんだり。兄を悔たり。世間へ難儀をかけちらすは。皆扇で尻をぬぐひ。見臺を枕にしてござるといふものじや。御當所には左様の人柄はござるまいけれども。天竺の横町には。此連中がたんとある。御用心なさりませ。つく〴〵思ふて見れば。意地のわるい生つきでも。いたし方がござりませぬに。幸におたがひに。無理のない心を持てうまれましたは。千萬金にも替られぬ有がたい事ではござりませぬ歟。この無理のない心を我方で本心と申ます。尤仁と本心ととなへ所によつて。すこしの差別はあれども。ろんな事の吟味すると長うなる。唯本心は無理のないものとおぼしめして。間ちがひはござりませぬ今日各様に御一人〳〵御目にかゝらいでも。おの〳〵さま方のお心にすこしも無理はござりませぬと知れまする。其證據は。いふまじき事をいふ歟。すまじき事をすると。忽ち腹の中が何とやら心わるう覺へる。是無理のない心をもつて無理をするゆゑ。心がねぢれて心わるいのでござります。是はこれ。千人萬人みな同じ事でござります。古歌に「鳴瀧のよるの嵐にくだか

れてちる玉ごとにやどる月かげ」これ月は。一ツなれどもちる玉ごとに各〻のかげをやどす天理の妙用。仁はひとつの仁なれども萬人みな是を分て持て居まするソコデ世界中の人のこゝろに無理のないといふ事がチヤント勘定が出來まする。さるに依て此無理のない心にしたがふて。物ごとをすれば皆あるべきやうに成て。孝行忠義もおのづから出來まする。ナント はやい學問ではござりませぬか。タッタ一ツ合點すると百年學問した人と行におゐて何もかはつた事はござりませぬ。ドウゾ本心に御したがひなされ。是を先生として。御稽古をなさるがよろしうござります。我本心を師匠にすれば。御祝儀もいらず。暑寒の見廻にもおよばず心やすう忠孝はつとまる。ありがたひをしへでござります。しかしあまりやすいと得て御うたがひの起るものじや。決てやすものでも御買かぶりの氣づかひのあるのではござりませぬ。押切て本心におしたがひなさるるが。宜しうござります。中庸には率性之謂道と急度御證文の請合がござります。御氣づかひなしに御つとめなされま

せ。扨義人路也とは。義といふは無理をせぬ事なり。無理をせねば人交りは申にれよばず。萬物と交てよろしかるがゆゑに古人義者宜也と仰られました家來としては奉公に精を出すはよろしい。嫁としては舅姑に孝行にし。夫を大切にするが。宜しいじやでござりませぬ歟。其外何事でも宜しいのが義でござりまする。其宜しひのが人の道じや。道とは古人曰道猶大路也と。江戸へ行も長崎へゆくも。表へ出るもうらへ出るも。となりへゆくも雪隱へはいるも。皆それ〳〵に道がある。もし道をゆかぬと屋根こしをしたり溝へはまつたり。野でし山でし。とつけもない所へうろたへまする。是と同じ事で。人の上でも宜しうない事をすると道ではござりませぬ。子は親に孝。妻は夫に貞。朋友は互に信。一々いはいでもしれてある其通りさへすると道じやによつて。互によろしけれど。親をなかせたり夫に腹たてさせたり。人を恨んだり。恨まれたり。是みな宜しうない事じや。是が道でない故に。川へはまつたり。荊の中へかけ込だり。どぶへ飛こんだりすると同じ事で。扨も難儀千萬なものでござり

ます。尤道はどこらにあるやら。とくと考へねば成ませぬ。幸ひ中澤道二先生の御はなしを承り傳へました事がござります。序に御はなし申ませう。中澤先生ひとゝせ攝州池田へ道話に參られました。ある豪家に逗留いたした所然。ソノ家の主人もとより心學執心ゆゑ先生をもてなしのあまり十四五に有る娘を呼出し道二先生を饗應させられました。此娘御容儀もすぐれ行儀もよく花をいれ茶をたて琴をひき。また先生をなぐさめ。歌などをよまれました。ソコデ先生その親たちへ挨拶に。是ほどにおそだてなされるは。なみ〳〵の事ではござるまいと申されたれば。親達が圖にのり。嫁入して先方で恥をかきませぬやうにと。只今いたした外に。松明花むすび。畫も少しは習はせました。と段々と娘自慢。ソコデ先生がそれは中々大ていの事ではござりますまい。夫なればさだめて。肩こしを揉む。按摩の稽古も御仕こみなされたであらふといはれた。主人むつとしたる顔つきで貧乏はいたしてゐれども。娘に按摩のけいこはまだ習はせませぬといはれた。道二先生笑ひながら。それは

近ごろ御心得ちがひでござりませう。貧乏金持によらず。女は夫の家にかしづけば。先方の親たちを我親としてつかへるが道じや。其大切な舅姑御が御病氣のときに。ゑかき花むすび。茶や花では御かいほうは出來ませぬ。出入の按摩やをなで衆の手をからず。嫁御が眞實に親たちの肩こしをなでさすりして御介抱をなさるゝが。嫁御の道でござります。其道の修行に按摩の御稽古はまだ歟と申たのでござります。とかく役にたつ御稽古が肝要じやといはれました。流石の主人も大きに我を折。赤面して御詫を申されたと承はりました。なる程琴三味線もよろしいが。撫さすりの介抱を心がけるが子たるものゝ道じや。是で道はどこにあるやら。とくと御考へなされませ。遊所ちかいところでは。得ては娘の子に琴三味線を稽古させて藝者の風俗を見習はす。じやに依て娘らしうそだつがすくなふござりまして。親の目をぬすんで逃たり走たりが多うござります。これは娘御のわるひのじやない。親御のそだてのわるひのじや。尤琴三味線端うた浄るり。やくにたゝぬと申すので

はございませぬ。心をつけて見ますれば。端うた一ッでも皆善をすゝめ悪をこらすのをしへでござります。アノ四ッの袖と申すはうたに「うき中のならひとしらばかくばかり。花のゆふべのちぎりとなるも。此唱歌で御考なされて御らうじませ。是はこれ若い男と女と親のゆるさぬ縁むすび。面白からうと思ひのほか。これもふやうにならぬ。ういつらひ世の中じやとしつたら。かふはせまひものと後悔した文句でござります。こんなとは世間にはまゝあると嫁を貰たら面白からうの。世帯を持たらうれしからうのと。鍋尻てがさぬ畑水練のムチヤクチヤじあん。思ひの外に所帯持て見ると。面白うもなんともない。唯今日に追廻され。髪もかたちもかまはゝころ。すき髪に前垂帯。ふところへ子をねぢこんで。みそこしさげて歩行て見たがよい。どのやうなものであろうぞ。是みな親の教訓をきかず。時節到來をまたずして。はやまつて俄所帯てれは誰がしつた事じや。皆れのれ〳〵がいたづらから。夫を何の分別もなふ。三味線さへひくと。面白い事に思ひ。五ッや六ッの勧辨

のない。女の子に大きな三味せんをだかへさせ。仕かたがない故。つぎ掉に
のぼりついてキイナ聲出して唱ふてゐるを。よろこんでござる親達は御氣
の毒千萬なものでござります。御油斷をなされまするなら。うろたへると琴三
味せんで育つた子は。親をすてゝ走つたり欠落したりする事があるものじ
や。すべてうはきらしい。花やかな事には。かならずひよんな事が出來まする。
此四ッの袖も作者のこゝろは。いたづらをいましむるをしへの道じや。芝居
淨瑠璃はやゝうた。とかく目のつけやうがちがひまする大間違になるも
のでござります。琴三味せんを敎へて。嫁入先で間に合さうと思ふたが。思の
外に間に合ひで。嫁入せぬさきに忍び男をこしらへて走るのは。皆目の付や
うのちがふに依てじや。是で面白ひ話がござります。むかし京にすむ蛙が兼
て大阪を見物せんと望で居ましたが。此春おもひ立て。難波名所見物と出か
け。のたり〳〵と這まはり。西の岡向ふの明神から。西街道を山崎へ出。天王山へ
のぼりかゝりました。又大阪にも都見物せんとおもひ立たかひるが有て。是

も西街道瀨川あくた川高槻山崎と出かけ。天王山へのぼりかゝり。山の嶺で両方が出合ました。ナニが互に仲間同志なれば。めい〳〵の志をはなし。扨両方がいふ様は。此やうにくるしい目をして漸とまだ中程じや。是から互に京大阪へもきなば足も腰もたまるまひ。爰が名にたふ天王山の嶺京も大阪も一面に見わたす所じや。ナント互に足つまだて脊のびして。見物したら。足のいたさを助からふと。相互に相談きはめて。両方がたちあがり。足つまだてゝ向ふをきつと見わたして。京の蛙が申まするは。音にきこえた難波名所も。見れば京にかはりはない。術ない目をしてもかふより。是からすぐに歸らふといふ。大阪の蛙もめをぱち〳〵して。嘲笑ふていふやう。花の都と音にはきけど。大阪にすこしもちがはぬ。さらば我等もかへるべしと。双方互に色代して。又のさく〳〵と這ふて歸りました。これが是。れもしろいたとへでござりますれど。ついは御合點がまゐりにくからふ。蛙はむかふな見わたした心なれど。目の玉が脊中についてあるもの。ヤッパリもとの古さとを見たのじや何

んぼほどにらんで居ても目の付所のちがふてあるには氣が付かぬ。うろたへたかひるの話しよう聞て下さりませ或人の發句に「手はつけど目は上につく蛙かな。」おもしろい發句でござります。ハイ〳〵畏りました。左様〳〵御尤でござりますと。口にはいへども目は上につく蛙かなで。おれが〳〵の向ふみず。是を放二其心一而不レ知レ求と申ます。なんぼおれが〳〵で物をやり付うとしても。中々おれがの細工では出來ませぬ。斯様に申せば。おれがからだで。おれが働きおれが錢をまうけて。おれが口におれが物をくふのじや。人さまの御世話にはなるまいし。おれがでなふてどうして世間がわたられるものじやと。滅多におれがをいふ人があるものじや。是はきつい了簡ちがひ。御上様の御政道がなかつたら。一日もおれがではゐられぬ。昔一の谷のいくさのとき。源義經公が。丹波の三草から攝津國へおしよせらるゝとき。山中に日を暮して。案内はしらず。武藏坊辨慶をめして。例の大松明をともせと御意なされた。辨慶畏つて。諸軍勢に下知をつたへ走りちつて。谷々にある家々に火をか

けますれば。一ヶ面にもえ上る。此火のひかりを便として。一谷へ出られたと
承ります。爰を能うかんがへて御らうじませ。是はそれが藏じやの。是はそれ
が家じやの。これはそれが田地じやの。是はそれが娘じやの。是はそれが女房
じやのと。どの樣にそれがそれがをかつぎあるいても。天下のみだれてゐる
ときは。スッポンの間にも合ませぬ。有がたひ事には四海太平にをさまり。御
仁政のいたらぬ隈もなく。それ〳〵の御役人さまが。夜のまもり晝のまもり
を御まもりなされてござればこそ。屋根の下に寐てはゐらるれ。どうして
それが細工で手足のばしてねてゐらるゝものではなひ。雨戸をしめた敷表
の戸を〆たかと吟味しまはつて。まづこれで用心よしと落付て御やすみな
さるの用心はどんな用心じや。四分板一まい。しかも裏表からけづりて貳
分板壹まい何ほどの用心じやぞ。大きなれならしてもひいきわれる位じや。
それを盗賊がてはがつて這入るまいか。ナト思案して御らうじませ。皆こ
れ御上樣の御仁徳。けつかうな御代にうまれ合した。冥加のほども思はず

に。おれが〳〵と氣隨氣まゝをいひつのつて。こちの身代は千貫目。仰向けにねてゐても。五百年や七百年はあそんでくふてゐられる。藏が五とまへ家屋敷が二十五ヶ所。かしつけの證文が三百貫目これほどあると。土佐れどりして寝ても五十年や百年は貧乏する氣づかひはないと。脊中に目のある蛙了簡むかふ見ずの胸算用大丈夫な御要害じや。何んにも賴みにはなりませぬ。寐てゐるうちに彼の大松明にならふやう。大地震がれてこらふやう知れぬが浮世のありさまでござります。此賴まれぬといふについて。今一ッ話がある。眠さましに能う聞て下さりませ。アノ榮螺と申貝は手丈夫な手厚ひ貝でしかも丈夫な蓋があるソコデあの榮螺が何ぞといふと。うちからふたをぴつしやり〆て丈夫な事じやと思ふて居まする。鯛や鱸がうらやましがり。コレさゝゐや。おまへの要害は大丈夫なものじや。うちから蓋をしめたがさいご。外からは手がさせぬ。さりとては結構な身のうへじやといへば。榮螺が髭をなでゝ。おまへ方が其樣にいふてくれるけれど。あまり丈夫な事もない。しか

しながらマアこふしてゐれば。まんざら難儀なともないと卑下自慢をしてゐるとき。ざつふりと。音がする。榮螺がうちから急に蓋をしめてじつと考へてゐながら。今のは何であつたしらぬ。網であらふ歟。釣針であらふ歟。是じやによつて要害が常にしておいと。どうもならぬ。鯛やすゝきは取られたかしらぬ。さても心もとない事ではある。シタがまづれは助かつたと。兎角するうち時刻もうつり。モウよからふとろつと蓋をあげ。あたまをぬつとさし出してろころを見まはせば。何となふ勝手が違ふやうな。よく〳〵みれば魚屋町の肴やの店に。此さゝゐ十六文と。正札付に成てゐましたナントれもしろいはなしでござりませうがれ〳〵を引さらへて。家も藏も。智惠も分別も。臺も後光も。丸でとられてしまふた事はしらず。氣のどくな榮螺。この樣な連中が。からや天竺には得てあるものでござります。とかくれ〳〵はたのみにはなりませぬ。ある人の道歌に
「はしなふて雲のそらへはのぼるともれ〳〵はたのまれはせず。是を放ニ

其心而不レ知レ求と仰られたのでござります。何事もわが身へ立かへつて。手まへの吟味には氣もつかず。たゞ向ふへ〳〵と目のつくが放心でござります。放心じやといふて心が飛でしまふのではござりませぬ。身に立かへる事の出來ぬのじや。すべて是まで申ところは。金銀財寶の事ばかりではない。器量をたのみ。奉公をたのみ。智惠をたのみ。分別をたのみ。力をたのみ。格式をたのみ。これさへあれば。大丈夫じやとれもふてござる人はみな。榮螺の御連中じやとかく何事も身にたち反て。御吟味が御肝要でござります 休息

人有二雞犬放一知レ求レ之有二放心一而不レ知レ求○學問之道無レ他求二其放心一而已矣○是は孟子たとへを以て御しめしなされたのでござります。雞犬とは犬にはとり。すべて飼猫あるひは鷄など。いつも家へ歸る時分にかへらぬと。其飼主がうろうろとたづねまする。犬にとられはせなんだ歟。蛇にとられはせぬ歟。もしや人がぬすんだかと。向三軒兩隣。まよひ子を尋るやうにモシこちの三毛はこなたには居ませぬか。鷄はまゐりませぬかと。たづねあるくは人情

でござります。こゝが入用のところじや。犬鶏は紛失しても格別害には成ませぬ。心は身のあるじと申て。一身の旦那様じや。そのこゝろが物のために奪はれると。親のいけんも耳へいらず主人の教訓も空ふく風。蛙のつらに水かけた様に。目ばかりぱち〱して口にはハイ〱といふてゐれど。心こゝにあらざれば見れどもみえず。聞けども聞えぬ。うまれもつかぬ片輪ものゝ仲間入これは是。みな心の紛失してあるに依てじや。此こゝろを尋ねやうともさがさうともれもはず。親がわるい。主がわるい。夫がわるい。兄がわるい。八兵衛はわるい奴じや。れまつはいけぬ女じやと。むかふへばかり目を付て。我身にたちかへつて心を尋る事はせぬ。ナントむごひ事じやござりませぬか。犬鶏は尋ねても肝心の心はたづねぬ。よくうろたへたものでござります。是じやに依て聖人はこれを御歎きなされて。人の道ある事を御しめしなされて下さる。此御示しを承はるを學問といふ。其學問の趣意は此心をたづねさがすのでござります。故に學問之道無他求其放心而已矣と仰られました。而已

とは盡きくて餘りなきの辭心を求むるの外別に學問らしいものはない
と。急度御うけ合なされた御證文でござります。強ち唐やまとの古事來歴を
知り文字の穿鑿ばかりするを學問とは申ませぬ。兎角心のとじや。八千余卷
の經論も。諸史百家の書物も皆心のもくろみをしるした所書でござります。此
心を求るとは前以て申す我身に立かへる事でござります。立かへる事をし
らぬと恐ろしいものじや。どこまで往ふやら知れませぬ。又立かへると有が
たいものじや。孝子にも忠臣にも立どころに成られまする。善惡二ッは身に
立かへるとかへらぬとの二ッの境。道二ッ仁と不仁と仰られたも御尤でござ
ります。是に付て恐ろしい又有がたい話がござります。御ねむからうが聞て
くれなされませ。去る田舍に相應にくらす百姓がござりましたが。夫婦の
中に男の子一人。ナニガ可愛さのあまりに。牛が子をねぶる樣に愛だてなう
そだて上られました。ソコデその子が次第に横着ものに成り。馬の尾を拔た
り。牛の鼻をくすべたり。近所の子たちを假初にもたゝいたり泣せたりわや

くの中に成人してどう〳〵手にあまる不孝者。小力はある。大酒はのむ。小博奕はうち覺へる。いつしか神事相撲を取覺え。かりそめにも喧嘩口論。女郎買やら妾ぐるひやら。たま〳〵親達が意見すると。大聲をあげてはりこみをくはせ。こなた衆が放蕩者じやの不孝ものじやのと。其不孝ものは誰がたのんで生んだのじや。われはうんでもらふて迷惑してゐる夫ほど放蕩ものがきらひなら。元の處へおさめて貰はふ。ろうするとたれもたすかるなどと。滅法なロごたへ。親たちも詮方なふ。其身はめん〳〵年は寄る。息子は次第にいきりをる。可愛ひと仕様がないとて。勘當も得せず。氣隨氣まゝをさせておくといよ〳〵圖にのり。かしこでは投たの。こゝでは腕をねぢ折たのと。あら〳〵しい大喧嘩其たびごとに親達はいふに及ばず親類縁者の胸板に。釘うつ様に恐ろしい。悪黨ものがござりました。是はこれ腹のうちから此やうな。わんぱく者ではなけれども。たれが〳〵が増長して。心を取失ふたばかりで。此やうな難作もの。ナント放心は恐ろしい事じやござりませぬ歟。勿論親類縁者か

ら。親達へ勘當せいとたび〳〵催促はするけれども。何分一人子の事なりけふは勘當あすは義絶と。口ではいへども勘當もせず。徒にとし月が立て。かの横着ものが廿六才に成ました。次第に惡行はつのる。後々は親類縁者へどのやうな難儀をかけやうやら。怖氣が立たもの故。一同に評定して親たちへいふてやるには。急に勘當をさつしやれぬと。親類中各方と義絶をいたさねば成ませぬ。アノ息子をあのまゝにしておかれると。親類は申に及ばず村中へも。どんな難儀がかゝらうやらしれぬ。御夫婦には恨はなけれども。面々家が大事でござるによつて。義絶を願ませう歟。勘當をさつしやるか。有無の返事が聞たいといふてよこした。ソコテ親達もせんかたつき子もゑに。親類義絶になつては先祖へもすまぬ事。さらば今夜みな寄合をして下され相談の上願書をしたゝめませう。勿論親類中いづれも御連印下されねばならぬ。御苦勞ながら印形御持參にて。暮早々より御より下されいと返答しられた。古語に老牛犢をねぶり。牝虎子をふくむと。畜類でも鳥類でも。身にかへて子を可愛

がる。ましてや人のうへで其子を勘當せにやならぬ様に成たら。さぞかなしひ事でござりませう。これみな其子の放心から起る事じや身に立かへりさへすれば。波風もなうおさまるのに。さり迚は身に立かへる人がない。親は勘當しとむなうて成らぬけれども。子の方から勘當してくれと突付るにはこまつたものじや。近世德本上人の歌に

「これほどによれつもつれつする彌陀をあへて賴まぬ人ぞはかなき。是はこれ佛の大慈大悲をいふのじや。我方では本心がそれはわるひこれが能ないと。明てもくれても御世話をなさるれど。身贔負身勝手の私心私欲が。そうはまゐるまいと。兎角本心にそむきをる。親の子をおもふも。不孝ものゝ親を思はぬも。能う似たものじや。あへてたのまぬ人ぞはかなき。銘々本心に立かへつて御助かりなされませ。さてかの野耳息子はこの日近村で博奕をうつてをりました。折から村の友達が來て。今夜貴樣を勘當すると親類が集會するげな。何んぼ貴さまのやうなものでも。勘當しられたら定めて難儀をするで

あらふと。半分きかずに大聲あげて。何じや今夜おれがうちで勘當の評定歟。こいつ面白いことが出來てきた。全体親父や母者のほえづらが。此とし頃見とむなふて氣色がわるうて。こたへられたものじやない。勘當うけたら一本だち唐へ飛ばふが天竺へ宿がへせうが。誰歟点のうち人がない。このやうなありがたい事はないぞ。さらば今夜評定の席へ乘こんで。何でおれを勘當するのじやと。一番團十郎をふんでもすりかけたら。五十兩や七十兩の退代は巾着へ入れたやうなものじや。其金持て京歟大阪へ出て見せ付やはじめたらおもしろい事であらう。ドフゾ今夜首尾よう山のあたるやうに。前いはひに一盃せうと。同じ仲間の悪鬼たちと茶わん酒の大酒もり。日のくれまへに泥のやうに醉たところで。さらば此勢ひに内へいんで。一ト勝負はつて來うと。大脇ざしをぼつこみ。我が居村へ歸つた時分は丁度初夜まへ。大かた今時分は親類どもがより集り。ない知恵の底ふるふて。評定をして居るであらう。うの所へおどり込んで。大だゞけにだゞけたらば。百兩ぐらゐはつかめるであ

らうと。既に我が家へ帰らふとしたが。きつと思案し。親類よつてゐる中へ。おれが顔を見せたらば。皆俯ひて居れるであらう。其中で大聲あげるも何とやら柏子がなひ。おれが事をあしさまにいふて居る其圖にのり。躍りこまぬと座つきがわるい。コイツハ一ばん思案を仕かへて。うらの藪から座敷の縁さきへまはり。一家のやつらが評定を立聞したら。さだめておれがあくぞもくぞを店れろしするであらう。其柏子に戸障子蹴破大がみなりと出かけたら。柏子があつておもしろいと。ひとり思案し。雪踏をぬいで腰にはさみ尻引からげて裏の藪から。切戸をこね椽さきへ廻つて見れば果して内にはひろ〳〵と。評定の最中雨戸のすきから覗て見れば。親類縁者が車座に直り。めん〳〵願書に判をおしてゐる。その願書が両親の前へくると。かの息子がこれを見てサアこゝが勝負じや。親父が判を仕やるを相圖に。この戸を蹴やぶつて飛込ふと。居合でしに成て息をつめてのぞいてゐる。ナント人もおそろしい心になれば成ものではござりませぬか。孟子の人の性は善なりと仰られたる

に。微塵も違ひござりませねども。其習性となるときは。此やうなおそろしい惡黨ものが出來まする。此とき孔子孟子が千日道を御ときなされたとて。立かへりさうな勢ひじやない。かう堅まつた惡人は。むけん地ごくの釜こげといふものじや。たとへ釋迦如來が元服して土佐おどりをめされても中々性根のつきさうな事ではないが。不思儀に此のらむすこが。惡心をひるがへして。大孝行の人になるといふ。是からが成佛の段でござります○人の親の心はやみにあらねども子をおもふ道にまよひぬるかな。かの親たち夫婦のまへに勘當の願書がまはつてくると。母親は大聲をあげてなき出す。爺親は齒もなきはぐきをくひしばつて。さし俯ひてゐらるゝ。やがてくもつた聲で。おばゝ印形を取つてござれ。母親は返事も出かね。なく〳〵簞笥のひき出しから。革財布に入つた印形を。爺親のまへにおくと。彼のら息子は。雨戸のそとから息をつめて伺ふてゐる。其うちにでて〳〵と財布の紐をとき。印形をとり出し。肉をつけて。既に判をおさふとするとき。母親がその手にすがつて。先ッ

待て下されといふてゝ親は此期におよんで親類中が見てゐらるゝ。未練な事をいはしやるなど。いへども聞かず。マア私がいふことを聞て下され。尤あの不孝ものに。此家を譲たら。三年たゝぬうちに草をはやすでござらう。それがかなしいといふて。天にも地にもタツタ一人の子を勘當したら。跡へかはりをもらはねばならぬ。其貰ふた養子が實体で。こちら夫婦に孝行をし。家も相續してくれゝばよけれども。どふもたしかに養子は孝行なと定まつた事もござるまい。モシその養子が不心得で。家を野原にせうやら。此方等のやうな肩のわるい夫婦なれば。そのほども知れぬではござらぬ歟。おなじ子ゆゑにつぶす身代なら。悴のために家をうしなひ。なじんだ村をたち退て。夫婦袖乞になるとも。我子の尻からついて歩行たら。わしは本望におもひます。五十年このかた。一生に一度のねがひ。ドウゾ聞入れて勘當をやめて下され。子ゆゑに乞食をすると思へば。恨にもおもひませぬと。聲をあげて泣々いはるゝ。親類もこれを聞て。一同に顔を見合せ。親父が何といはるゝぞと。まもりつめて

見ておれば爺親は何れもふた敷印形を財布へいれ手ばやに財布のひもをしめて。かの願書を親類のまへにさしもどし。さて〳〵一家中へ對して。面目ない事でござれども。いまばゝがいふところ尤におもひますゆゑ。向後悴は勘當はいたしますまい。かういへば其あまい心でそだてた物ゆゑ。あの様な不孝ものが出來たと。定めて御まへがたが笑はつしやらうが笑はれてもくるしうござらぬ。勿論アノ悴を勘當せねば。この家がつぶれる事は。物三年もちはすまい。わが子ゆゑに。先祖代々の家を野原にするのは。先祖へ對してすまぬといふ事も。能う合点して居りまする。又勘當せねば。おまへがたと不付合になり。親類義絶も合点でござる。必定こちらが村を立のくとき。無心合力でもいはふかと。その用心の義絶であらうが。かならず案じて下さるな。世間の義理も。先祖への不孝も親類の義絶もかへりみぬのは。子が可愛ばかりその子の尻から乞食して付てあるく事なれば。此方等夫婦が本望といふもの。決して御まへがたへ無心合力はいひませぬ。ハテ何で死ぬるも一生じや。

可愛ひ子のために。大道にのたれ死。并木のこやしになるのも。このんですればうらみとはぞんせぬほどに。早々れまへがたも内へ引取て下され。翌日から物もいひませぬぞ。子もゐなら何といはれてもかまひはござらぬと同じく大聲をあげて男なきに泣るゝと。はゝれやも勘當せぬと聞て。これもうれし泣になく親類縁者はあまりの事にあきれ果て。返答もせずたゞ夫婦の顔をうちながめて居るばかり。ナント親の子に迷ふあはれなてゝろを御推察なされませ。猫が子をくはへあるくやうに蔭になり日向になり。人のそしりも先祖への義理も。わが身のつまらぬ行末もかまはぬこゝろ。子の可愛ひにとられ切て。迷ひにまよふた。親の心實にあはれに氣のどくなものでござります。是がこれ。此親たちばかりじやない。世間に子を持た親のこゝろは。みなこの通り。先師石田先生のうたに

「子にまよふ親の心を見るにつけ我がぞいろもかくやありなん」人の親の子に迷ふを見て。我父母もかくぞればしめさんと思ひやりて御よみなされ

れ歌じや。實に此通りに違ひはござりませぬ。此親の大慈大悲の光明がかの不幸もの丶腸へしみわたると。有がたいものじや。さしもおそろしい鬼のやうな横着ものも。五躰を〆木でしめらる丶やうに覺ゑ。何といふ事はしらねども。胸さきへ涙が突かけ聲をあげてなかれはせず。かます袖を口にくはへて。大地にたふれてしめ泣にないてゐる。圓位上人のうたに「何事のおはしますかはしらね共かたじけなさになみだこぼるゝ　能うよんだ歌でござります。此ときかののら息子が親をかたじけないと思ふたでもなし。又有がたいとおもふたのでもない。何かはしらず親の慈悲心がはらわたへこたへると。能うしたものじや。立ても居てもゐられぬ。これが是人々固有の本心といふて。あきらかな徳に生れ付てはゐれども。おのれが氣隨氣まゝの身勝手で。しばらくの光りをかくしてゐたのじや。されども親の大慈大悲の光明で。はらわたを貫かれ。自然と息子のもちまへの光明がさそはれて。輝き出すと。氣隨氣まゝのむら雲はいづくへやら。きゑうせて眞實ろことから親の慈悲が

ありがたふ成て來る「とくさかるそのはら山の木の間よりみがゝれいづる月のさやけさ。格別の悪黨ものが本心にたちかへると。一際すぐれてみがゝれ出る月のさやけさ。ナントありがたひものではござりませぬ歟。さて彼息子は。すぐさま座敷へかけこみ。親たちへ詫言せんとはおもふたが。まてしばし。此まゝ欠込たらば。親類縁者もおどろきいかなる事を仕出すぞと。親達も御こゝろづかひであらう。何知らぬ顔にて表口から座敷へ出。親類について詫言せんと一決して。しのび足に裏よりおもてへまはり。わざと雪踏の音たかく咳ばらひとゝもに座敷へ通れば。親類は大におどろき。親達は。にくひ我子の顔を見て夫婦とも泣てござると。かの息子も何もいはずにさしうつぶひてないてゐる。良ありて親類中へさて是までは勘當〳〵と度々聞ましたれども。さのみつらいとも存せなんだが。今夜の寄合とうけたまはり。どうした事やらしきりに心ぼそう覺ゑまする。何分これまでは重々の無調法此うへは急度あらためまするによつて。今夜の勘當しばらく御用捨を下されい。

永うとは申ますまひ。わづか三十日の日のべ。其うちに性根があらたまらずば。其時勘當しられても。一言も申分はござらぬ。ドフゾ御まへがたの御取なしで親達が三十日日延をいたしてくれらるゝやう。御詫をなされて下されいと。いつにない頭を疊へすりつけて頼む。此とき親類中は親達が手づよい返答に。ろの座しらけて立にもたゝれず。拍子のない折から。此息子が一言にこれ幸ひと一同に口をそろへ。今夜の所は待てやつて下されと詫言する。親たちは本心に立かへらいでさへ勘當はせぬ心。まして今の一言を聞て。たゝうれし泣にないてゐらるゝ。親類もこれをしほに。隨分孝行にさつしやれと。云捨て。其夜の評定はやみました。これから彼息子どのが手のうらを反す樣に孝行な人になり。二親につかへるありさま。實に小兒の父母を慕ふがごとく。惡行はおどかたもなく消失せました。此事世間に取沙汰がたかうなり。半年たゝぬうちに。御地頭樣の御耳に入り。ついに御目がねを以て。大庄屋役をかの息子に仰付られました。是でかの息子の孝行のしわざ。御推察なされま

せ。さて其のち三年ばかり立て。母親が大病末期にかの息子どのをよんでいはるゝには。いつぞや勘當の評定の節より何とれもふたか志があらたまり。此うへもなう孝行にしてくれる。モシ其時にそなたの心が改まらず。其うちにたれが死だらば地獄へもかうより外はない。今は其方が孝行にしてくれる。何もたれもふとがないもゑ。今死だら極樂へもくにちがひはない。スリやそれを佛にしてくれるは皆其方が孝行のもゑじやと手をあはせて拜みながら臨終をしられたと申事じや。なるほど當來の果を以て未來をしるとての世で心くるしければ未來もまた心苦しい。今日の手たくれはあすへ付てまはる。心の苦しいは地獄。心のらくなは極樂。親の苦樂は子たるものゝ所作にある。子善なれば親は佛。子惡なれば。親は鬼になりまするぞへ。一旦若氣のあやまりで何の分別もなう。親に心づかひ懸たり。親をなかせたりの不孝も此道理をわきまへて。今日たゞ今こゝろざしをたて直し。我身に立かへつて。孝行すれば親御樣は今日から極樂ぐらし。又立かへるとがならいで是まで

の不行狀がやみませぬと。親御は其まゝ地獄ぐらし。地獄極樂はたゞ身にたちかへるとかへらぬとでござります。このたち反るを放心をもとむるといふ。是すなはち學問の事じや。猶またあとは明晩御はなし申ませう下座

孟子曰。今有二無名之指一屈而不レ信。非二疾痛害一レ事也。如有二能信一レ之者一。則不レ遠二秦楚之路一爲二指之不一レ若レ人也。指不レ若レ人則知レ惡レ之。心不レ若レ人則不レ知レ惡。此之謂レ不レ知レ類也。さてこれは前晩辨じました。仁人心也の次の章でござります。則學問之道無レ他。求二其放心一而已矣といふ言によつて。孟子また。たとへを引て。人の心の大切なることを御しめしなされたのでござります。今とは今こゝにと申す事じや。無名の指とは小指の隣の指でござります。其外の指は親ゆびを大指といひ。人さしゆびを頭指といひ高々指を中指といひ。小指を小指と申ます。たゞ小指の隣のゆびに名が無い。尤紅さし指とは申ますれど。是は御婦人がた斗の事で。天下通用ではござりませぬ。ツコデ名のないが名と成まして。無名指と申ます。なにもゑまた名がないぞといふに。トンド用

のない指じや。物を握るは親指小ゆびの力。つむりをかくは人さし指。酒のかんを試るは小指の役。皆それ／＼に用があれども。無名指ばかりは無用のゆびあつて邪魔にならず。なくて事はかけませぬ。一身のうちにて。尤輕ひものじや。其指が屈でのびぬ。勿論いたみもかゆみもない。故に疾痛事に害あらずと申てある。畢竟なくても苦しからぬ指なれば。まがつて有ても。いたみさへなくば捨ていて能い筈なれども。もしこれをよく信してくれる醫者どのがあると聞たら。道の遠いもいとはず。さだめて療治をうけにゆくであらう。それは何ゆゑ。指が世間の人と少し違ふてあるゆゑ。恥かしうればねて療治をうけまするのじや。晋楚の路とは。晋の國と楚の國とは道法が千里。これは遠いところをいとはずといふたとへじや。是其指の人なみにないをいやがるから參ります。ソコデ指の人にしかざるが爲なりと申てござります。成ほど能う人は恥を知つたものじや。其筈でござります。羞惡之心義之端と申て。恥をしるが人の生れつきしかしながら其恥をしるに二樣でござりまして。姿

の恥を知つて。心の恥をしらぬ人がござります。是はきつい御了簡ちがひじや。心ほど大切なものはござりませぬ。心は身の主と申て。一軒の内では旦那どのも同じ事じや。其旦那どのゝ心が煩ひくるしんでゐるを捨て置て。家來のからだばかり可愛がり。膝がしらすりむいた。ほくちを付い。灸がいはふた膏藥はれ。風ひいた葛根湯根ぶか雑炊。生姜ざけと。かりそめにも身体の御世話はあされますれど。心の事は一切御かまひなしじや。人にうまれて人のやうな心ももたず。鬼のやうな心を持たり。狐のやうな心をもつたり。蛇のやうな心を持たり。烏のやうな心を持て。恥かしいとも思はず。からだばかり吟味してござるは。どういふ所から間違ふてきたやら。此間違はふるうある事と見ゐて。指不レ若レ人 知レ悪レ之。心不レ若レ人則不レ知レ悪此之謂レ不レ知レ類と孟子もおほせられた。是は重いとかるいと分らぬのじや。大を捨て小をとると申ものでござります。人情は一般。小は嫌ひ大はすき。輕ひはきらひ重いはすきじや。ソコデ親類縁者へまねかれて御馳走にあづかるとき。本膳が出るあとから

燒物を引てまはるとはや目の玉がきよろつき出し向三軒両どなりをにらみまはし。わが燒ものと見くらべて。隣のやき物が五六歩ほど大きいと。肝積がむねにつゝはり。これの亭主は何と心得てゐるぞ。太郎兵衛も御客おれもおれ客じや。なんでおれにはちいさい燒ものをつけたのじや。何ぞこれには意趣遺恨でもある事歟と。腹の中がねぢれ出す。能うおもふて御らうじませ。燒ものに何の遺恨があるもの。是ほどの僅な事でも小をきらひ大をとる。夫に何ぞや指のまがつたのを恥かしう覺て心のまがりは苦に成らぬといふは。大をすてゝ小をとると申ものじや。さるによつて孟子も此之謂レ不レ知レ類と御しかりなされた。ナント人は能ううろたへたものじやでござりませぬ歟。古歌に「かたちこそ深山がくれの朽木なれ心は花になさばなりなん」指や足にかゝはつた事じやござりませぬ。肝心のことじや。心がまがつて有ては。色は白からうが鼻すぢは通つておらうがはえ際がうつくしからうが。夫は見せかけばかりで。何のやくにたゝぬ事。蒔繪の重箱に馬の糞入たやうなものじや。

これをほんの見かけ倒しと申ます。飯たきのおさんどのが。ながしもとで鍋の尻をおらふてゐる。丁稚の長吉が側へ來て。おさんどん御まへの鼻のさきに墨がついてある。見ともないと教へてくれる。おさんどんは嬉しがつて。そうかへどこに付てあると。指のさきに手拭をまいて。額口でおのれが鼻の先をながめ後藤が目貫をはるやうに。そこら中ひねくりまはして。長吉どん。モうとれたかへ。イヤ／＼ほうべたの方へ餘計になつたドレ／＼どこにと水鏡に顔をうつして掃除してござる。おさんどんの心には。アノ長吉どんは可愛らしい子ども衆じや。晩の御菜を杓子あたりで御禮申さにやなるまいと。滅多にうれしがつて。禮をいふ。もし此長吉どのが。コレ／＼おさんどん。御まへの根性はしぶとい根性じや。チットふくれづらやめなされといふたら。お三どんが何といふであらうぞ。チト考へて御らうじませ。おたなめくさつた小丁稚づら。わしが心がもがんであらふが。三角に成てあらうが。おのれが世話になるもの歟。おのれ覚えてけつかれ。小便たれてもゝふどんの洗濯はして

やりはせぬと。角のはえぬ鬼の様に成まする。これはれさんどんの事ばかりじやない。イヤナニ軍太兵衛どの。御上下の御紋がすこしかたよつて見えまする軍太兵衛しかつべらしう肩衣を正して。コレハ〳〵御氣を付られ千萬忝うぞんずる。何也とも相應の御用もござらば承るでござらうと嬉しさうな顔して挨拶せらるゝ。いつが間違ふて。時に軍太兵衛どの。足下の御心術す以て其意得ませぬ。チト心を正直に御持なされ。心のゆがみが見えて甚だ見ぐるしうござるといふたら。どうするであらうぞ。刀にそり打て。鍔うちならし。忽ち刃傷にもよぶであらうナソト人はからだのよ世話してやると滅多にうれしがつてなほす。心のせわをする人があると眞黒になつて腹をたて。その心を直さうとせぬは。どういふ柏子の間ちがひで。是ほどまで迷ふたものでござりませうぞ。是はよろの事ではない。御たがひに大歟小歟。色かへ品かへてんな間ちがひは得てありたがるものでござります。よう御吟味をなさりませ。是がこれ形は人の目にかゝれども。心は人の目にかゝらぬものぞ。

やがんで有てもまがつて有てもくるしうないと。此無分別かられてる事じや。是じやによつて少しも油斷はなりませぬ。ある所の旦那どのが。臺所に居[illegible]てゐる長吉をよび起して。コレ長吉。御客さまがもう御歸りなされた。奥にある酒やさかなを。臺所へはこんだがよい。長吉目をこすり〳〵。ふせう〳〵に返事しながら。奥へ往てそこらを見れば。硯蓋やら小鉢やら。うまいものゝ勢ぞろへ。こはいゝものじや。誰が催促もせぬに。目の玉がきよろつき出し。なんじやこいつは味さうなものがたんとある。硯ぶたは鷄卵の卷燒。タッタ一ト切はかのこつてない。よう喰客じや。こいつは何じや。ハヽア蒲ぼこじやさうなと。ひと切つまんで口へほうばり。側をみれば。飯蛸が七ッ八ッ。南京のどんぶりの中に。車座に座禪してゐる。こいつはゑらいとつまむところへ。旦那のあし音。これではならぬと袂へれしてみ。銚子盃を俯伏てとる拍子に。飯蛸がたもとからころ〳〵と。旦那目ばやくこれは何じや長吉ぬからぬかほで。蛸をたゝいてたとつひこい〳〵と申ました。何んぼ蜘蛛あしらひにしても。飯

蛸は蜘蛛には見ゑぬ。隱たるより顯はるゝはなしじや。これじやによつて。人の心は隱されませぬ。心に怒があると額に青すぢがたちまする。心にかなしみがあると目になみだがうかみ。心にうれしみがあるとほうべたにゑくぼが入り。心にをかしみがあると。笑ひ顔に成まする。是みな心よりして顔へ出まする。目に涙が出て。心がかなしうなるのではござりませぬ。額に筋が立てあとからはらの立のではござりませぬ。何事も心がさきじやぞの心にをも示所は皆かたちへあらはれまする。これを誠於中形於外と申ますナント是でも心のゆがみがかくされるものでござりませう歟。口答も心の煩ひ。鼻うたも心のわづらひ。早う養生をいたしませぬと立煩ひは。本腹がむつかしいもし大病に成ましては耆婆扁鵲が配剤でも。どうもいたし方はござりませぬ。さるによつて。其大病にならぬうち心學を御すゝめ申まする。一度本心を御ゑとくなされまするど。奇妙なものじや。ちよつとした身贔負身勝手でも直に胸へこたへまする。これについて。ある人前かた物がたりのついでに。さ

る両替屋の主人の得意のはなしなりとて申されたるは。兩替渡世は。金銀のよしあしを見分るが肝要じや。其見わけ樣を小者にをしゆるに。其家々にて違あれども。この兩替屋の主人のをしへかたは。始より少しも惡銀を見せずたゞ宜しき銀を日々に見せ置しかとよき銀を見覺へたるころ。ソト惡銀を見すれば忽にあしき銀としる事。鏡をてらして物を見るがごとし。これ一目下に惡銀と見極る事は。最上の銀を見覺ゑたるゆゑなり。かくのごとくをしゆる時は。この小者生涯惡銀を見損ずる事なしと申されたるよし承はりました。此はなしの眞僞はぞんじませねども。道理にかなふては成ほど尤なをしへかた。實にあぶな氣のない稽古でござります。しかしながら最上の銀を見覺ゑても。半季一年。外商賣をして。金銀を取あつかはぬと。又もとの素人方同樣になりて。よしあしを見分る事が出來ませぬと申されました。是でよう御合點をなされませ。一たび本心を見覺ゑますると。其あとから。すこし斗の身贔負身勝手が出來ても直に知れる。なぜなれば本心のあきらかなる。無理のな

い事を見覺た故ちよつとでも無理らしい事は中々うけつける物ではござりませぬ。しかし又本心に遠ざかり本心を見わすれると。以前の通り眞黒に成て。惡銀が見ゑにくうなりまする御用心をなされませ。わるうすると本心じややら惡心じややら。我とわが手に合點がゆかず。そのくらい心から。たれもひつくほどの事が思ふやうにゆかぬとハアスウ〳〵と肩で息をせにやならぬ。難儀なものじや。せめてだまつてなとゐれば能けれどかり初にもくるしいせつないと。腹の中のゆがみを人にあふては白狀をいたしまする。さりとてはこまつたものじや。是じやに依て何とぞ一度本心の正銀を見覺ゑ。人欲の惡銀を見損せぬやう。どうぞ御互に一生道にはなれぬ樣にいたしたうござります。これに付てれもしろい咄しがある。序に聞て下さりませ。秋も夜さむになりました頃相應にくらす町人衆が。五六人云合て鹿の音をきゝにゆかうと。何か辨當小竹筒を用意さし。ある山寺に心やすい和尚がある。これを心あてに尋ねゆき。客殿をかりうけ。とまりがけの遊山。鹿の音をまちわび

て歌をよむ人もあり。あちらでは詩を作り。こちらでは發句。さいつ押へつ。入相のころになつても。トントン鹿がなきませぬ。初夜になつても四ッになつても鹿の音は一切聞えず。これはどうじや。モウ鹿がなきさうなものじやと。まてどもなか〳〵うろ〳〵眠氣はさいて來る詩も歌もいやになり。あくびにうき世噺もとぎれ。みな默然としてゐる中に五十ばかりの男。盃を前にひかへて。さて今晩はいづれもさまの御かげで。宵からゆるりと御物がたりをいたして。能いたのしみをいたしました。しかしながら私はか樣に樂しんで居ますれども。さだめて家内のものが心づかひをいたして居ませうと。不圖ぞんじ出しましたれば。どうやら酒が裏に入るやうに覺えまするといふ。座中の人が。夫はどういたした譯でござりますぞ。サア御聞下さりませ。御ぞんじの通り一人の忰。當年廿二歳に成ますが。去とてはてまつた奴で。私が宿に居ますれば。しぶらてぶらと店の用を手傳ひますれども。私のかげが見えぬと。尻に帆かけて遊所がよひ。勿論親類縁者どもゝいろ〳〵と教訓をいたしてく

れますれど。一向馬の耳に風同様。アノやうなやつに身代をまかさにやなら
ぬかとぞんじますれば。心細いものでござります。おかげで何に一ッ不足の
ない私の身分なれども。子ゆゑに毎日毎夜血のなみだ。さりとては。こまつた
ものじやと吐息をついて咄されると。傍から四十五六ヶ男が。イヤ〳〵あな
たのは御難儀とは申ものゝ。畢竟御子息に金つかはるゝといふ迄の事で。強
て御心配にもござりますまい。私などは中々左様な事ではござりませぬ兎
角近年店のものどもが。假初にも引負をいたして。五十両はまゝよ。七十両は
まゝよと。年々の帳面の明き。能うればしめして御らうじませ。鼻たれの時分
から世話をいたして。どうやらかうやら。少しばかり店の用にたつ時分。引負
をこしらへてくれては。主人は何に成まするものじや。それから見れば。あな
たのは我子に金をつかはるゝばかりの事といへば。まだかたはらから。イヤ
〳〵店の衆に金をつかはるゝはまだしもじや。此方どもは近頃都合がわる
うござつて。得意さきが。かたはしから倒れまする。あちらでは三貫目。こちら

では五貫目實に氣の減るやうにござりますといふ下から。向ふの席にすはつてゐる老人が。扇ばち〳〵ならしながら。何れもの御愁歎御尤でござれども。又親類縁者どもから。金の無心をいはれたり。印形をしてくれといはれたり。家内づれのかゝり人。これもまたこまつたものでござりまする。半分いはさず隣の人が。イエ〳〵いづれも樣のはみな榮耀じや。私のつらい事を御きゝなされて下さりませ。どうした事やら。家内のものと。母との中がわるうござつて。日がな一日牛の角づき合。内中がくすぼりますゆゑ。イッツ里へ歸しませうと思へば。幼少のものは二人も有。挨拶すれば女房の贔負をすると。母親の機嫌がわるうこねまする。女房を叱れば。他人じやと思ふてひとりむごうつらうさつしやると恨み。イヤモウ中にたつた柱で。つらいの苦しいのと申やうな事ではござりませぬと。拍子にかゝつて。身のうへの難儀ばなし。其内に一人氣が付て。ほんにモウ鹿が鳴さうなものじや。あまり咄にしこりが來て鹿の音を聞はづした歟しらぬと。椽の障子を引あけてみれば。大きな鹿が

庭さきに歎然としてゐる。是はどうじや。ろとにゐるなら。なぜさつきにから鳴ぬぞといへば。鹿がぬからぬ貌で。イエ〳〵わしはおまへ方のなくのを聞に来たのでござるといふた。チントおもしろい咄でござりませうが。老たるも若きも。男も女も金の有も金のないも。おしならして。晝夜愁歎のこゝろはやみませぬ。これが皆心の煩ひじや。畢竟すこしばかりの身びいき。身勝手のために。ならぬ事を無理やりにやり付様とする無分別から。さま〴〵の苦をうけるのでござります。一たび本心を會得すれば。ならぬ事はならぬと知り難儀な事はなんぎと合點して。強て身を遁れうとはいたしませぬ。是を中庸には富貴貧賤夷狄患難君子入として自得せずといふ事なしといふてござりまする。此味がしれませぬと。苦樂は躰にあるやうに覺へて。心はわきへ捨て置て。ひたすらに形の樂をもとむるところから。奢にうつり吝嗇になり。却てこゝろに苦をうけて泣てばかりゐる様に成まする。兎角何事も心の事じや。ドウゾ皆さま御なきなさらぬ様の御用心を御たのみ申まする 休息

「心からよこしまにふる雨はあらじ風こそよるの窓はうつらめ。此うたは高祖日蓮上人。身延山御隠居の節の御詠歌でござります。人の心は眞直ながらうまれつき。其心のゆがむのは。是みな見たり聞たりするに取らるゝによつてじや。たとへば雨は眞直にふるもの。なぜなれば。空より下へおちるもの故。ゆがんで落る筈はないのじや。夫に窓へ横しぶきにあたるは。畢竟かぜのためにゆがむのじやと。御よみなされた歌でござります。論語に子曰人之生也直罔之生也幸而免と申てなるほど。人は正直にないと。天地の間には起てゐられぬ筈の事なれども。こゝろをゆがめて。まで／＼と生てゐるのは。ほんの是がこぼれざいはひといふものじや。生てゐるとはいふものゝ。世間で人のやうには申ませぬ。その筈でござります。人の心がないによつて。生ながら鳥類畜類の仲間いりをせにやなりませぬ。わが神國の教へにも。正直を本とすとあれば。何分にも人はすぐでなければならぬ旅をして見ますれば。おもひ両掛を竹杖一本で輕々と肩やすめする能うかんがへて御らうじませ。あの

ほろい竹杖で二十貫目の重荷が。杖のさきにかゝつてあらう筈はない。これ全く竹杖を眞すぐにたてゝ置によつて。二十貫目の重荷がかゝつてもたれぬのじや。ある人の道歌に「すぐなればたもにかけてもたれぬなり。世わたるわざの息杖ぞかし。三間間口でも八間間口でも息杖は大極ばしら一本。五人ぐらしも十人ぐらしも。旦那どのゝ心ひとつで。家内中の重荷が持てあるのじや。もし旦那の心がゆがむと。家内の重荷がひつくりかへり。大こく柱に虫がいると。八けん間口がへたばつて仕まふ。兎にもかくにも。眞すぐな力は有がたいものでござります。大極柱に虫が入たのを。大工どのに見せると。建なほさうより仕様がないといふ。旦那どのゝ心に虫が入ると。これも同じ事で。燒直さうより仕かたがない。どふぞ虫の入らぬ間に。ゆがみを直すとがかんようでござります。加様には申すものゝ。誰じやといふても。我こゝろをゆがめうと思ふ人はなけれども。難儀なとは。見るにとられ聞に取られて。思ひの外にゆがみます。このゆがむについておそろしい咄がござります。ある御國

に三百石どりの次男としごろは廿ばかりの人。色情の事について。若氣のあやまりより。俄に出奔をする事あり。其節夏のころにて。ことさら夜分なれば。浴衣に大小のみ。袴もきず懐中ものもなく。城下へしのびて遊びに出たるまゝにて。其場よりの欠落なれば。もとより何の用意もなく。無二の朋友一人に。此事をあかし。いかゞはせんと相談をいたされました。其朋友も無分別なわかき人なれば。何の思慮もなく手紙一通したゝめ。其ところより七八里ばかり隔てたる。さる山寺の和尚にしる人のあれば。此寺へ行き此書状を出しなば。かくまひくれるであらう。國元の様子は。あとより追々しらすべき間。まづかの山寺にかげを隠されよと。をしへました。こなたも無分別な若ざかり。何の用心もなく心得たりと。かの書面を懐中して。かたのまゝにて城下をたちのきました。さりとては若い衆は無分別なものでござります。諺に若いは能がしどがないと親の案じる事も。ゆくさきのつまらぬ事も。道で難儀する事も。辨へのないは。夢のやうなものでござります。或人の道歌にわるいとはし

りつゝわたるまゝの川流れて淵に身をしづめけり。まんざら若い衆じや
とて。氣のつかぬのではなけれども。一度れもひつくと。能うてもわるうても。
一足あとへたちもどる事が出來ぬツコデ忽ち行あたり。鼻打つてから後悔
して。どんな事をしたてこれはつまらぬといふ内に。又つまらぬ事を思ひつい
て。我とわがでに淵に身をしづめけりじや。此咄の事ばかりじやござりませ
ぬ。兎角わかい御衆は平生のより所が大事じや。猫はなまぐさきをこのめど。
寺にかはれると據なふ精進する。蛇はのらくらともがむが持合せなれど竹
の筒に入れらるゝと據なふ。眞直に成てゐる。とかく身をよする所が大事じ
や。わかい衆はこのはなしを聞て能う腹の中へ。たち反つて吟味してごらう
じませ。どんな所へ入込で遊んでゐるぞ。中宿か料理や歟。女藝者のふるびた
所へ這入りこんでゐやせぬ歟。能う御せんさくをなされませ。扨かの御侍は
つゐに生れてから親の懐を一日もはなれた事のないのに。心からとて夜通
しに。知らぬ道を彼山寺へ尋ねてもく。是ほどのはたらきを主人歟親のため

にしたら。大な顔をなさるであらうに。どうやらこうやら。尋ねあたつてもきついた所が。山中の古寺。親のまへでさへかゞめぬこしを。滅多に御じぎし。彼手紙を出されると。和尚がうけとり。開いて見て。此手紙の様子ではまづ此方にしばらくござらずばなるまい。しかしながら小僧とてもなし。下男もつかはぬ貧僧でござれば。どうで水も汲んでもらはにやならぬ。其外ふきさうぢやら。又寺役のあるときは。穴も掘てもらはにやならぬ。マアそう心得て。そこらで。足を洗ふて上つて茶粥でもくはつしやれと。目見にきた門番へいひつけるやうに。舌長にいはるゝ。かなしい事は三百石取りでも。國を立のきてみれば。づぶ三文まふける術はしらず。路用とても一文もなし。さし詰め居さふらうのあたりまへなれば。口をしながらハイ〳〵いふて庭のすみで足をあらひ。和尚のくひ殘された。水くさい茶がゆを一ぱいすゝつて。夜通しのつかれもやすまる事歟。猿つかふやうに追まはされ。仕なれもつけぬはき掃除。ナンと氣の毒なものじやござりませぬ歟。此とき親の慈悲をおもひ出し。百ま

んだら後悔しても。あとへはかへらぬ。是じやによつて。足もとのあかいうちに。用心をせにや成ませぬ。かう成てからは鷄桶へ足をふみこんだやうなもので。國へもいなれず。寺にもゐられず。外に仕ればねた事はなし。是はつまらぬ〳〵と思ふうちに。秋もはや夜さむに成て來る。ある日和尚が朝から托鉢に出られたあとはそこらはき仕まひ。夫からはしよざいはなし。時は八月の中旬國から着て來たもかた一まい汗づいたのとよごれたので。どろ〳〵としてゐるを。晴着にも常着にもタッタ一まい。ソロ〳〵寒さには向ふて來る。せんかたなさに客殿の椽にねてころんで。猫のやうに丸う成て日向ぼこりしてゐながら。つく〴〵と思へば。おもふほど。とんとつまらぬ國からは便もなし。和尚の顔つきも。此ごろはめつきりわるし。寒そらには向ふてくる。どうしたら能からう。イッソ腹切うか。首括らう歟と。腹の中はかき亂したやうに成て見るともみぬともなしに。麓のかたを見やれば庄屋殿のうちが。日の下に見ゆる此寺は山の尾さきに建た寺で。客殿の椽から見れば。一村は日の下

庄屋どのは寺の樣から。人の見てゐるともしらず。村方のあつめ銀を數をあらため包み直して金戸棚の引出しへ入らるゝを。彼息子は乾と見とめると。ぞつとする程ほしう成たこゝが人の一大事の所じや室鳩巣先生の歌に「朝夕にたもつわが身はからころもたちゐにうつせ道のすがたを。心がこゝろの在所にないと。何時無分別がれこらうやら。こはいものでござります。是じやによつて。金銀の取あつかひはみだりに人に見せる物ではない。金銀は人の身にいたつて大切なものなれども。能く又人の身を害する媒となるものじや。何の心もない人でも。是を見ると何となう。心が出來る心なければ何ともない筈でござります。兎角恐ろしいものは金銀。人に罪をつくらすのも金銀。されどもなければならず。あれば煩はし。さてもふやうにならぬは浮き世のありさまでござります。何分程ようせねばならぬ事じや。時にかの息子どのが。庄屋の金を一ト目見るより。身にしたい〳〵と欲しう成て。どうしたら能からうと樣ばなにねころびながら胸算用。つく〴〵と足場を見るに。忍び

てむには究竟の家だち家内はわづかに五人ばかり。もし見とがむる者が有たら夫ころ百ねんめ。蹴ちらかしてあの金をこしにつけ幸ひ八月十五日。月は有りあけ。立のくには至極の勝手じや首尾よういたらば人しらず。盗取て。京歟江戸か大坂か。三ヶの津の間へ出て。どう成とも身のかた付は出來るであらう。所詮この山寺にいつまでゐたとて國へ歸らるゝわけでもなし。和尚のつらくせはわるし。身のまはりはうすし。イッソ今夜たち退が上分別じやと。無分別のてつへいをかんがへ出した。ナント恐ろしいは人のこゝろでござります。心は身のため斗をおもふもの歟と思へば又身をそこなふ事をおもひつく。尤本心は善ばかりなれども。かやうなときにうごくこゝろは意識といふて。得て惡を思ひ付やつじや。禪家の語に莫信爾之心心爾身之仇也といふてござります。成ほど油斷のならぬ心じや。ある人の道歌に「こゝろころ心まよはすこゝろなれこゝろに心こゝろもるすな。又大學の傳には小人閒居爲不善無所不至と。兎角からだを隙にれくは大きな毒じや。どうでのら

〳〵としてゐるとろくな事は思ひつかぬ。此息子殿も目くら歟イッツいそがしうて走りあるひたらこんな無分別はおこりはせぬ。大それた人のかねを盗んでまだ人をころして立退ふといふ分別がどういふ所から出ましたぞ。チト考て御らうじませ。むかしから家業を精出したものが盗をしたためしはない。盗をするものは皆家業がきらひじや。御たがひに身のうへに立かへつて商賣がすききらひか。折々せんさくして見ぬと。はらの中から何時石川五右衛門や熊坂長範が出まいものではござりませぬ。心に心ろもるすな。折角吟味が肝要でござります。ソコデかの息子が。いよ〳〵今夜と一決して。足場をとくと考へおき。首尾がようてもわるうても今夜のうちに十里の道ははしらにやならぬ。今のうちにとつくりと寐ておいて。晩につかれぬ用心せうと目をふさいで見ても。胸がもやつき寐入られぬ。どうぞ一ト寐入ねたいものじやと。今度は客殿の方へむかふて。ころりと寐返りをして内をうそ〳〵見まはせば。座敷のすみに六枚屏風がたてゝある。色紙がたの小倉百

首見るとはなしに見てゐるうち。ふと目にかゝつたは「あひみてののちの心にくらぶればむかしはものをおもはざりけり」何んとおもふた歟。かの息子が此うたを二三遍吟じて居るうち。俄にこゝろがかはつて來て。今夜の仕業をやめにする氣に成たら脇の下から冷汗がひつたりと出たと申事じや。これは何でにはかに善心に成たのでござりませうぞ。此歌は中納言敦忠のうたじや。歌のこゝろはおもふ人に一度あひましてからに。逢ぬさきの心とくらべて見ますれば。逢ぬ先きは物おもひがなかつたのに。逢ふてからのちは物おもひがたえぬと。よんだ歌でござります。今この息子どのも。此歌で心のたて直しが出來たのはなぜなれば。今此寺に居れば。國からはたよりはなし和尚の墨つきはわるし寒そらにはむかふ。小遣錢はなし。仕おぼえた商賣はなし仕付ぬはき掃除はくるしゝ是はつまらぬとおもふてゐるが。是をつまらさうとして。今夜庄屋のうちへ忍びこんで。金を取る歟。モシ見咎られたら切殺すか。よし金を盗みおふせたところが。天の網はのがれぬ。たとへ京大

坂へ出て立身出世をした所が盗人の名はのがれぬけふはあらはれる歟あすは召捕りにくる歟と。人のさゝやく聲も肝にこたへて。廣い天地の間に。五尺のからだの置處がない様に成たときの。つまらぬのと。今かうやつてゐる。つまらぬのとをくらべてみたら。盗をせぬさきのつまらぬ方が遥にましぢや。盗でからつまらぬときは。むかしはものをおもはざりけりと。其時後悔やくにたゝぬ。夫より此まゝじつと辛抱してゐたら。其内には國から便もあらう。滅多にうろたへる所でないと氣が付て。立もどりの出來ましたのは。ナントありがたい。歌の徳ではござりませぬか。一日に一字まなべば三百六十字。一字千金にあたると。高いものゝやうなれども。今この場所でみますると。中々高うはござりませぬ。若此男が無筆であつたら。此立かへりは出來ませぬ。三十一字がよめたおかげで。首が胴についてある。一字が千両なら三十一字で三萬千両じや。ナントあなたがた三萬千両の金を進上するが。首をおくれなされと申たらば。たとへ千萬両の金にでも替るいのちはないとおつしやら

うして見れば一字千金たかいものではございませぬ。どうぞおちいさい時から手習よみものを精を御出しなされませ。此やうな利益がございます。是から彼息子どのが年月をじつと辛抱してゐらるゝうち。國方から親類が來て。寺へも厚く禮をいひ。始て山寺の苦患をのがれました。しかしながら一旦出奔したものなれば•國元へは歸られず。そのまゝ町人に成て家業を精出された。ところが運よう•商賣も繁昌し。れき〳〵の商人に成て。能いかげんな親仁に成た時分。わかい人をみると。昔のさんげ咄に。かならず此はなしが出て。若いときにはどのやうな不了簡が出ようもしれぬ。もしあひみての歌がなかつたくらゐならば。どのやうな事にならうやら。今はなすもおそろしいと。毎度さんげばなしを懇意の人が承はりましたを。又私へはなされました。あまり有がたい事ゆゑ。今ばん御はなし申ます。此息子どのは能う立かへりが出來たものでござります。百人に五十人はこの立かへりが出來にくい。我身が可愛〳〵とおもふより。いつしか心を押ゆがめて。たはひもないものに成ま

する。目が可愛によつて面白ひものが見たし。耳が可愛によつて。三味せん太鼓の音が聞たし。鼻が可愛によつて。掛香や松がね油の匂ひがかぎたし。舌が可愛によつて。うなぎすつぽん茶碗むしがくひたし。からだ中が可愛によつて。商賣が仕ともない。ソコデ次第に貧乏して。三疊敷にちんからり。百文が米をかひかねるとき。こんな苦しい所帶をせうよりたとへ死ぬとも一トおでり奢て死んだら。一生のおもひ出。たれか百年いきるもの歟。あした死ぬるも來年死ぬるもおもへば同じ短ひ命じや。疊のうへで往生するも河原でのたれ死ぬるも。しぬる味にかはりはない。さらば今夜どこでなりと。盗にはいりて。金二三百兩ふところへねぢこみ。おもふ存分おごりちらかし首とられて仕廻ふ方が埒あきが早うて樂じや。こんな貧乏を長うするは。埒があかいで氣色がわるいと。無分別な。石川五右衛門。熊坂の長範が得てあるものでござります。首尾よう盗おほせる事歟。はした金をぬすまうとして。おもひの外に引くゝられ。獄屋のうちへ打こまれて。握めしに香のものかぢるとき氣がつ

いてどんな事をした。やはり元の三疊敷。ちんからりに百が米。貧乏でもわが所帶じや。斯うやつておれば日の目をおがむ事はならず。近所あるきもする事ならず。我からだを我ながら。自由にする事のならぬとは。何の因果じや。どう見てもうちの貧乏が有がたう戀しうなる。「逢見ての後の心にくらぶればむかしはものをおもはざりけり。扨御役人の前へ引出され。水責火せめのくるしみを受るときは。はじめの獄屋の中がこひしうなり。早う責苦を助かつて。獄屋へかへりて。休みたいと。むかしはものを思はざりけり。やはりあとが戀しうなる。其罪人が罪きはまつて。首の座へ直るとき。どこが戀しいぞ。たとへ水責火責はおろか。骨をひしがれ。肉をさかれても。いのちさへある事なら。ヤハリもとの責苦が戀しい。昔はものを思はざりけり。せんぐり〳〵跡へんが戀しうなる。ある人の發句に「手にとるなたゞ野におけよげんげ花。兎角今日の有がたい事をわすれて。外をねがふ所から。思ひの外に心がゆがむ。さらば人は苦しみに生れたものかといへば。安樂は人のうまれつき。先師のいろ

は歌に「らくがしたくば心をしりやれ。らくは心のうまれつき。此樂な心をもちながらくるしんでうろたへるを。たとへのはなしがござります。ある獨り者が。よう寐てゐるとき。隣が火事じや。近所はやれろれと騒たつ。朋友が馬灯燈さげて見廻に來た所が。門の戶がしまつてある。南無三八兵衛のみ過て寐てゐると見へる燒ころしてはならぬと。戶を蹴やぶつて内へはいる。その物音に八兵衛。ふつと目をさまし。うろたへて赤裸で寐處からとんで出る。友だちが待た灯燈鼻のさきへつきつけ。隣が火事じや見廻に來た。八兵衛よろこび。夫は能う來てくれた。其灯燈かしてくれと。友達の灯燈をかりて手にさげ。赤裸で庭へ下りたり。うらへ出たり。又表へかけ出したり。しきりにうろたへさわいでゐる。友達が合點がゆかず。八兵衛なにを探すのじや。八兵衛ぬからぬ顔で行燈がきえてあるゆゑ。火打箱さがしてゐるといはれた。これが銘〳〵共によう似たはなしじや。結構な灯燈のあかりを己が手にもちながら。火打箱をさがしてゐるは。やはり闇がりの心もちじや。明らかな本心を御たがひ

に持てうまれて。樂はどの様にも出來るものを。苦しんで一生くらすは。此八兵衛の御連中じや。てのくらゐ心から物の大小輕重がわからぬ様になり。大切の心のゆがみは捨てねて。指のかゝんだを苦にやんで。療治する。ソコデ孟子も御しかりなされて此之謂レ不レ知レ類と仰られました。猶明ばん御はなし申ませう下坐

孟子曰。拱把之桐梓。人苟欲レ生レ之皆知下所二以養一之者上至二於身一而不レ知下所二以養レ之者上豈愛レ之不レ若二桐梓一哉弗レ思甚也。扨此章は前晩のつゞきにて。孟子またゝとへをまうけて御しめしなされたのでござります。拱とは左右の指をもつて圍みましたるを拱といふ。把とは隻手握りを把と申ます。桐とはきりの木。梓とはあづさの木でござります。畢竟拱把の桐梓とはわづか一握りや二握りの。ほそい小さい樹木でも。これをそだてようとぞんじますればかならずこれに培をし。養ひをなして。そだつる事をしらぬ人はござりませぬ。故に人苟欲レ生レ之皆知下所二以養一之者上と仰られました。サアこゝが入

用の所でござります。樹木をそだつる事は養ひがなければならぬといふ事を知て居人が己が身をやしなふ事をしりませぬ。是はどうしたものでござりませうぞ。養ふ事をしらねばこそ。明てもくれても思ひつく事は錢がほしい金がほしい。よいものが着たい。うまひものがくひたいと。得手勝手な事ばかり思ひ付て。我身の倒るゝ事も。我身の害になる事もかまはず。無分別ばかり。是則うゑ木をそだつる事を知て。我身をやしなふ事をしらぬ。故に至二於身一不レ知下所二以養一レ之者上と仰られました。ナント人はかしこい様でも。また愚かな所があるものでござります。畢竟わが身を可愛がる様で。實は可愛がらず。却つてうゑ木を可愛がる事をしつてゐるは。ナント無分別ではない歟と。扨てそ豈愛レ身不レ若二桐梓一哉。弗レ思甚也と御叱なされたのでござります。さてこゝに身を養ふと申てあれども。強ち身の事ばかりではござりませぬ。則心のやしなひじや。身心一雙と申て。心をやしなふ事をしらねば。みをやしなふ事が出來ませぬ。心をすてゝゐて。身ばかり養はふとするは所謂身贔負身勝

手と申す私心私欲のかたまりに成まする。その私心私欲で身を養はふといたしまするとかへつて身をそこなひまする。爰の境がいたつて六かしい所じや。心を捨ては何もする事はござりませぬ。心をすてゝする事が有たら。みな身贔負身勝手でござります。古歌に「つく〴〵とおもへばかなしいつまでか身につかはるゝ心なるらむ」成ほど心が主人となつて身を家來としてつかふ時は皆道にかなひまする。身を主人として心をつかひまするは。心をすつると申ものじや。心が身につかはれまするといつでも道にはづれてみな身贔負身勝手になりまする。此道理は能う辨へてゐながら。ヤツパリ身贔負身勝手がやめられず。身に心のつかはれてゐるは口をしいと詠だうたでござります。いかさま身びいき身勝手をする人の。はらわたの開帳に能う似た咄がござります。至極尾籠なはなしなれどもねむりさましに聞て貰らはにやならぬ。これは都のはなしでござりまするが。花のころに成りまする。あらし山御室の櫻がりとて。京中の貴賤皆花見にまゐります。其中には大家の

奥さま。あるひは娘御。または遊女町の藝子女郎。衣裝に花をかざり。こゝを曠と見物にまわりまする事じや。嵐山までは京をはなれて一里半ばかり。何んぼ美しうかざりたてた娘御でも。出ものはれもの所きらはずといふ譬の通り。途中で便所へ行たい事がある。流石に野中で尻もまくられず通り筋の見ぐるしい百姓家へかけこんで。御無心ながらてうづ場をちよつと御かし下されませと。赤い顔して斷りいひ。裏口へ出て見た所が。うろぎたない菰だれの雪隱。これには京の女中がたが。毎年大きに困る事でござります。成ほど人間かしてこしと申て。ある通り筋の小百姓が。此事を考へ出して。かし雪隱といふ事を始めました。其趣向は。門口に雪隱をたて。側に手水鉢をすへ。墨ぐろにかし雪隱一度三文と。かき付た看板を懸ました。尤もこれは甚おもしろい趣向で至極重寶な事ゆゑ花のころはけしからず流行ます。勿論これは兩德の趣向で。女中がたは赤いかほして口たれて。きたないめをせいでも。三文で挨拶なしに。我家の雪隱へはいるやうな顔つきして。用がとゝのひ。升又雪隱

のかし元は。三文のかし代をとるばかりじやない。おとへ糞がのこりますも
ゑ。これも至極勝手がよろしい。全くかしざしきかられもひ付た趣向とみゑ
まして。此ごろめつきり身代を能ういたしました。或人の道歌に「よい中も近
ごろうとく成にけり。どなりに藏をたてしよりのち。とて人の銀もふけが羨
しうて。又ねたましうて。かちれとしてなりとも。己が田へ水の引たい例の身
贔屓身勝手の强欲ものが。其村方にござりまして。あるとき女房をよんで相
談には。八兵衛が近ごろかし雪隱で。めつきり錢儲をしをる。これも此春はか
し雪隱をこしらへて。八兵衛の銀もふけをたゝきれとしてやらうと思ふが。
どうであらふぞ。女房中々合點せず。夫はこおたわるい分別じや。たとへこち
のかし雪隱をこしらへた所が。八兵衛殿は仕にせも古う。得意もたんとある
であらう。こちはまた。新店なりはやらぬときは貧乏の上ぬり。それはやめに
さつしやるが能からうといへば。イヤ／＼それはわれが何もしらぬによつ
てじや。此たびれれがれもひ付た雪隱は。八兵衛のやうなきれたない雪隱では

ない。當時京の町は。茶の湯がはやると聞たもゑ茶かたの雪隠をたてるつもりじや。先ヅ四本柱はよしの丸太ではきたない。北山の入節をつかひ。天井は蒲天井にして。蛭釘をうつて釣釜のくさりをぶらさげて。きばり縄のかはりに用ゆるのじや。ナントきめう歟窓は下地窓。ふみ板はけや木のじよりんもくぎん隠しはさつま杉。穴のぐるりは蠟色ぶち。壁は中ぬりの切かへし。戸は檜木の長へぎ。白竹れさへ屋根は杉皮青竹れさへのわらび縄。大和葺にてしらへ。沓ぬぎはくらま石。かたはらに青竹まじりの四ッ目垣。橋杭の手水鉢に。かゝりの松はしよろ〳〵とした女松をあしらひ。千家でも遠州でも有樂でも遠見でも。何でもかでも取こめるこしらへ。れそらくはていつを出したら。八兵衛の雪隠はへたばるにちがひはないと。自慢顔にいひならべると。夫は奇麗でよからうが。かし代はなんぼ取るのじや。しれた事一度が八文よ。イヤ〳〵それはわるい分別。茶方でも水かたでも。どちらのみちきたない所三文でも安い方がヤッパリはやりさうな事じやに。かならずそれはやめにして

下されといへば。何をぬかすやら。女さかしうて牛うられぬと。さいくはりう〳〵仕上げを見れれど。かの亭主が無理な工面してどう〳〵此春間にあふ様に。立派な雪隠をこしらへました。勿論かんばんは醫者どの歟。坊さまをたのんだと見ゑて。唐様でかし雪隠一度八文と書て出した。ようした物じや。錢がたかいと。なんぼ奇麗でも借人がない。猫の子ものぞいて見たらぬ。ソコデ女房がぼやき出し。これじやによつて止さつしやれといふのに仰山な錢かねいれて。此しまひはどうするのじやと。疊たゝいてわめけば。亭主は落着たかほつきして。何もやかましくいふ事はない。明日はわれが得意まはりをして來ると。借人は澤山出來る。われもはやう起て。こほり飯をつめておけ。一ぺんかけ廻つてくると門前市をなす事うたがひなしと。太平樂をいひちらして。その夜は寐る。女房はがてんがいかねど。朝はやう起き。めしを焚きてこほりめしをつめると。親父はいつもより朝寐して。四ッ時分に目をさまし。茶づけくふと身ごしらへ。ぱつち尻からげかのこほりめしを首筋へくゝり付。小遣

せにを懐へいれ。出かけにコリヤかゝ。得意まはりしてくると夥しい借人があらう。モシ糞がつかへたら中入札をかけて隣の次郎兵衛をたのんで。一荷も二荷も取てもらへへと。いひすてゝ出てゆく。ます〱女房は不思議がはれず。どうして得意まはりが出來ず。京の町を何村の何兵衛が方で。かし雪隠かし雪隠と。菜や大根うるやうにふれあるくの歟しらぬと。しあんしてゐる所へ。錢筒へ八文。錢をなげこんで一人雪隠へはいつた人がある。此人が出ると入かはり〱引もきらず借人が出てくる。嬶、はびつくりし。かし代を取りはづすまいと。目の玉をきよろつかして。雪隠のわきに張番をしてゐると。後には段々糞がつかへる。ソコデ中入札をかけて。一荷こゑをくみ上る。また追々にかり人がある。どう〲日のくれまでに雪隠のかし代八貫文とりあげ。糞を五荷くみ出した。ソコデかゝがひとり歡び。何さまこちの親仁は文殊菩薩の再來か。さるにても得意まはりはどうして仕られた事じややら。此やうに流行といふはありがたい事ではあると酒をかふて待ところへ亭主がのろり

と戻つて來て。どうじやかり人は有たかといふ。あつただんか。かし代が八貫。糞が五荷。こなたはどうして得意廻りをさつしやつた。京の町を一軒〳〵ところ書を持て頼みにはいらしやつたかと問へば。亭主は何をぬかしれるやら。たれが得意まはりといふは。今朝内を出て直に三文出して。八兵衛が雪隠へはいり。内から掛がねをかけて。一日隣の雪隠をふさげたのじや。人が戸をあけかゝると。内からエヘンと咳ばらひすると。はづんではあるし。たれが所の雪隠へかけ込れるのじや。アヽけふは仰山なせきばらひして聲がかれた。此永い日を一日つくばふてゐたれば。持病の疝氣がたてつたと。腰をなでゝいはれた。ナントたれもしろいはなしでござりませうが。これがこれ。小人凡夫のはらわたの開帳じや。己が金銀の儲けたいも。人の金銀をもふけたいも同じ事なれば。すこしはたれもひやりもありさうなものなれども。我と人とは別〳〵のものじやと覺えて。我勝手さへよければ。人はこけても倒れてもかまはゝとこそ。爰を大事とわが身勝手をいたしまするは。皆わが身を養はふとれも

ふのじや。是が大まちがひと申もので。人とわれとはたろか萬物と我と一体。この道理がしれぬによつて。人我の隔をなし。めぐり／＼て我身の害になる事をしらぬ。ひどいものじや。我身勝手をおもひ付ど。むさい事もきたない事もうち忘れて。春の日の永いのに一日雪隠の中で。ひきがいるの様に。目ばかりぱち／＼してゐて。くさいともおもはずまだある。昼じぶんになると首筋にくゝりつけたてほり飯を取出して。雪隠の中で辨當をつかひまする。これが女房子に見せられたすがたか。個様に申すは。雪隠の事ではござりませぬ。腹の中のむさいきたない店おろしをたとへて御はなし申すのでござります。ある人の道歌に「我心かゞみにうつるものならば。さこそすがたの見にくかるらめ。しかしながら此様な人は日本の地にはない。得て唐や天竺にはあるやうにうけたまはりました。是じやによつて至二於身一而不レ知下所二以養一レ之者上豈愛レ身不レ若二桐梓一哉不レ思甚と孟子の仰せられましたも無理ではござりませぬ。わが身を愛する／＼とおもふて。思ひの外に損ひまする。

是について恐ろしい話しがござります。序に御聞下さりませ。これは東國の事でござりまするが。相應にくらしまする百姓がござつて。夫婦の中に娘一人。其外めしつかひの下男下女が五六人。かの娘が十三歳になりました。母親が風のこゝちと打ふしましたが。わづか五七日で相はてますると。跡は爺親とむすめ。親るい村内から。後妻をいれよとすゝめますれど。かの亭主のれうけんには後妻をむかへて。自然繼子繼母の中がむつまじうゆかぬときは。我も苦勞し。むすめもまた不便なり。何とぞ此まゝで娘の成人を待たんと。餘ほど辛抱はして見られたれども。何分娘のとしはゆかず。家内の取締をしてくれるものがないと。奉公人が育ちにくい。據なうあれこれと聞あはせ。幸ひ近村に相應の人からが有て。やがてこれを迎へとり。家内の世話をして貰はれました。時にかの後妻は。はなはだ深切にむすめを養育する。むすめもまたかゝさま〳〵といふて慕まする。ソコデ爺親も大きに安堵し。月日をおくりまするうちに。彼後妻が懐姙をいたして。ほどなく一人の男子をうみました。ソ

コデてゝ親はよろこびの中に。また氣にかゝる事も出來て。後妻がうみの子を可愛がつて。先妻のむすめをにくむやうに成たらば。至て難澁な事じやと。あんじわづらふて居ましたが。案じるよりうむがやすいと。實子が出來てのち。ます／＼繼子娘を可愛がる。中々わけ隔ては見へませぬ。これで父親も大によろこび。親子四人がむつまじう明しくらして娘は十七才になり。男子は三歳に成ました。ある夜の寢ものがたりに亭主がいふは。こなたがござつたときは。まだ娘は十三。何のわきまへも無かつたが。早十七になつたれば。今は牛にも馬にもふまれる氣づかひはなく。依て思ふに。どうぞ能い聟をもらふて。此家をゆづり。こちら夫婦が。ろの小兒をつれて新宅でもかまへ。心やすう世をおくらうと思ふが。こなたはなんとおもはしやるぞ。ソコデ女房がそれは何より有がたひ事。私もはやう隱居して世事の世話が助かりたい。どふぞはやう聟をもらはつしやれと。きげんよう承知しました。亭主は大に安心して。夫より一月ばかり立て用事につき一夜どまりに他處へ參りました。其夜

はいつもの通り。繼母も娘もめしつかひも。夫々のよなべ仕ごと。寐時分から。在中の事なり。下男も下女もどこへやら。こそ〳〵と出てゆく。あとには母おやは。小兒を添乳してねる。娘も部屋へ入てねる。夜はしん〳〵と更わたつて。七ッ前と思ふ頃。かの繼母が寐處からそつとぬけ出。そこらにあるたすきを取て娘の部屋へしのび込み。よう寐入てゐる娘の首へかのたすきをまきつけ。力にまかせて〆ころさうと仕ました。思ひがけなき事ゆゑ。娘はおどろきさま襷に左右の手をかけて〆させまいとする。母親は乘かゝつて〆ころさうとする。行燈はきえて眞くらがり。母親も聲をたてず。娘も驚いて聲も出ず。狼のくひあふ様に闇で上になり下になりつかみ合ましたが。どう〳〵母親が娘のたぶさ髪をつかんで。うらの方へ引ずつて出る。隣は遠き在中の事。折ふし其夜は眞のやみ。半町ばかり引ずつて出たが。側にある野中の井戸へ。かの娘を投込うとする。娘は井戸へはまるまじと。母おやに取つくを。踏たふしかいつかんで。井戸の中へ難なく打こみ。跡をも見ずして母おやは家にかへ

り。ぞこら取かた付。何氣なき躰で。小兒の添乳をして寐入たるは。おそろしい繼母のふるまひ。ある知識のうたに「おく山の杉のむらだちともすれば。おのが身よりぞ火を出しける。チトかんがへてごらうじませ。四年このかた中のよかつた繼子繼母。たちまち手のうらを返すやうに。毒惡な繼母の仕かた。此おそろしい心はどこから來たぞ。うろたへると銘々どもの腹の中にも此やうな鬼が住でゐよふもしれませぬ。折々たちかへつて。腹の中を吟味せぬと思ひの外に鬼の玉子がへり付てあらうもしれぬ。油斷は一切なりませぬ。此繼母がよめ入してくる時に先方へいたら。繼子むすめをにくんで。〆殺さうといふ分別をして嫁入して來るものじやない。サアどういふ處から。此心が出てまゐりましたぞ。四年の辛抱。タッタ一夜の寐ものがたりに。娘に聟を取て。家をもづらうといふた。亭主の一言で。此おそろしい心になりましたのじや。なぜなれば。亭主のある間はたとへ新宅かまへても。聟や娘が大事にもせう。若亭主が目をふさいだら。娘は先妻の子なり。聟は近ごろの入人なり。我身

は後妻のとなり。ちいさひものはあるし。決して聟やむすめに。ないまはされて口をしい日を送るであらう。さればとて聟をとる事はよしにさつしやれといへば。継子娘をにくむやうで。亭主への聞へもわるし。どうぞ我うみの子に跡をとらせ。亭主はなくとも。かまど将軍で威勢ばり。おのれがまゝにくらしたいと悪念がきざしてより。どうぞして継子娘を人しれず失ひたいと。此三十日よるも晝も。ねてもさめても。念々こゝに在てわすれず。つねに恐しい志になつて。今娘をころしたのじや。是全く己が身の贔負より。ひいきの引倒しといふものになつて。飛で火に入るなつの虫。おのが身より火を出しける。是がこれ。身を愛するの間違可愛いのとんばがへり。畢竟亭主の一言をわるう耳に留たもの。此様な大騒動。鬼貫の発句に「やとはれて鬼になつたるまつりかな。亭主の一言にやとはれて。四年の辛抱は水の泡。心にもあらで鬼に成たるまつりかな。ナントこはひものじやござりませぬか。是みな身贔負身勝手からじや。御用心なされませ。どうやらする拍子に一念化生の鬼女と成

ます兒女じやといふて。口は耳までさけてあり。髮を手にからまいてしもとをふり上。うろこ形や紋盡しの衣裝をきて。足拍子をふんでゐるものじやござりませぬ。可愛らしい口もとして。繼子や嫁をかみこなす。安達が原の黒塚は得て京にも田舍にもをりふしあるやう聞へまする。甚だこはいなさけない事でござります。どうぞ心の鬼の出ませぬやうに御吟味をなされて下さりませ休息

「としを經てうき世の橋を見かへればさてもあやぶくわたりつるかな。何さま人間一生の間には火事にもあひ。大地震にも出あひ。大雷大風洪水飢饉其外にもひがけない災難をかうむる人もあるもの。中々ついはとしのよられぬものでござります。幸ひにそんな目にあはぬ御かたは。有がたいと思しめせ。五十年三十年のあとをふりかへつてみれば。うき世のはしをさてもあやふくわたりつるかな。能う命があつたものでござります。扨かの娘は罪なくして繼母の手にかゝり。井戸の中へ投こまれたれば。所詮たすかるべき道は

ない。爰が有がたいものじやへんるい事をせぬ御かげで。不思議にこの娘のいのちを助かりました。其ゆゑは始め井戸へうちこまれたとき。幸ひにさかさまに落いらなんだ。順に井のそこへ落とゞまり。そのまゝうくと。忽井戸がはへ手をかけて。水をのまぬ用心しながらうともがけども。中々上られず。聲をかぎりに助けてくれよと。叫びました。をりふし夜あけまへに。隣家の人が早うれき出。出を見まはりに出かけました所が。どこやら女の聲がする。ふしぎにれもふて。こゑをしるべに窺ひますれば。井戸の底じや。さては井戸はまりと心得。さま／＼にして引上てみれば。見しりある隣の娘。何ゆゑぞと問ふ間もなく。かの娘あがると其まゝ氣絶いたしました。夫から大騒ぎになり。近所へしらせ。内へしらす。繼母はびつくりしたが。息がたへてあると聞て。少しはれちつき。何くはぬ顔で。夜前から見へませず。亭主はるすなり忍びをとこの方へでもまゐつたの歟と。心づかひに存ましたが。これはれもひよらぬ事が出來ましたと。人まへ作つてなき／＼いへば近處の人も氣のどくがり。先ヅ

うちへ死骸を舁こみ。醫者よ鍼たてよとたち騒ぎ。親類も追々寄て來る亭主の方へも飛脚をたてる。氣つけなど色々もちひ。身をあたゝめまするを。彼娘が息を吹出しました。さては人心地が付た歟と。みな〳〵よつて介抱をするうちやう〳〵氣がたしかになり。親類隣家の人はよろこぶ。臺所でまゝ母は。茶の下をたきながら蘇生したと聞て胸を冷し。もふ欠出さふか。井戸へ飛こまう歟。どふしたら能からうと。胸は早がねを撞ごとく。惡のむくひは早いものじや。ある人のうたに

「世の中をめぐり車のわがうへにつみかさねたるはてのくるしさ」天網恢々疎而不漏といふて天の網は至極ゆるやかなやうなれども。中々もらすものではござりませぬ。因果歴然用心をせにや成ませぬ。さて親類中は。かの娘を中に取まきどういふ譯で井戸の中へおちいつたのじやと。口々にとへば。娘はため息をついで。昨夜はいつもの通り夜なべをして。其うち寐入ましたが。何かはしらず。こわい夢を見ました。これはと思ふて目がさめたれば。井戸の

中へおちてをりましたが、それから助けて下されといふた事は覺えてゐますが、そのあとはどう成たかおぼへませぬといへば、親類中が、そのこはい夢はどの様な夢であつたぞ。其譯をいへといふ。娘はたゞこはい夢でござつたとばかり。繼母ともどうしたとも更にいはず。唯こはい夢じやとのみいふてをりまする。ソコデ親類中もわけがわからず。大かた狐狸のしはざであらう。まづ怪我はなうて重疊じやと家々にかへりまする。母親もむすめがわけをいはぬを幸ひとぬつぺりと押づよう。どんな夢を見やつたのじや。さだめてこはかつたであらうと。是もおもてむきの口上ばかり。其内に爺親も戻りまして。これも譯がしれねば。狐狸のわざにして。何事なう此一件がおさまりましたが。たゞ繼母は明ても暮ても。底きみわるうおぼへまする。されども娘は敢て色にも出しませぬ。ナント孝心な娘ではござりませぬか。古歌に「深山木のそのこずゑとは見へざりしさくらは花にあらはれにけり。人のこゝろは恥かしいものでござります。事のないときは善も惡もおしなへて。同じやう

にみへますれど。事にあたると。其のれ〱が平生のこゝろざし。所作の上にあらはれて。芥子ほどもかくされませぬ。此むすめも。此一件がなかつたら。只よのつねの在所娘。繼母の毒惡にかゝつた故。日頃の孝行のこゝろざしが。おのづから顯れましてくるしい中にも。親の名を出しませぬは。みやま木の其梢とは見へざりしさくらは花にあらはれにけり。ナント健氣な志ではござりませぬか。また日頃の志がよからぬ方へ志すものは。是また事のうへにあらはれる。釋迦の遺教經にも。黑蚖といふてござりまするは。毒蛇のことじや。則銘々の腹の中のたとへじや。この毒蛇が常にはねてゐれど。何んぞ事があると。あたまをあげて騷ぎ出します。犬が中ようあそんでゐるとき。肴のあたまを一ッ投てやると。俄に牙をむいていがみ合ふ。この繼母も丁度これと同じ事で。むすめに聟をとるといふ一言に。黑蚖があたまをあげてこの騷ぎを引出しました。是がこれ。日頃氣質をかくしてをりまするけれども。事にあたつて毒蛇がはねまはるのでござります。是じやによつて。御互に。平生腹の中

をきれいに掃除して。若黒黿が居れつたら。早う退治して御仕舞なさりませ。ろうせぬと折々わたまを出しまする。遊所生洲芝居浄るり鼈甲のくし笄。緋がのこのわげくゝり茶わん茶杓花見ゆさん。何でわたまを出さうもしれぬ。こはい毒蛇でござります。さてかのむすめは。是ほどのくるしい目にあふても。さらに色目にも出しませぬ。継母はもとより。是がしれては身の上の一大事。じやによつてれくびにも猶出さず。爺れやは何もしらず親類はわけが分らず。どうしてもしれまする様がござりませぬが。こはいものじや。莫レ見ニ於隠一と誰いふともなく。村中でうす〳〵と評判がある。あの娘の非戸へはまつたは。継母のしわざじやと。爰ではいひかしこではいふ。是がついに番人の耳に入り。次第に御役人様の御聞に入て。かの継母がたちまち召とりに成ました。壬生忠見の歌に「恋すてふ我名はまだきたちにけり。人しれずこそ思ひそめしか。人しれずこそとは己独り知る所で。腹の中の事じや。いまだ色にも出さず。詞にもなほいはぬなれども。はや世間の人が。我名をいひたてるとよ

んだ戀歌でござります。成ほどこはいものじや。何んぼ人のしらぬ腹の中の事でも。かくれてゐるものじやない。たとへば。肝の臓に病があると。目がわるうなる。腎の臓に病があると。耳が遠くなる。腹の中のやまひが顔へハッキリと出まする。是じやによつてかくされぬ。これについて。面白いはなしがござります。或家に田舎のぼりの丁稚がござりました。九年甫を親類へもつてもけと云付られて有馬籠さげて。門へ出ましたが。道々の思案に。九ねんぼといふものは。在所ではきかぬ名じや。どのやうなものぞと。蓋を取てのぞいて見れば。ついに見た事も無いうまさうな物。數をよんでみれば九ツある。さてはこれで九ねんぼといふのじやなと。早合點して。忽ち一ツたもとへかくし。殘りを持て先方へゆき。つかひの口上をいふて。此八ねんぼを御めにかけますと申たれば。取次の女中がびつくりして。何いふてじや。是は九ねんぼじやといふ丁稚もさてはあらはれたと。たもとから一ツ取出し。實は一ねんぼをかくしましたと。赤い顔をしられた。是がこれ。誰も吟味したのではござりませ

ねど。あらはれる道理がある。これじやに仍てめつたに物はかくされませぬ。扨かの繼母がだん〳〵御ぎんみに逢まして。とく〳〵白狀いたしました。全く我うみの子に家をつがせんといふ心から。先妻のむすめを絞殺さうといたしたるしまつ。井戸へうち込んだ事のこらず訊狀にかゝつて。一々申ました。ソコデさつそく彼娘を御めしなされて。其始末を御尋になりました所が。娘は何も申ませず。たゞその夜はこはい夢を見ましたと思ふたばかり井戸へはいつたのも。上つたのもすべてしれませぬといふ御役人樣がたが。それではすまぬ。まさしく繼母がしめ殺さうといたし。又井戸へ投こんだではない歟と。御たづねなさる。イヽエ左やうの事は決してでござりませぬ。母はつねに私を可愛がつてくれまして。中々さやうなおそろしい事がありさうなことではござりませぬといふ。ソコデ御役人樣の仰にはまゝ母がすでに白狀におよんだれば。今さらかくしても詮なき事有体に申せと。すかしたり叱りたりなされて。さま〴〵に御たづねなさる。されども一向ぞんじませぬと斗り。

さだめて夫はあなた方がこはい顔をなさるゝ故。おそれて母が左様に申ましたか。一切私においては覺へませぬといふ。いく度御尋なされてもたゞ夢じやとばかりいふてゐる。これはこれ正く娘のいふ所僞りに相違なけれども。子は父の爲にかくすといふ。眞實の孝心。親をおもふまことより。いつはりていふ所なれば。御役人様がたも如何ともなされやうがない。たとへ水火の責をもつて御尋なされたりとも。又千萬石をもつてその心を御ひきなされても。確乎として動かざる孝行の心は。實にありがたいものでございます。これを佛法では。金剛不壊の心と申ます。思案や分別で。問はれてもいふまいなどゝ。こしらへたこゝろは。責苦におどろき。金銀にまなこくれて。必らず動くものでございます。親をおもふ誠は。しあんでもなく。分別でもなく。天然自然とうまれついた。仁義禮智のこゝろ。こればかりはうごかすとは成ませぬ。さるによつてつひに御評定決着して。これほどの大騒が手がるうすみました。先ッ繼母は御しかりの上。居村ばらひに成ました。又娘はこれも御しかりに

て。平生うか〳〵といたしをるゆゑ。かやうの騒にもなる。已來きつと相心得よと。御しかりにてすみました。こゝを能う御きゝなされませ。御上の御仁政のありがたい事を。此むすめは世にたぐひまれなる孝子でござりますれば。屹度御褒賞を下されたいおぼしめしなれども。此娘が孝行ものになると。母親のつみが重うなる。夫で御ほうびに替られ。むすめを御叱りなされたのじや。實にありがたい思しめし。此とき御立會の御役人様方がむすめを御しかりのせつは。御らくるいなされぬはなかつたと。さる御歴々さまの御はなしでござり升た。ナント有がたいおそろしい咄ではござりませぬ歟。是でとくと御合點なさりませ。身贔負身勝手といふものは。わが身のためによい事じやと皆おもふてをりまする故。假初にも身贔負身勝手をして成ませぬ。しかるに此一件をみれば。身贔負身がつ手はとんとやくにたゝぬものでござります。なせなれば。此繼母が娘を殺さうとするしわざは。皆わが身の勝手をおもひ。わが身の贔負をして。實子におとをつがせまゝ子を殺してかまど將軍

に成て。わがまゝをせうといふ身贔負身勝手なれど。其通りうまうはゆかぬ。却て此身勝手から。我うみの子にその事もならず。奪はふと思ふた家にもすまれぬやふになり。村拂に成て忽ち天笠浪人とんな。不了簡な女が。親里へ戻つたとて。親たちが能う戻つたといはれさうなもの歟。世間人の外聞または聟の手まへ敷居ばたもふまされは致しますまい。又一家親類じやとて。継子ころさうとした女をかくまふ事は出來ませぬ。親類親子義絶はしれた事じや。タッタ一ッの了簡ちがひ。我身の贔負勝手から。忽ちひろひ世界も狹うなり。天に跼まり地にぬき足して。五尺のからだのれき所がないやうに成ました。ある人の道歌に「世の中を四尺五寸となしにけり五尺のからだ置所なし。ナントこれが身の贔負したのでござりませう歟。身の勝手でござりませう歟。畢竟ひいきの引倒しといふものじや。皆これ身をほろぼすゆゑんのものを樂しむのじや。又娘は身のひいき身の勝手は。ちよつとも致しませぬ。其證據はしめころされても。井戸へ打こまれても。少しも繼母をうらみず。とかく

繼母の難儀にならぬ様と。としもゆかぬに夢じやといふ一言。取つきやうのないことばじや。是が思案から出たのでもなし。また學問して勘辨のうへで。いふたのでもない。只親を大事とおもふばかりで。我身のとはすこしもかまはぬ。是がほんの我なしと申すものじや。此我なしといふものは。有がたいもので。身の勝手をせぬゆゑ。かへつて身の勝手になりまする。願はずして家の相續が出來。御上より世間にも。孝行なものじやと譽られ。する事なす事勝手のよい事ばかりになる。眞實の身贔負身勝手がなされたくば。我なしに御なりなされませ。我なしといふて体が消て仕廻ふのではない。たれがといふ心がなくなるのでござります。さりながら此我なしにはつい成にくい事で。皆御幼少から出家をしたり。學文をなされたり。孳々として御つとめなされるは。此我なしに成たいばかりでござります。幸に先師石田先生。手島先生相續て。此我なしになられる仕やうを御傳授下された。尤か樣に申せば何やら箱傳授のやうにもきこゆれ。又石田手島の両先生が。御作爲なされた道のやうに

聞へますれど。全く左様ではござりませぬ。ひとへに堯舜の道に溯て。少しも私の分別をまじへず。聖賢のをしへをやはらげ。人は無我の生れつきじやと。いふことをお示し下されたもの。銘々どものやうな。文盲なものでも。いさゝか道のかたはしをわきまへ。その無我がうまれ付じやといふことを會得してみればおれが〳〵といふ事は。さすがに耻かしうて。あたまも出されませぬ。されば此我なしになる道に御すゝみ下されい。此我なしにならぬと。わが身を愛する〳〵と思ふてゐて。おもひの外に身を害し家をほろぼします。さるによつて孟子も豈愛レ身不レ若ニ桐梓一哉 弗レ思甚 と御しかりなされたのでござります。猶明ばん御はなし申ませう。下坐

鳩翁道話前編終

鳩翁道話 續編

男　武修聞書

太甲にいはく。諟天の明命を顧るとは。則大學の傳にして。書經太甲の篇を引て。明徳を明らかにするの仕様を。れしめしなされたものでござります。まづ諟天の明命といふは。れ互に持合せた本心の事じや。この本心は手まへ勝手にこしらへたものではなく。則天より稟得ましたもので。仁義禮智信の徳を具へ。親にむかへば孝。主人にむかへば忠。兄弟中よう。夫婦はむつまじう。朋友には眞實のまじはり。何ひとつ不自由な事なく。物に應じて自在なる故。明徳とも申します。則本心の尊号でござります。たとへば人に仁義あるは。天に日月のあるやうなものじや。もし天に御日さまやれ月さまがなかつたら。世界はくらやみ。人も是と同じ事で。仁義の良心をうしなふたらば。親子夫婦の辨へもなく。主従の差別もしれず。家内一統やみくもぐらし。ナントつまらぬものではござりませぬ歟。かるがゆゑに明命を顧ると申して。常に本心に目を

つけて。無理はせぬか。無理はいはぬ歟。身欲のために昏みはせぬ歟と。ぎん味するを顧ると申します。古歌に「雨ならば宿もかるべき夕ぐれに。霧にそいたく袖ぬらしける。」此うたの意は。はじめより雨としらば宿をかりて。ぬれぬ用心をするなれど。夕ぎりなれば目にもたゝず。これほどの事はと。ゆるす心にゆだんして。衣類をひたとぬらしたと。後悔のうたときこえまする。何さま誰しも。わるいと覺えて。わるい事を仕出す人はなけれども。明徳のくらいゆゑ。いつしか身贔負身がつ手にながれて。果は申し譯もたゝぬ大事になる。只恐ろしいものは。身びいき。身勝手。ひとゝせ越前の國へ。くだりました節。ある人の物がたりに。ちかきわたりに。平泉寺村といふ處あり。其村に。相應にくらす百姓があつて。多くの召つかひの中に。十五六になる小者尾籠な事じやがひな症にて。毎夜小用を取はづし。夜具も疊も。ぬれくさるゆゑ。主人大きにこまり。いろ〳〵療治しても驗なく。せんかた盡たるところで。一ッの勘辨を仕出した。其趣向は。家のうちに馬部屋ありて。馬を二疋畜ましたが。その馬部屋の

二階は。丸竹をあみて。簀子にしてござります。彼小者を。この簀子のうへにねさせました。是がこれ一擧両徳の計と申して。その故は。すべて越前にて。農家に畜置馬は。雜役といふてみな牡馬じや。秋になると稲をつけたり。こやしを着たり其餘はたゞ馬部屋に繋ぎ置て。肥をふます事でござります。時にかの小用たれを。簀子の上にねさせると。夜中に度々取はづす。ソコデすのこの間から。小用は瀧のやうにながれましても。すこしもかまひにはなりませぬ。馬の小便と人の小便と。合せて丁度よい肥になる。氣の毒なものは馬じや。夜中によう寐いつたところへ。折々の大夕だち。畢竟小言をいはねばこそ。よかつたものじや。然るにかの竹簀子は。いつの時代にこしらへたやら竹は悉くむしが入つてある。その所へ。夜毎に小用でくさらしたものゆゑ。次第に腐がまはつて。ある夜かの簀子がぬけました。ナニが小者は。晝のかせぎにくたびれて二階から落るもしらず。迷惑なは二疋の馬じや。何心なく雙でねてゐる眞中へ。おもひがけなう人がおちたゆゑ。馬はおどろき右左りへたちのくと。小

者は何も知らず。只グウ〳〵とねてゐる。これ全く馬部屋の中には藁を多く敷たる上。馬の小便にてよい程にしめりがあれば。ふとんの上へおちたも同前。さるによつて目がさめぬ。さて奇特なものは馬じや。腹もたてず又ふみもせず。うしろ足で馬部屋の板をどん〳〵と蹴て。家内の人をおこし。よう寐てゐる小者の顔のあたりを。鼻あらしふいて。フウ〳〵いふてかの小者を起しまする。ソコデ小者がふと目をさました。燈火はなし眞くらがり。しきりに馬がわが顔をふくゆゑ。肝をつぶして大聲をあげ。モシ旦那さま馬が二階へ上りましたと。わめきましたと。申す事じや。ナント身贔負身勝手はすさまじいものじやない歟。己が二かいからおちたとは。棚へ上て。馬が二階へ上つたとは。よううろたへたものでござります。さりながら。加様な事は。得てある事じや。おのれが本心のくもりは。ゆめにもしらず。只人がわるい。これがすまぬと。わが身を顧ず。滅多に大聲をあげてわめく人は。この小用たれの仲間うちじや。ある人の道歌に

一、あざみぐさその身のはりをしらずしてはなとおもひしけふの今まで。お互に立反て。腹のうちを吟味せぬと。おれがよい。おれがかしこいで。一生をうろたへ仕まひにしまひまする。故に明徳を明らかにするにありと申て。兎角本心をくらまさぬ用心をせねば。私心私欲。身びいき。身勝手がこげついて。此世から火宅のくるしみ。聟をいぢり。嫁をにくみ。又夫をうらみ。姑をそしるやうな。大まちがひが出來て。後にはあひてになる人もないやうに成ゆく。たとへば蒟蒻の。柄の拔たやうなもので。さはればよごれる。其まゝおけばわるくさし。なんとも仕かたのない。すたれものに成まする。よう考て御らうじませ。長い物は長う見ゆる。短いものは短う見ゆる。おたがひに長短を見違へはいたしませぬ。夫ゆゑ人の我をあしくいふのは必見ちがへのない事じやと心得て。我身を顧るのが近道じや。これでおもひ出した話がござります。或山家より。京の町へ。談義僧を招待に參りました。折ふし其日は雨ふりで。みちもあしく。駕籠をもつてむかひに來た和尚もやがて用意して。かごにうちの

り。京をはなれて。三四里ばかりとおもふ所で。どうした事歟。かごの底が抜ま
した。いたはしや和尚は。袈裟も衣も。どろまぶれになられた。迎の人足も氣の
どくがり。そこらかけまはつて。縄ぎれ多くひろひきたりて。やう〳〵と駕籠
をからげ。扨和尚にふたゝび御乘なされといふ。和尚も氣味わるけれど雨は
つよし袈裟衣はよごれる。晝中にあるくも。外聞悪くぶせう〳〵に駕籠にの
るとき。コレかごの衆。モウ底はぬけはすまい歟。イエ〳〵氣づかひはござり
ませぬといふゆゑ。乘移ると。舁上るとの拍子で又底がメキ〳〵いふ。和尚大
きに肝を潰し。これでは中々安心がならぬ。御苦勞ながら。合羽の上からいま
一度。丈夫に縄がらみにして下されといはるゝ。人足も尤におもひ。また縄ぎ
れを拾ひあつめ。合羽の上を竪横十文字にからげ。是ではあやまちはござる
まいと道をいそいで。或村を通りかゝつた。折ふし此村に。法談があつたとみ
え。参詣の老若。道場の歸りあしに。此駕籠を見付て。かたぎぬをかけたる親
仁が。かたはらの。うばかゝにいふにはナントみなの衆。今日の御勸化は。おり

がたい事ではござらぬか。いかさま無常迅速の世の中。生者必滅。會者定離のことはり。何どき如來樣の。おむかひがあらうやら。しれぬが人の身のうへ。アレあの駕籠を見さつしやれ。どうでも京へ奉公に往た人が。死んだと見へて。死骸を。在所へつれていぬると見へる。扨もはかないものじやでござらぬ歟と。いふ聲をかごに乘たる和尙がきゝつけ。さては我を死人と心得た歟。いまいましいと。わざとかごの中で。咳ばらひするとかの老人は此せき拂ひにおどろき。急にかたはらへ飛のき小聲に成て。死人じやと思ふたら。どうでも科人じやさうな。めつたに側へ寄るまいぞといふ。和尙いよ／＼腹をたて。今はたまりかねて。かごの中でじだんだふみ。大聲あげて。科人では。ないといふ。其聲に又びつくりして。さては科人ではなうて。どうでも氣違ひじやさうなといはれた。是が面白いはなしじや。何分駕籠を外から繩がらみにしたものも。誰にみせても死人じや。然るに中から物いへば科人といふもとはり。又氣ちがひじやろうなといふのも。外からこじつけていふのではない。皆此方

に其すがたろの模様があるによつてじや。これでヨウ御合點をなされませ。よいものをわるいとは。人はいはぬ。何事もかへりみるのが肝心じや。ある人の道歌に

「世の中は何もいはずにいよすだれ。其よしあしは人に見ねすく。

れよろ物は。はじめに覺悟すれば。なりにくい辛抱もなるものじや。かるがゆゑに。中庸に。言前にさだまるときは。跲かず事まへに定まる時は。困まずと見えて。兎角はじめの覺悟にある事じや。譬へば人の身に火をのせてたくといふは。ならぬ事なれど。灸治といへば。小児も辛抱する。これ畢竟はじめの覺悟でござります。わが友何がしのむすめ。年十七歳。天性おとなしき。生たちなりしが。としの秋。さるかたへ貰はれ。婚姻もとゝのひ。里歸もすみて。夫の家に。かへりし跡にて。爺おやの。何心なく。わが常に持なれし。煙草いれの中を見れば。小さき紙にこまぐ\と書たるものあり。ふしぎに思ひ。取上て見れば。娘が手跡にて。夫の家に。かへる折から。書れきたる文なりけり。その文に。御禮申上たき。忠し

めしもかへりみず。つたなき事を申上まゐらせ。まことにながながの。御養いくの御恩は。舟車にもつみがたく。其上いろ〳〵と。御しんばいをかけ候御事。冥加のほどれもひやられまゐらせ候。さりながらこれはかへらぬ御事に候へば。たゞ此うへはあなたさま方より。御あづかり申候。此身にて候へば。何とぞ親の御身に。疵つけてはならぬと。大せつにいたしたくぞんじまゐらせ候。まことにいつ〳〵までも。御側に居たさは。限りなき御事に候へども。女子の道にて候へば。教へをまもりたくぞんじまゐらせ。もとよりわたくしは。うまれ子になりて。わがうちへ歸り候御事ゆゑ。少しもゆきとむないとは。ぞんじ申さず。いさんで参じまゐらせ。まゝ私の事は。なにでともれあんじ下されぬやう。御大事に。御いとひ下され候やう。いのり上まゐらせ。かやうに申上候へば。少しは御心もじやすく思しめし下され候はんやと。御うれしくぞんじ上まゐらせ候。かやうなことを申しさぞ〳〵御わらひ草と。御はづかしく存候へども。何とぞ御あんじ下されぬやうに。いたしたくと思ひつめ候あまりと。何事も御ゆるし下されたく候。

猶行するゑながく。御禮申上たく。あら〳〵申のこしまゐらせ候めでたくかしこ。菊月けふ。御父母さま御もとへ。かへす〴〵御兄様御あねさま方も。いつ〳〵までも。御かはらせなう。御せわさまに相成申たくとくれ〴〵御ねがひ申上まゐらせ候めでたくかしことあり。ゆく末はしらねども。まづ此文のやうにては。女の道を。思ひ定めたる躰なり。いかさま此覺悟ならば。舅姑にもよくつかへ。生涯夫の家をまもりて。どのやうな辛抱もなりさうに見へまする。わるうすると親の慈悲があまつて。マアこしらへをして嫁入をさすはさす物の。先方の様子を見て。辛ばうが仕にくいなら。何どきでも戻つてれじやと。あまい口上に。かくごをきはめてよめ入する娘子は。ナント覺つかないものじやないか。是みな明徳がくらゐによつてじや。あちちへは嫁入し。こちらへは嫁入し。あれにせうか。これにせう歟と。舅姑をゑりきらひし。又亭主をより取に仕あるき。離縁状をもらふとは。書出しを貰ふ様にればね。終つくまで嫁入口をたづねて。一生を終るは。はづかしい事じやござりませぬか。おのれさへ堪忍すれば。ど

のやうな家にも尻がすはる。ある人の歌に
「雨にふし風になびけるなよ竹は。よゝに久しきためしならずや　これ堪忍のすがたをよみし歌ときこゑまする。成ほどヽウ考て見ますれば。わづかに五寸まはり。尺廻りの竹の。五間七けんとたち延て。しかも末では枝葉はびこり。其上に雪をもち。あるひは雨にうたれ。または風にふかれて。倒れぬといふは。いかさま天理自然の妙用。艸木情なしといへども。たをれぬ用心はきつとしてある。先年洛中大地震のとき多くは竹藪へにげこんだ。これは竹の根がらみがつよいによつて。大地もめつたに。われはせまじとの用意。尤な事じや。この根がらみの強のは竹のたをれぬ謂でございます。是じやによつて。人も専ら本に力をいれねばならぬ。本とはなんぞ。本心の事じや。専ら力を入るとは。時々刻々に。本心を失ふてゐはせぬかと。かへりみるのじや。萬行一心。これより大きな本はない。農業をする人のはなしに。瓜をつくるに。風ふく年は。小蔓が多くはるとの事。また唐黍をつくるに。風あるとしは。自然と土際よ

り上にて多くの根がはるよし。これ皆風にあふて倒れぬ用心。驚波といはゞ大地をつかんで辛抱する身がまへと。いふても大事ない。しかるに人は萬物の靈として僅の辛抱が出來かねて。身のたをれるをも厭はぬといふは。さりとても面目次第もないことじや。此辛抱でおもひ出した。おかしい話がある。さる所に十六七の娘をもたれたが。脊たけものびたれば親たちも心がせく又時分の娘なれば。諸方から貰ひにくる或時母御が。むすめをよんでいはるゝには。方々から貰にくれども。是ぞと思ふ縁もなかつたに。此ごろ二軒からいふて來た。これは隨分相談してもよからうとおもふ。一軒は金もちなれど。チト聟どのが見ぐるしいげな。又一軒は聟どのは品もよく。よい人がらなれども。身代はうすいといふ事じや。去ながら二軒とも聟どのゝ氣象は。實躰なといふ事。何よりは是は有がたい。このうへはどちらへなりともそなたの氣に入た方へ。よめ入さろう。コレ返事を仕やれ。ハヽア恥かしいの歟。それならばよい事がある。金持の方へゆきたくば。右の肩をぬぎや。よい聟どのゝ方へ行た

くば左りの肩をぬいで見せや。其おひだ。れれはこちら向てゐると母御がうしろ向れたれば。娘はこゝろ得肩を脱だやうす。母れやがモウよいか。ドレ〳〵とふり返つてみれば娘は両肩をスッポリとぬいでゐられた。ナント面白い話でござりませぬか。この娘の。左右の肩を。一同にぬいだ心は。晝は金もちの所へもき。夜はよい聟の方へ。もく積りと見ゐる。さても。油斷のならぬ娘御で。ござります。このやうな覺悟をきはめて。嫁入したら。中々辛抱は出來るものではない。しかし此やうなむすめ御は。日本にはありはせぬ。これはみな天竺の事じや。さるに依て五百羅漢も。皆肩をぬいでござると或物しりがいはれた。どなたもヨウれきゝなされませ。古歌に

「はるの夜のやみはあやなし梅のはないろこそ見へね香やはかくるゝ。

こはいものとや。隠してもかくされぬ。心のくもりが時として見ゐまする。かるがもゑに諟天の明命を顧ると申して。氣をつけて掃除をせねばならぬ。さてこの掃除をよく仕れふせたる人がある。序にれはなし申ませう。上京邊

に。呉服悉皆を渡世にしてゐる老人夫婦がござりました。しかるに家をつぐ男女の子もなく。その身は次第に年はよる親類縁者より。あれこれ養子をもらふて見ても。どうした事歟とかくそだゝず。或は三十日。あるひは五十日。またはも十日。長いのが百日ぐらゐ。れよろ養子二十人ばかり。一人として辛抱をする者はない。ナント難義なものじやない歟。うろたへると此様な偏屈れやおや。鉄槌婆さまが。得て異國にはあるものじや。六十七十になるものゝ分別の通りに。つゞやはたちのものが。せぬといふて。小言ばかりいふて。日を送らば。一生養子はそだゝぬ。めいく若いときを顧て。れもひやりがないと。人の子はやしなはれぬものじや。一生金の番を仕つめて。末期の水一ばい汲でくれるものもないやうな。身の上に成行は菰かぶりではなうて。蒲團かぶりの。乞食するやうなものじやと。町内でのうはさされども。蓼くふ虫もすきずきとやらで。ある所の息子どのが。此噂を聞て。どうぞ其家へ養子にゆきたいと。おもひ付れた。たとへのふしに。小ぬか三合もつたら養子にゆくなと。世間

ではいへど。人の家をつぐといふは。格別の大功じや。そのゆゑは。絶たるをつぎ。廢たるをおこすは。聖人のをしへにして。則天地生々の道理じや。この息子どのも。こゝに目がついた歟。但しは辛抱の仕にくい家と聞て。やれやれ一辛抱して名を隣町にしられうとおもふた歟。何にもせよ有がたい志じや。さて縁をもとめて申しいれたところが。早速に事とゝのひ。引移つて。五七日たつてみれば。なるほど。今まで辛抱の仕人がない筈じや。中々むつかしい。両親の氣質。どう歟かう歟と。おもひわづらふうちに。二三ケ月もたちましたが。どうも堪忍が成にくい。所詮爺れやが偏屈をやめるか婆さまがしやべりやむかせぬど。モウ一日も辛抱がならぬ。けふは仲人の所へ往かうか。あすは親ざとへ往て。相談せうかと。煙艸盆引よせ。きせるあひてに。しあんの最中。折節てゝ親が。あたらしい障子をもとめて。大工どのを頼み。たて合せをして貰はるゝ。ナニが大工どのが。こてこてとたて合せをしらるゝを見れば。障子の上をけづりては鴨居にはめて見。下を削ては敷居へはめて見。つひに障子の上下

をけづり〲てごろの上障子に弓をはりて。柱の。ゆがみにあはせ。コットリと敷居鴨居にはめ。引て見れば自由になる。かの息子どのは。この仕業を。見るとも見ぬとも思はず。たゞいうつかりと。ながめてゐられたが。これもはず持たる煙管を取れとし。横手を丁とうつて。大に驚かれたが。これから分別がかはつて。辛抱が仕ようなり。トフ〲この家を相續仕れふせて。懇に兩親を介抱し。未期を見とゞけ。家名相續をしられたと申す事でござります。これがありがたい目のつけ所じや。其ゆゑは敷居鴨居は。はじめより家についてある道具。障子は外からあらたにはいつてくる道具。工合ようはまらぬは始よりしれてある。されども障子がはまらぬといふて。家づきの鴨居をけづり。敷居を削りて。障子を其まゝにはめる。大工どのはない。はまらぬときには。あたらしう入こむ障子の。上下をけづりて。敷居鴨居に。おはせてはめる。人の家を相續するのも。また是と同じ事じや。二親は家づきの敷居鴨居。養子は外からいりこむ障子じや。てゝ親の偏くつをやめるか。母親のしやべりがやまぬと。相續が出

來ぬといふは。敷居鴨居をけづりて。障子をそのまゝにたて合さうとする。無分別じや。ソンナ大工どのは。天がしたに。一人もない。はまらぬときには。何分障子の養子息子が。れれがく／＼の無分別を。けづり／＼て家づきの両親の。敷居鴨居に合さねば。工合よう。はまるものではないとはじめて此息子どのが。氣がついたと見ゆる。サアこゝが入用のところじや。全く養子ばかりの事ではない。嫁御でも。聟さまでも。奉公人衆でも。此咄しの義理を。よくのみこみ。親にむかひ主人にむかひ。夫に向はゞかならず當然の。道理を得て。今までのつらい悲しい。いま／＼しいが。立どころにとけ去て。大安樂を得ると。疑ひはござりませぬ。則これが。明德の明らかに成りました驗でござります 休息

「山川の末にながるゝとちがらもみをすてゝこそうかむ瀨もあれ・ すべて。山家にては。米麥に乏しく。あらぬものを食する中に。栃の實を餅團子にして。食する所多し。その製法は。栃の殼をとりて。實ばかり袋にいれて。谷川にひたしおき。よく苦みをさりて。餅團子にするなり。今歌のこゝろは。とちの實。谷

川にれつればしづむ。實をとりて。殻ばかりすつれば。浮んで流れます。人もれれがといふ身贔負身勝手を捨れば。うかみあがるといふにかけて。よみしうたときこゐまする。萬面白い事じや。これについて序に御披露申まする。去ぬる天保癸巳の年米穀のあたひ貴く。遠國には。飢渇にれよぶ人も。多くあるよし。聞ゐました。さる御歷々樣。不便の事に思しめされ救荒一助と題して。松の皮藁。土を食するの法を。御ためしあろばされ板にゑりて。ひろく諸人にほどこさせたまふ。御仁惠のありがたき事。申すもれろれあり。しかれども。百年ののち。自然ろの製法をうしなひまするとも。あらう歟とぞんじまして。恐れをもかへりみず。今その一法を。御披露申しまする。松の皮藁などは。不自由なる地もござりませう。土を食する事は。いかなる飢饉にも。盡る期なく。實に未曾有の良法で。ござります。どなたもヨウれ覺ゐなされませ。救荒一助の文に

土粥之製法　　或官醫の家法なり

一　土はいづかたの土にても。砂。石のすくなく。土めよきを撰び。土壹升に水

四升入れ。桶の中にてよくかきませ。上水をさる事數へん。また水四升入れ。よく〳〵かきませ。別の桶に入れ。底にのこる砂石をさり。又水四升入れ。前の如くかきませ。水にひたしおく事。三日のあひだ。一日に三べんづゝかきませ。すこし。上水をかへるなり。葛の粉わらびの粉を。水飛する法の如し。右の如く製法せし土へ。水二升入れ。煮てうすき粥の如くして食ふ。其うちへ菜大根など切こみ。おなじく煮て食ふもよし。一日に三合より五合までくらふべし。誠に此法をもちひば。五穀を食せざれども飢ず。身躰つよく。すこやかなりとぞ

右の通。製法の仕やうを。御しるしあそばされました。ありがたい思し召也。これ取次をいたします。しかし是が。滅多に。間に合ふてはならねども。耕や。餒ろの中にありと申せば。ゆだんがならぬ。しかし米をつんで。飢饉をまたうより。人の道を勤めて。飢饉をまぬがるゝが。肝要でござりませう。畢竟榮耀榮華があまつて。天地神明の。おにくしみを。蒙るより。困窮にもおち入ますれば。とか

く身最負身がつ手をすてゝ。家業大切に勤まするといづれ分限相應の、さかえにあはぬといふ事はござりませぬ。たとへば。艸木の花さき實るは、人の榮と同じ事じや。同じやうに。花さきみのる艸木にも。大小のござりまするは。人に貧富窮達の分ちがあると。同じ事でござります。さりながら。庭にれふる千草までも。花のさかぬといふ事は。ござりませぬ。花のさかぬは。此方の身最負身勝手が。やまぬのじや。身をすてゝこそうかむせもあれと。よんだ歌は。面白い事ではござりませぬ歟。是について有がたいはなしがある。ようれきゝなされて下さりませ。勢州龜山領。鈴鹿郡。川崎村といふ所に。江戸屋何がしと申しまして。相應の百姓がござりました。主は養子にて。妻は家づきの娘。其母と三人にて此外は召つかひの人。しかるに女房。一人の男子をうみまして。名を橋彌と申します。此子三ッのとし。次の女子出生に付橋彌に乳母をとりて。養育を致させました。これ則。今より十八年まへ。寅年の事でござります。さてかの出生の女子は。其後近村へ。つかはしましたが。また引づゞいて。女子出生こ

れも他へやりました所先かれにて。病死いたしました。されば打つゞき。出生も多く。猶また主の心得かたも能からず。次第に借金も出來。午どしの頃には。必死と困窮になりましたゆゑ。家内の諸道具は。申すに及ばず。田畑までうりはらひましても。猶借金もすまず。女房は困窮を苦にやみまして。申年の六月病死いたしました跡はさん〴〵になりゆき。村かたへも申し譯なく。主も養母もつゐに他國へかげをかくしました。殘りしものは乳母と橋彌とばかりでござります。此乳母名をれとせと申て。心ざまのかひ〴〵しい人でござりましたが。此江戸屋へ奉公に出まして。三年ばかりは。給金も貰ましたれど。そのゝちは不如意につき給金も出さず。乳母の親ざとよりは。いとまをとり歸れと申ますれども。さらに歸らず。その故は。此家次第に困窮に成り。ことに主といひ。養母といひ。心得かたも宜しからねば。いづれ遠からず。家名斷絶と見極ましたゆゑ。一しほ橋彌を。不便にぞんじまして。親里へ歸りがたく。つゐに自分の衣類を。と〴〵く賣はらひ。金子にいたして。れや里へ遣はし。自分は

生涯身をかため養ひ子をもりたて。江戸屋の家を。ふたゝび引起さんとの志をたて親里より送り一札をもらひ則これより川さき村の。人別に入ました。かばかりの大願なれば。所詮人のちからのおよばぬ所。かゝるをりにこそ神ほとけの力らをからんと。うみ山かけて。百里の道をたゞ一人。讃州象頭山。金ぴら大権現へ。はだしまゐりを。いたされました。さて神前にて。主の家をとりたてるこゝろざしをつげ。三ッの願だてをいたされました。そのわけは。在中にて若い女子のひとり住居をする事なれば。心よはくてはならず。又人にうたがはれぬため。先第一に鉄漿をふくまず。第二に髪に油をつかはず。第三に元結尺長にて髪をたばねる事をせまじと。かたく心に誓ひて。つねに國元へ無事に歸られました。ナント有り難い忠義ではござりませぬ歟。此人出生は同國桑名領員辨郡。五反田村の百姓。長七といふ人の娘じや。年は三十。みめかたちも見ぐるしからず。又盛り過た年といふでもなし。忠義の爲に身をかまはず。主の家を引起さうとの志し。ヨウ考へて御らうじませ。まねのなり

さうな事ではない。古人の語に。志ある者は成といふて。いか程の大事でも。志さへ立ますると。成就せぬといふ事はござりませぬ。譬ば川の中につく〳〵立て。雇はれた太公望のやうに。魚を釣てござる人がある。アレが中々主命や親のいひ付で出來さうなとではない。腰ぎり水につかつて。冷の入とも。疝氣の發るとも。罪も報もわすれ果て日がな一日竿を持て。立通しにたち。何程魚の取ると歟と思へば。一二寸の雜魚十ばかり。これが假令や名聞で出來るものではない。たゞ魚を釣たいといふ志ばかりで。此所作が出來たものじや。是が此日。俄に思ひついた志ではない。平生しごとするにも。商ひするにも。たゞ魚つる事ばかりおもふてゐる。此ねてもさめても忘ぬのが。志じや。古人も。念〳〵こゝに在て。忘れざるを志といふと。おほせられた。いづれよしあしにつけて。人は志の起らぬと。いふ事はない。同じ志を起すならば。このお乳母どのゝやうに。忠孝に志をたてますると。わが心にはづかしい事はない。畢竟おれは出來ぬ。これは出來ぬといふは志がたゝぬのじや。孟子のいはく。志は氣の帥

なりとこはいものじや。こゝろざしが碎けると。氣はつれてくさつてしまふ。人は氣によつて動く。その氣がくさると。箸一本持もゝのうく。返事するのもいやになり。かりそめにも頰ふくらし。間がな透がな。居睡てばかりゐる樣な。こし拔になるのはみな志がくだけたのじや。御用心なさりませ。志がたてば氣は引たち。女の身でも。百里のみちを。跣まゐりが出來まする。ましていはんや。臺のうへで親兄に事へ主人につかへ家業出精が。出來ぬといふは。六尺の犢鼻褌の手まへも。面目ない。しかしこれは男の事ばかりじやでござりませぬ。夫につかへ。姑につかへ。家内のとりしまりの出來ぬ女中は。鏡に顏は。おはされぬ答じやチトれ考へなされませ。これについてれかしい話がある。むかし鏡をしらぬ國の人。都へ上り。フト鏡屋の見出さきを見れば。何やらひかる物がある。ふしぎさうに差のぞいて。俄に大聲をあげ。ヤレ親父さまれなつかしいと。かの鏡をとらうとする。亭主きもを潰し。是はどうさつしやるのじや。イヤどうもしませぬ。是は此方の親父さまじや。めつさうなそれはこちらの

うりものじや。ナニうりもの歟、賣物ならば買ませうと。代物をはらひ。かの鏡を。宿屋へ持かへり。さて物いふて見ても。返事せぬ。これは娑婆と冥途の隔があれば。お聲がきこえぬさうな。何にもせよ。死わかれて三年目に。御目にかゝるぞいふは。有がたい事じやと。わが影ともしらず悦んで國もとへ持て歸り。ひそかに二階の長持へかくして置。出はいりに二階へあがる。あるとき女房が用事あつて。二階の長持のふたを。明て見れば。ひかるものがある。とり出して見れば。廿五六の女がゐる。是も又びつくりし。二階から飛んで下り。亭主の胸ぐらをつかまへて。なくやらわめくやら。悋氣喧嘩がはじまつた。ソコデ隣の妙琳が聞つけて。あいさつすると。いよ〳〵けんくはに花が咲く。妙琳も詮かたなく。ソンナラわしが二階へ往て。男か女か見届てきませうと。二階へかけ上つて。鏡を一目見ていつも又びつくりして。二かいから大聲をあげて。おまりれまへがたが悋氣喧嘩をさつしやるに依て。氣毒や。二かいの女中が。尼に成られましたといはれた。此話は。狂言にもしてみせる。ナント面白い趣向

じやないか。トックリとかみしめてごらうじませ。嫁姑の角づきあひ。親類の中たがひ兄弟いさかひ。女夫げんくは。村かた町内の不附合。親子主従の間だもうろたへると。此はなしの仲間うちが多い。ある人の道歌に「よしあしのうつるかゞみの影法師よく〳〵見れば我すがたなり。とかくわが身をかへりみるが。學問の所詮でござりまする。身に立歸さへすれば。忠孝はつとめよい。さてかの乳母は無事に村かたへかへり。たのしからぬ月日をおくりまするうち。果して乳母が推量のごとく。主も老母もちり〴〵に成ましたれば。いよ〳〵志立まして。端彌を守そだてまする。尤村かたへ。厄介をかけたきましたる。江戸屋の事なれば。その家名を起す事は。一應にては。村方へ對し。出來ぬ事でござりますれば。かねて村方の賴母子へかけこみ置ましたる銀子。幸にくじにあたりましたる故。則金五兩と銀十匁。冥加のため。村方に詫代としてさし出し。家名相續の義を願ました。村役人中を始その志をよろこび。ともどもに世話をいたしつかはしました。勿論家屋敷は。うり拂ましたれば。身を

おく所はございませねども。主人はいまだ。他國へかげをかくさぬ以前屋敷の隅に。形ばかりの小家をこしらへおきましたれば。是に引うつり。人の田地四反を。あづかりまして。兒を護ながら。田をすき艸をとり。こゑを荷ひ虫をはらひ。人の手をからずしての。艱難辛苦。いふ様もございませぬ。夜は夜なべに時のうつるのもしらず。朝はくらきより起て。しのゝめしらむ頃まで。草履草鞋をつくり。其隙には。織つむぎ縫針のわざをなして。只此兒の。手足のゝびるをたのしみに。年月をおくりまするうち。早くも橋彌十歳に成ました。しかもおとなしう生たち。常に乳母の側で手仕事をたすけます。ようした物じや。誰をしへねども。乳母とはいはずして。たゞかゝさまとよびまするは。ひとへに乳母の眞實。橋彌に徹する所が有て。おのづから斯うなりまする。扨うばのおや里には。産おとし置ましたる。實子文五郎と申す小兒。これも十歳あまりに。成ましたるゆゑ。此兒をも川崎むらへ取よせ。橋彌とゝもに一年あまり。手ならひをさせまして。其のち人をたのんで。松阪へ遣り。それより江戸へ。奉公につ

かはしました。これ全く。實の子を手もとで育てまするど。おのづから主の子を。疎略にする心がおこらう歟と。百里の外へ。うみの子を追やり。主の子を育まするは。ありがたい志。まとによい手本でござりまする。十八年のあひだ。朝夕の食物も。わが身は黍稗のやうなものに。糠をまぜてたべ。橋彌には。常体の食をたべさせ。兒は母とよべども。わが身は主從の心得を。失ひませぬは。丈夫も及ばぬ志でござります。此誠がとゞきまして。橋彌十八歳のとき。元の屋敷地を買もどし。四間ばりに七間の家を。あらたに建。其うへ馬をもかひ。猶小者一人をめしつかひ。田地一町四反をつくり。夫のみならず。さきに家出いたされました老母をも養ふ様に成ました。此はなしを丁稚衆も手代衆も。女子衆も。居眠らずとヨク聞ておかれませ。むかし。木曾殿といふ大將が有て北國に於て。平家と戰はれしとき。味方の兵へ申付て。若敵がたに。齋藤別當實盛と。名乘ものが有たら。かならず弓をひくな。軍をかへして攻口をゆるめよと。指圖せられた。これは義仲。いまだ襁褓のうちにありし頃。故あつて實盛に七ヶ日

やしなはれました事がござります。此恩をおもふて。勝ほこつた軍をかへして。實もりへ敵對せぬ志。ナントやしなはれた恩は。重いものではござりませぬか。七ケ日はさておき三日くはずにゐても。命がない。ましてや五年十年。あるひは半季一年。主人の養をうけて。その恩を思はず。うか〱と身勝手をはたらくは。勿躰ない事じやござりませぬ歟。在所にゐた時の事をヨウ思ひ出して見たがよい。着物は黒もめんの紋付。裾は若松に鶴のもやう。ねんごろに彩色したのを。此上もない晴着じやと思ひ。棒のやうな鼻汁たれて。㋲りで雑炊で。腹をふくらし。馬屋でゑを負ふてあるいた事を忘れて。こんな米はくはれぬの。鍋やきでなけりや。めしは喰ぬの。廣ざんとゆは。仕きせのやうで見ともないのと。ヨウ口がはれぬ事じや。これみなたれが〱の妄念のかたまりじや。ソコデさつぱり主人の恩を忘れ果て。こはいものじや。たれが此家にゐてやらずば。足のすりこ木になる程。使ひあるきしてやるものはあるまい。たれが商をしてやらずば。旦那があの樂は出來はせまい。わしがたれめしたいてやらず

ば。家内中が皆ひだる腹かゝへて。かつへたるであらうと。我もくと。鼻をのばして。家内中がたれかの會じや。これで思ひ出した話しがある。さる所の手代殿が。商たもくといふて。旦那へうろつき。彼とうらう鬢を多勢つれて。東山へ花見に出かけた。道でうちの隠居に。おもひがけなう出あひました。ソコデかの手代どのがびつくりし。挨拶どまぐれ。是はお久しうお目にかゝりませぬといひ捨て。あとしらなみと迯て戻つた。隠居も。あまりの事に興さめ。返答もせず。にがりきつてうちへ歸られた。扨夜に入て。かの手代を呼つけ。其方はけふ商に往たと聞たが。最前のざまは何じや。其上どこの國か。三百六十日鼻つき合してゐるおれに。久しうお目にかゝりませぬとは。なんとした挨拶じやときめ付られて。手代どのが。ハイあのやうなところで。おめにかゝりましたは。實に私がためには百年目でござりますといはれた。うろたへると。この百年目か一年のうちに。二三度づゝ。廻つてくる。御用心なされませ。かのおうばどのゝやうに。主人の家は取たてずとも。おさな兒はもり立ずとも。せめて

十年の年季をつゝがなうつとめ。親請人を。ひき出さぬやうに。勤めたいものでござります。或人の道歌に「人の子もまなべあしたに雀子のちうとやふべに鼠子もなく。忠孝は天下の大本。ドフゾあだ口になりとも。忠孝のはなしはなされるやうにいたしたい。ましてこれは。我身をすてゝ。忠節をまもりし。行状なれば。遂に御領主さまのお聞に達し。去る酉年。御褒美として。御米多く下したまはり。夫のみならず。折にふれて。御褒詞たび〳〵ありしよし。承はりまする。かの身をすてゝぞ浮む瀬もあれといふ。歌のこゝろも。今さら思ひ合されて。有がたい事ではござりませぬか。猶また川崎村。役人衆のはなしに。橋爾近ごろ馬をもとめて。つかひこゝろみまするに。甚よい馬なれば。さては博労どのゝ。よい馬を世話し呉られた。禮を申さずば成まいと。銀二両博労のかたへ持参し。厚く禮をいはれました。博労も大きにおどろき。凡世間の人は。よい馬を。直段やすう買とれば。買徳と心得。また間ちがひにて。誤てやすう賣たるをしらず顔して。ひそかに徳付たりと心得。すべて馬の賣かひに付て。あと

より禮にくる人はない。數十年博勞を渡世にしたが。かゝる事は珍らしい事じやと。人々へはなしたと申されました。又橋彌耕作の際には。馬をひいて若松浦といふて。三里ばかりの所へ。米をつけて通ひまする事がある。必その日は。馬のかいば。一日分をもたせまして猶その餘に。大きなるにぎり飯を。三ッこしらへ。これを橋彌にもたせていふは。馬のくつをうち替るとき。かならず一ッたべさせ。また若松に行て。荷をおろしたるとき。一ッたべさせ。歸るさ途中にて。のこる一ッを給させよと。是のみにかぎらず。其はじめ小屋住居の難儀の節にもなほ物をあはれむ心があつて。かゝるときなれば。人にものを施す事はならず。せめてもの志じやと自分食料の黍稗を。毎朝すこしづゝ。小鳥に施されたと申す事じや。古歌に

「山鳥のほろ／＼となく聲きけば。父かとぞ思ひ母かとぞ思ふ。これは行基菩薩のお歌と申しつたへます。いかさま一さい衆生を救はふといふ。大慈悲心より。およみなされた歌なれば。申すもおろかなる事でござりますれど。中

にも父かとぞおもひ。母かと思ふとは、格別にありがたう覺える所でござります。今このお乳母どのゝ慈悲心禽獸におよびまする事。其意味はぞんじませぬ迄も。みなし子をもりたて主人の家を引おこして。其父母を顯す。忠孝の志のありがたさは。行基菩薩のむかしにも。めつたにはづかしい事は。あるまいとぞんじます。孝經にも。身をたて道を行ひ。名を後世に揚るともあれば。お互に此お乳母どのを。見習ひたいものでござります。扨實子文五郎。これ又おとなしく。奉公いたし。去年江戸表より。初登とて。傍輩同道にて。松阪におち付まして。夫より母をたづねて。川さき村へ參られました。暫く逗留して文松阪へ歸るついで。兩宮へ參詣をする事なれば。橋彌をも共に。拜禮さろうと。其用意をしておろうばの申しまするは。文五郎は。御主人をおたのんで。奉公に出した上は。よいにつけ。わるいに付け。わしがあづからぬ事じやによつて。いふに及ばぬ。そなたは格別大切の身なれば。道中でかりそめにもうか〱せず。飯盛り女などに。かならずあいてになる事は。なりませぬぞ。もしや。病ひでもう

け身に蟲のつく事が有たら。太鼓御の家をつがつしやるとも。耻を雪ぐといふものではない。返す〴〵も。身を清淨にして。參詣をさつしやれ。この乳母は。ついてはゆかぬけれど。そなたが身持のわるいとを。道中でさつしやると。わしは内で直に知まするぞ。ゆめ〳〵忘れず。つゝしんで參宮をさつしやれと。懇に意見をしられたと。申す事を。橋彌直の話でござりまする。古歌に

「たらちねの親のまもりとあひそふる。心はかりはせきなとゝめそ。　此歌のこゝろに通ひて。一しほありがたふ覺ねまする。此こゝろにて橋彌をそだてた事なれば。その人がら。おとなしく。柔和にして。詞すくなく。在中の癖なれば。わかき人は。男も女も。夜はよもすがら。あそびまはれど。橋彌にかぎつて。一夜も他へあそびに出ず。これ全く乳母のきびしく教へ育ましたゆゑ篤實にたひたちました。されども乳母の嚴肅なる所あれば。却て密に識る人も。間あるよし。聞ねまする。しかしこれは全く。誠の道をしらぬゆゑじや。すべて此一條は。むかしの事でもなく。又唐土天竺の事でもない。現在たゞ今の事でしかる

私がしたしう本人橋詰にも聞き。又ろのところの人にもうけたまはりました準じや。これ。それはなし申す事は。どうぞ。御たがひに。この志を手本として。めい／＼腹の中を省。恥かしうない様に。本心をみがきたいものでござります。或人の歌に

「みな人のもとの心はますかゝみ。みがゝばなどかくもりはつべき。猶明ばんれはなし申しませう　下坐

湯の盤の銘にいはく。苟に日々に新にせば。日々にあらたにして又日に新たなり。これ又大學の傳にして。民をあらたにする事を。御示しなされたものでござります。先湯の盤の銘とは。昔もろこしに。殷の湯王と申したてまつる聖王のれはしまして。其はじめは。小國の君なれども。御徳の盛なるによつて。つゐに起て天子と御なりなされ。殷の世六百年の。基をれひらき遊ばされました。かほどの明君なれども。猶御つゝしみのために常に御身を。きよめさせ給ふ盤に。自ら警むるの詞を。御記しなされたを。湯の盤の銘と申まする。苟に日

に新たにせば。日々に新にして。又日に新なりとは夜前も申ごとく人は天より
うけ得たる。固有の本心と申て明らかな徳がうまれ付てござりますれども。
利欲のために昏まされます事がある。たとへば人の身のはじめ奇麗に。いさ
ぎよきも。よごれ仕事をすれば垢づくされども行水してあらひみがけば。も
とのごとく。奇麗になる。これを捨れけば。また垢づく。故に日々にあらひきよめ
て。垢をされば。いつも身は奇麗なり。本心も眞にその如く。一度利欲にくらみ
たるも。内に自からかへり見て。けふも愼み。あすもつゝしみ。日々に恐れ愼み
て。本心をあらひみがけば。其徳おのづから明らかにて。大きくいへば國。天下
をもれさめ。小さくいへば。家内をもれさめまする。此道理を御發明なされ盥
だれしるしなされて。しかも眞實でなければならぬゆゑ苟に日に新たにせ
ば。日々に新にして。又日に新なりとかれしるし遊ばされたものじや。是則殷の
湯王天の明命を。かへり見給ふ。實事でござります。されば聖人の御身でさへ。
かやうに。日々れつゝしみなされるに。銘々どもは何とも存ぜず。只うか〳〵

と瓢簞の川ながれ見る樣に。どこへをち付くといふあてもなく。あちらではコッツリ。こちらではコッツリと鼻うつても。おたま打ても。恥しいとも思はず。うのくせ家内を叱まはして。無理むたいに治めうとするは。ナントつまらぬものではござりませぬ歟。まづ人を治めうと思へば。己が本心を明らかにせいでは。所詮をさまるものではない。たま／＼本心を明らかにした樣に。覺ゆる事が有ても。又其跡は捨て置。ヨウ考て御らうじませ。埃はらひで朝。障子のさんをはらへば。ほこりはなくなり。その日一日はまづ奇麗な。翌日に成て見ればまたさんに埃がたまつてある。それを其まゝ捨置て。今日もあすも。拂はずに置て見たがよい。十日ほど立と一歩ほど埃がたまります。人の心もまた是と同じ事で。たま／＼一日愼しんでも其跡を捨ておけば眞黒によごれるとは障子埃を見て御すいさつなされませ。よし又每あさほこりを拂ふても。三町三所にやりなぐつて掃除するとかへつてすみ／＼にはよけいにたまる。とても掃除をするなら。叮嚀になさりませ。しかしケ樣に申せばとて。心の掃

除をわきにして障子ばかり拂ふてゐるとかへつて大間違が出來まする。是で思ひ出した話がある。先年播州へ下りました節。或人の話に此近所に茶人があつて。この頃二疊臺目の席が。建ました尤かき込天井に。つき上窓。宗匠のこのみで。至極ざんぐりと出來あがつた。ソコデ疊屋が疊をいれ表具屋がこし張するやら障子はるやら。手離になると。其あとは。下女一人と小もの一人。これは茶事ばかりに仕ふ。奉公人。此ものどもに。とくと掃除をさせました。さてさうぢが出來ると主が見分をせられたナニが奇麗なうへを奇麗にしたれば。申分はなけれども。あるじ中々合點せず。袂から虫目がねを出して。障子のさんのすみ〴〵をのぞきまはり。此樣な掃除の仕やうで。ドフ客が出來るものじや。これが居間にある。掃除道具を取てこい。ドフデれがせずば。埒があくまいと。めつたに叱りまはさるゝ。小者は心得。一の箱を取てくる主其中より掃除道具をとり出さるゝ。見れば。竹をほうく削た。魚ぐしを見るやうなものが一本。絹雜巾が一ツ。寒竹の。小さな火吹竹が一本。ナントめづらしい道

具だてじや。ござりませぬ歟。どうするかと見れば。魚串のさきに。絹巾をまき。障子の横ざん一本ヅヽ。叮嚀にふき。隅々はかの寒竹の火ふき竹で。フッ〱とふかれる。さりとては氣のどくなものじや。さて掃除仕廻て。是で氣がすんだと。ひかへたばこ盆をとりよせ。席のまん中にすはり。うてらを睨みまはしてゐらるゝに。折から時刻は四ッ半すぎ。ひがし請の席なれば。突あげ窓から。日がさしてむ。なに思はれたか。俄に小ものを呼で。横町の桶屋へ往て。椹の一番盥を取ていといはるゝ。小者畏りて大だらひを。重さうに持てかへると。コリヤ〱そこらにおくな。井戸の側へ持て往て。切藁で。内も外も。底まはりも。くつきりとあらふて。ずいぶんきれいな水を。一ぱい汲てみ。長七と手昇にして。この軒打の上へ。ソット持ていと。いはるゝ。小者心得て。この通りにして持てくると。コレさつや。己が居間に。あたらしい朝鮮うちわが有る。取てれとじやれ。下女が團扇をもつてくると。主やがて諸肌ぬいで。しかつべらしく。かの團扇を引さげ。たらひの水へ。ざんぶり突てみ。雫のたるのを提ながら。

かの日のさしこむ所へ。ぬれ團扇をさし出し。上へあげたり下へおろしたり。まねくやうにしてゐらるゝ。何をするのじやとおもへば。突上窓から。さし込日影に。一面にこまかい。ほこりが見ゆる是が氣にかゝるゆゑ。その埃をとる分別じや。ナント めづらしい掃除ずきじやござりませぬ歟。是みな心の掃除をせず。氣隨氣まゝが増長して。味噌汁がてつぺんへのぼり。此様なかん症やみに成まする。この心で家内を治めうとしても。一ツもおのれが思ふやうにならぬ。女房が氣が長うてどうもならぬ。旦那どのが。氣が短うてどうもならぬ。手代がのらで。どうもならぬ。旦那は目が明いでどうもならぬと。小言八百の。たゆる隙がない。ヨウ思ふて御らうじませ。思ふ様に成たら。どのやうな事が出來るぞ。小の月の大晦日うまれ。氣の短い。いらついた亭主は。なんぞいふとかゝを叱り。おのれがやうに。面ながなうまれ付では。此からい時節に所帯がもてるもの歟。寐所から尻はせ折て。ナゼ釜の下たき付ぬぞ。何さしてもグズ／＼と。牛糞に火の付たやうで。埒のあく事じやないと。日がな一日。小言

いふ。もし此亭主が。思ふやうに。女房も氣がみじかく。息子も嫁も短氣もので。手代も丁稚も。せはしなく。飯たき女までいらついて。おのれと同じ様におつたならと。どんなものでござりませう。夜は夜半から。門の戸引あけ。疊たゝくやら。飯炊くやら。家内中がはしり廻つて。氣のせくまゝに。飯はこげつく。茶釜の下はくすぼる。土瓶はうちわる。あぶら壺はひつくりかへす。何の事はない。一年中。煤はきぐらし。是でよさそうなもので。ござりませう歟。ヨウ思ふてごらうじませ。女房は女房で。氣の長いうまれつき。師走でも。正月の三ツも有やうな。顔付して。こちの旦那どのゝ様に。氣が短うては。命もせぬ。たまるものじやない。是では辛抱がならぬと。小言いふ。もし女房の思ふやうに。亭主も子も奉公人も。うち揃ふて。氣が長かつたら。中々箸持てめしはくはれぬ。晝まへに丁稚どのが。小便がしたさに。戸を明ると。お内儀が寐所から。すつぽんのやうに。首突出し。モウろ〳〵。家内を起しませう歟といへば。旦那どのが寐言半分に。晝にもならぬうちに起て。どうするものじやと。いはるゝ。下女ぬからぬかほ

で。一向夕めしと一緒に茶の下をたき付ませうといふ。是ではトントつまらぬものじや。すべて人の氣質には。色々があるうの色々があるので。てうど家がたさまるのじや。譬ば大工どのゝ家を建るに。材木の長いばかりでも。また太い斗でも。家はたゝぬ。人の家内も。其通りで。氣のみじかいも。長いも。偏屈も理屈者も皆入用じや。しかし。ひとつ〆括がないと。其色々で。かへつて治らぬ。今こゝに娘の子が四五人よつて。三味線の連彈をするのに同じ調子で。同じうたを。同じ手で彈てゐると。やかましい斗で。面白うない。半分はカンでひき。半分はオッで彈と音がちがふて面白い。それより猶琴がはいり。胡弓がはいり。太鼓つゞみ笛すりがね。色々の音がまじるほどいよ／＼囃はおもしろうなる。しかし二上りか三下りが。調子がひとつきまつてないと。これ又やかましいばかりで。どんとつまらぬ。故に聖人樂を制して。金石絲竹革木匏土の八音をもつて。をしへ給ふ。有がたい事ではござりませぬか。大工の家を建るは。曲尺といふきまりがあり琴三味線のつれ弾は。調子といふきまりがある。人

のうちにも親大事といふきまりがあると跡は何もかも工合ようおさまる
ものじやむかし漢土に。目くらと聾と躄と。三人常に交つて。酒を飲で樂しみ。
盲がうたへば。いざりが拍子どり。つんぼがたつて舞ふ。あるとき例の三人が。
さかもりの最中に。近所に火事があつて。人多くさわぎ。火事よ〱といへば。
盲一ばんに聞付。逃んとするに。方角がしれず。いざりは火の手を見付たれど。
腰ぬけてたつ事ならず。氣毒や聾は。火事のかたに尻むけてゐれば逃んとも
せず既に三人。必死の身となる此とき或人かけ付て。まづ目くらに。腰ぬけを
負せてたゝせ。聾に目くらの手びきをさす。こし拔は脊中から。聾に方角を指
さして見せる。聾は火事と合點してめくらの手を引て。走り出す。盲は方角は
しらねども。足は達者なれば。いざりを負ふてつんぼに手をひかれて。走て危
きをのがれたと。或先生の話でござります。これが甚おもしろい事じや。氣が
あはひで家内が治まらぬは。三人かたわの。火事にあふたやうなものじや。御
用心なされませ。よい事は見習はぬ盲。主親のいけんは。耳にいらぬ。聾仕事ぎ

らひのこし拔。わるうすると世間にあるものでござります。夫でもやつぱり。おれが〳〵で家内の者を叱りまはし。是ほどに心をつけても。家内がねから治まらぬ。おさまらぬ筈じや。主人も家來も女房も子も親大切といふ調子が。さだまらぬによつて。面白うゆかぬは。しれたとでござります是全く。本心のくらいによつて。身が脩まらぬのじや。身がおさまらぬによつて。家内が治まらぬ。とかく心の洗濯が大事じや。衣類のせんだくに。絶まがあると。盥の中に棒ふり虫がわきまする。又心のせんだくに。間斷があると家のうちに。いろいろの虫がわいて。旦那どのも奥さまも丁稚も下女もポン〳〵といふてはね廻る。まづ第一に。世かいの人が下愚に見え。我ひとりかしこう覺へる。わが氣に入た人は。善人のやうに思ひ。我氣にいらぬ人は。惡人の樣に見え。我をほめるものは。輕薄とは思ひながら。何とやら心よく我を毀るものは道理とは知ながら。あたり眼に忌きらひ。人の能あるをねたみ。人の出世をにくみ。人をこまらせ。おのれを高ぶり。おもてに正直をいひ散して。陰では身勝手をはたら

くなど。これみな心の洗濯の。たねまからわひた虫じや。滅多に油斷はなりませぬ。堯舜は性のまゝにし。湯武はこれに反ると孟子も仰られて。堯舜のやうな聖人は。うまれながらにして知り安んじて行ひたまふにより別に愼まいでも。其身其まゝ聖人じや。すでに湯王にいたつては。日にあらたに。日々にあらたにして愼につゝしみをかさね。間斷なうして。終に生れつきの。明德に。たち反て。聖人となりなされた。さるによつて。書經に。その德をほめて。諫に從て。咈はず。人に與して。備はらん事をもとめず。身を撿むるに。及ばざるが如くすと。あるをみれば。ひとへに明命をかへりみて。日新の功を。れつみなされたに違いはない況やめい／＼どもが。教にもよらず愼みもせず氣隨氣まゝにやり付たらば。ろくなものに。ならぬ筈でござります。此様な難さくものに成るのは。畢竟幼少からの。くせ付じや。障子をやぶらさぬと。虫もちになるの。叱たら虫が出よふのと氣まゝにさせた癖が付て。成人のゝち。人の異見もきかず。人が思ふ様にならぬといふては。かんしやくを起し。我ひとりかしこが

つて、此上もないものゝやうに心得、つねに本心をたどん玉に仕かへる事は、品玉よりも早い。嚴家の子は、嚴をしらずといふて、幼少より、嚴しい家に育つた子は、嚴しいといふ事はしらぬ。氣儘ものを俄にため直さうとすると、疳癪して物かげへすつこんで泣てばかりゐる樣になる。是みな其親愛する所にれねて、辟すといふて、可愛〳〵の、とんぼ返りして、育たあやまりじや。人の子は、教へずとも人になると、思ふてござるのは、大まちがひ。たとへば米麥をまけば米麥が、出來るに違はなけれども、こやしをいれ、艸をとり、さま〳〵に手いれをせねば、實がいらぬ。人の子もこれに同じ事で、うみ離しにして、教へもせず、捨ろだちに育て上て人らしい人にならぬと、小言いふのは、無理なものではござりませぬ歟。かやうな大病人は本腹が仕にくい。俄に手習は出來ず、本よむとはきらひなり。どうして療治をせうぞ。幸に先師石田先生、れひろめなされた、心學は、無學文盲でも、出來る學文じや。一たび本心を見つけまする と、生れ付に、無理のない事をしりまする。此無理のない心を手本にして、物ごと

をいたしますれば。身分相應の働が出來て。人なみ〳〵の人に成まする。ドフぞお手よりで御修行をなされて下さりませ。かく申せばとて。文字は。いらぬと申すのではござりませぬ。行て餘力あるときは。以て文を學ぶとも。見ゑますれば御隙のある方は。成だけ書物をよみなさるが宜しい。しかし銘々どもは。親につかへ。主につかへ。日用に追まはされ。人に損をかけまひと思へば。中々書物を。よんでゐる隙がない。さればといふて。學ばずにはゐられず。詮方なさに心學でもして。せめて格別の無理を。せぬやうにと存まするゆゑ。我とおなじやうな隙のない。お衆へ。おすゝめ申すことでござります。教は時をしるが第一じや。寒中に種まいても。物ははへぬ。これ時節がちがふによつてじや。人參は結構な藥でも。二階からおちて目のまふたには間に合ぬ。渡世のせはしい町人衆には。よい教でござります。去ながら。こまつた事には一ッつかまへてゐるものが有て。志が立にくい。これに付て。おもしろい話がある。眠さましに。おきゝなされてくだされい。さる町内に婚禮振廻がござりました。ナ

ロかお年寄をはじめ。町役家持の人々。一同に坐につきまするど。さま〴〵の馳走がある。時にかの年よりは酒と聞ては。笹の露にも醉ふ程の下戸じや。坐中を廻るさかづきの間。退屈さうにしてゐられると。亭主方が氣のどくにおもひ。お年寄さまは御酒はめし上らず。御退屈にござりませう。チトお菓子なりとも。御取下されいと。南京の古染付の壺に。大りんの金米糖をいれて。とし寄の前へ持てくる。坐中もこれはよいおてゝろ付。ひらにお菓子を。召上られいとすゝめられて。年寄もわるうはなし。しからば頂戴をいたしませうと。壺を膝へ引上。手首を突込しなに。少しきしむやうにおばへたが無理に手をさし入れて。つまみ出さうとするに。手首がつまつてぬけませぬ。どふぞして拔る歟と。いろ〳〵にてじ廻して見ても。引ぱつて見ても拔ず。まで〳〵して居らるゝと。側から見つけて。どうなされましたぞ。イヤ手がすこしつまりまして。思ふやうにぬけませぬと。眞がほに成ていはるゝ。夫は氣のどく。私が壺を持て居ませう。無理ひたいに。手をおひきなされと。一人がむかふへ廻つて壺

をつかまへ。おとへ引と。年よりは手を前へひく亙にゑいやと引あふありさま。景清と箕尾谷がしころ曳をする樣なと。座中が一同にどつと笑へど。年寄は中々笑はず泣がほに成て。どうもいたんでぬけませぬといふ。サア是から大騷ぎになり醫者どのをよんでこい難波骨つぎではゆくまいかと。酒宴の興もさめ果ました。時に五人組が一人すゝみ出ていづれもお騷なされな。我等うけたまはつた事がある。むかし司馬温公といふ人幼きとき。大勢の小兒とゝもに大きなる壺のほとりに遊びましたが。一人の小兒あやまつて。彼つぼの中へはまりました。大ぜいの子供はこれを見て。にげ歸つたが。司馬温公一人は歸らず側なる手ごろの石をとつて。かの壺へ投つけましたれば。つぼはわれて。はまつた小兒は。不思議に。命を助りましたと。或人の話じや。今お年寄の御難澁は。この話にヨウ似てある。いざや我等が。司馬温公となりて。たとへばうの古染付のつぼが。失禮ながら。何程高金の品でも。お年よりの腕にはかへられぬと。しかつべらしく。きせるを引さげ。むかふへまはれば。年寄は氣の

どくさうに。つぼをかぶつた手を突出すと。只一打にうち碎た。ナニが座中は金米糖がちらがつて。雪をふらした樣になると。ヤレ年より。を助りなされたかと。其手を見れば。ぬけぬところ道理なれ。金米糖を一杯つかんでおられたと申スとじや。ナントをかしい話ではござりませぬ歟。つかんだものをはなしさへすれば。自由自在に。手はぬけるものを。一度つかんだら。首がちぎれても。離すまいと。かた意地なうまれ付。それで自由自在の。大案樂が出來ぬのじや。かく申せば。錢かねの事のやうなれど。つかむものは。是ばかりではない。器量のよいのを抓み。かしこいをつかみ。まけをしみをつかみ。家がらをつかみ。身代のよいのを抓んで離すまいと。かつぎあるくに依て。敎をきく事もならず。樂をする事もならず。愼みも出來ず。詮方なさに積氣をさへたり。顔しかめたり。酒のんでまぎらしたり。さりとては。氣の毒なものでござります。つぼ割て仕廻ふてからは何いふても詮ない事じや。身代の壺をわらぬさきに御用心が第一でござります。夫でもわが本心は。あきらかな明徳は曇つてはない。洗

濯するにはおよばぬと。思ふ人があるものじや。是をたとへて申シまするに。私のやうな目くらが。一人旅をして。心易い旅籠屋にとまり。あすの朝は七ッ立をさして下されと頼む。亭主も心得朝早うたゝせまするとき目くらは旅の支度をとゝのへ。杖を持て。出ようとすると。亭主がいふには。まだ夜深いに。提灯をおもちなされ。おかし申シませう。何をいはつしやるやら。盲が提灯をもつて。何にするもので。イヱ／＼おまへには入ますまいけれど。くらがりをとぼし／＼。御出なさるゝと。御來の人が行あたりまする。夫で提灯を。お持なされと申スことじや。成ほどさうじや。私は行當らねども。得て目あきがつきあたる。さやうならばおかし下されいと。提灯をさげて。道五六町出ました所が。むかふから來る人が。目くらにはたと。つきあたりました。ソコデ大きに腹をたてゝ。おれに突あたるやつは目くら歟。向ふの人も癇癪にさはり。おれは盲ではない。そういふおのれがどう目くらじや。イヱ／＼おれは盲じやけれども。人には突あたらぬ。おのれが目くらに極まつた。向ふの人もいよ／＼腹たて。

それを盲といふ證據は。何ぞ譬が有ていふの歟。テ、譬がある。おのれを盲といふ證據は。この持てゐる。提灯が。おのれが目には。かゝらぬじやない歟と。ズットさし出す提灯の火は。宿屋を出た門口で。疾にきえて仕舞てゐる。ナント氣のどくな盲ではござりませぬか。火もともさぬ眞くろな。提灯をさげて。是でもあきらかなとおもふてゐるは。本心を見うしなふて。身勝手な心を。本心じや〳〵と思ひ。洗濯せうとも。愼まうとも思はぬ人に。ヨウ似たものでござります。どうぞ互に。火は消てはない歟と。日々に吟味がいたしたいものでござります　休息

「何事ものりをこえやく世の人の。心にかたき關もりもがな。いにしへは。國々に關をすゑて。まもりの人をつけ。往來の人をあらため。其子細なきものは。これを通し。子細あるものは。是をとゞめて都に告る。いはゆる美濃の國には。不破の關。攝津の國には。須磨の關。あるひは逢阪。または木幡など是なり。今此歌のこゝろは。人つねに。おそれ愼むの心を存して。私欲をふせぐ事は。猶關をま

もつて旅人を留むるがごとく。其よしあしをしらまほしとなり。もがなとはねがひのことばなり。然らざれば。私欲常に本心をくらまして。人の道に遠ざかること。多からんと。うち歎きたるさまなり。關守のたとへ。甚だ有難いことじや。これ則明徳をあきらかにするの手段。日新の工夫でござります。されば銘々どもが。人の道を失ひまするは。只われ〳〵の身贔負身勝手より。たてるのでござります。しかもこの身は。父母の縁によつて。生ずるとは申しながら。畢竟天地水火の塊じや。佛家では。地水火風のかたまりじやと申して。是を四大といふ。この四大むすんで。形をなせば。六根を具足いたします。六根とは。眼と耳、と鼻と口と身と意と。この六ツじや。これをまた六識ともいふ。此上第七を心識といひ。第八を阿頼耶識とも又含藏識ともいふ。此第七の心識が。一切の善悪邪正を辨別し。第八識は。一切の理を含んで。しかもする事なく。たゞ何ともなき物なり。已上これを八識といふ。識とは。しるといふ事じや。さて六識に。對するものは色と聲と香と味と觸ると法と。これを六塵といふ。れより世界に。

むるとあらゆるもの。此六ッの外に。もれるものはござりませぬ。尤此事を委しう申すと。生薬やの店おろしするやうで。すべてチンプンカンに成て分からぬ委しい事は。識者にをたづねなされませ。此方に入用はない。只さつしあれる所は。孟子に所謂。耳目の官は。思はずして物におほはると仰られて。目はみるが役。耳はきくが役しかも見れども。何の色としらずたゞ見るのみ。聞ども何の音としらず。只きくのみ。是を分別するものは。意識なり。しかれども。得てわるい方へ。かたむきやすき意なれば。第七の心に。しつかり敬畏るゝ所があれば。人の道がつとまります。さすれば心は大切な關所じや。こゝで油斷を致して。うかうかするとどのやうな悪事を。おもひ付うやら。甚怖いものじや。おそれ入たゝとへなれども。巳に東海道には今切箱根木曾かい道には。福島横川。すべて諸國の御關所で。明六ッの御太鼓がなると。御門がひらく。此とき御役人さまがたは。一同に御列座あそばされてござる。これが明六ッの太鼓をきいて。お上下をめすのではござりませぬ。夜半でも八ッでも。何時でも嚴重

に御番をわろばさるゝによつて。夜中何どき。御用物が通つても。ちつとも
れさしつかへがござりませぬ。人の心も眞其でとく。ねても覺ても。立にもゐ
るにも。畏れつゝしむの心が。番してゐれば。燈籠鬢や三味せん太鼓。鍋やきす
つぽんどぢやう汁を。めつたに。うかく通しはせぬ。誰しも用心する様なれ
ども。いつでも。通つてしまふた。跡での後悔。これがてうど。明六ッの太鼓を聞
て。門をひらくと。旅人は通りかゝる。ヤレ待てくれ。上下を着ねばならぬとい
ふてゐる。其際に。よいものもわるいものも。通り抜て仕廻ふ様なものじや。是
じやに依て。心の番がきよろつくと。どんな大變が起らうやらしれませぬ。故
に明命をかへりみるとも。申シてある。是について。おもしろいはなしがござ
ります。所は江戸の神田邊と聞たが。名は何とやら申シて。いたつて貧乏なく
らし方。夫婦に子供三人。亭主といふは三十四五。女房は二十八九。家は九尺二
間のうら居。鼠の巣を見るやうな住居。商賣は何と取さだめた事もなう。只閉
てもくれても。一合酒と女夫喧嘩。小博奕が商賣同前。あさは朝寐し。夜は夜ふ

かし。針を藏に積でも。たまらぬ身持ゆゑ。とう〳〵貧乏の底になつて。せう事なしに。青物賣と出かけ。四五百文の錢で親子五人がその日ぐらし。あさ五百文で土物だなで。大根を買て。其日一日。江戸中を大根〳〵と泣あるいて。暮がたに七百文ばかりにし。内へ戻ると米買へ。酒買へ。醬油かへ。油かへ。薪かへ。子どもの鼻ぐすり迄。二百文の錢で。あす一日の軍用金。のこつた五百は則あすの商賣のもと手。一日やすむと。一日くはずにゐねばならぬ。小せはしない身代。其中から無理無代に。雨がふるといふては。半日やすんで博奕うち頭痛がするといふては。晝からかへつて女夫げんくは。親子五人がくはずにゐる事も。折々あるときゝました。こんな咄しは。お子たちもよう聞て。お置なさるが宜しい。是はこれちいさいときに。とゝさまや。かゝさまの。おつしやる事を聞なんだ報で。成人して。此やうに罰があたつて。難儀な暮をせねばならぬ。隨分御両親のおつしやることを。ヨウ聞ねばなりませぬ。さてかの大根うりが例の通り。一荷の大根を荷ひ。朝早うから賣あるいた所が。どうした事やら。其日は

一把の大根もうれぬ日ざしをみれば、はや晝すぎ。腹の時計は八ッさがり。財布の中には、まだ一文の錢もたまらず。これはつまらぬ。此大根が暮がたまでに、七百文の錢に化ぬと、忽あすは釜の中に蜘蛛の巣がはる。どうしたらよからうと。工夫しながら、いつのまにやら。両國橋をわたり。本庄の屋敷町を、大根大根と。うりあるいた。或おやしきの。表長屋のまどの内から。コレ大根やとよぶ。ヤレうれしや。先知行にあり付たと。よぶ所を見れば表御門から右へ三ッ目の。むしこ窓のうちから呼だのじや。ソコデ大根やが。表御門から。荷をになひこんで。お長屋へまはつて見ると。門から三軒めの高塀のうち。門口には何某と標札がうつてある。荷をもち込でみれば。椽さきの障子をあけ。旦那どのが今月代をそられたとみゑて。鏡たてに向ふて。自分髮をゆひながら。その大根はいくらじやといふ。百に三把でござりますといへば。ソレハ高い。廿四文ヅヽにしておけといはるゝ。賣たさはうりたけれども。現在損のたつ事なれば。ドフゾ三把にお買なされて下されい。今朝から江戸中を泣あるいて。まだ

一把も買ませぬ。どうでも賣て歸らねばならぬ大根。かけ直は一切申シませぬといふ。おのれ侍がかぶりふり。夫でもたかい。まからずば先よしにせう。邪魔ながら持て歸れと云捨て。椽前の障子を。はたとしめられた大根屋もいろいろといふてみても。おのれ侍があいてにならぬ。ソコデ仕様もゝやうもなく。ハテつまらぬ。モウ日の入には間もなし。何でも四五百の錢を持て歸らぬと。親子五人があすの命がつながれぬ。なんとしたものであらうと。手を組で思案をしながら椽前の銅盥に。フット目が付て。こゝが大事の聞所じや。心の關所が。もだんなく番してゐたら。銅盥に。目はつかぬ筈じや。子のたまはく。君子固に窮す。小人窮すれば。こゝに濫すと。これは論語衛の靈公の篇に。孔子陳蔡のあひだにかこまれ。口中食を斷て。門人こと〴〵くやみつかれて。起ことあたはず。子路といふ人。甚これを慍つて。孔子に此事を問ていはく。君子もまた窮する事ありやと。此こゝろは。我師天にしたがふて。道をおこなふ。何のゆゑに。かくのごとく困窮するぞと問はれたるのとき。孔子の御返答には。君子

困窮とは。凡人の貧富窮達。これみな天命じや。君子といへ共困窮すべきときいたらば。其困窮をまもるが天命にしたがふといふものじや。こんきうのときにあたつて。困窮せまじと。さわぎ廻るは。天命にさかふて誠といふものにはあらず。されば困きうするときにあたつて。困窮するは。もとより。しれた事なり。しかるを。小人は困窮のときにのぞんで。無理に困窮せまじともがくゆゑ終に悪心がおこつて。ツトかなだらひに目がつくやうになる。こゝを指て。小人窮すれば。斯に濫すと。孔子が仰られたのじや。これは大根賣の事ばかりではない。われ〳〵どもの身のうへにも。これに似た事があるものじや親類の無心。據ない掛ずん。或は病難。あるひは貧乏。その時が廻つて來たら。どう思ふても遁れられる物ではない。かゝるがゆゑに中庸に。君子其のくらゐに素しておこなふと。有がたい天命の貧乏。ありがたい親類の無心。ありがたい掛ずん。有がたい病難と思ふて。大切に天命を守つてゐると。物にはすべて。來るときと去るときとあるもので。貧乏し通しにするものでもない。おのづから

遁れるみちが出來るものじや。是によい譬がござります。天竺で獵人が。猿をとるには。黐をまるめて猿のまへに投出しまする。猿ははらたて。かのとりもちを。隻手づかみにつかむと。指がついて離れぬ。驚いて左の手で。かのとりもちを取除うとすると。左の手もまたつく。ます〳〵あはてゝ。右の足をかけてとらんとすればまた右の足もつく。いよ〳〵うろたへ左の足でとらうとすれば。是も付く只一トまるめの黐のために。四ッの手あし。こと〴〵くついて。はなれず。さながら括り猿のやうになると。獵人が手足の間へ棒を通して。荷ふてかへるときゝました。是はこれ身を遁れんとするによつて括り猿になるのでござります。はじめ右の手でつかんだとき。騒がずと。じつと辛抱してゐるとおのづから。手のあたゝまりで。黐はなれて。自然とあやうきを遁れるに其辛抱が出來ぬによつて。うろたへ騒いで。いのちをうしなふ。ナント氣のどくなくゝり猿じやござりませぬ歟。とかく辛抱が大事じや。うろたへまいぞ。うろたへると銅だらひがほしうなります。ソコデかの大根うりが。椽さき

の障子はしめてある。あたりに見る人はなし。かの銅だらひを。水の入たまゝで。大根二三把の下へ。ソットかくす。怖いものじや。今までひろかつた世界が。立どころに狭うなつて。五尺のからだをしばらくもおく事がならぬ。ソコデ荷をかつぎ出して。門口を出ようとすると。障子のうちから。コレ大根屋と呼かけられる。ぬからぬ顔で。まかりませぬといふと。イヤ／＼直はねぎるまい。その大根買うといひさま。障子をさらりと明られた。大根屋もびつくりしたが。どうぞして逃ていのうとおもひ。何把ほど入まする。はした賣は出來ませぬといふ。イヤ／＼はしたでは買はぬ。その大根みな買はう。此様さきへならべてくれと。いはれる。サア大根屋も一生懸命。障子のしまつてあるうちなら。銅だらひの出しやうもあらうに。今さら銅盥が出されもせず。といふて賣まひともいはれず。逃てもかうにも。荷を捨て歸つてはならず。千百萬の後悔も今に成ては間に合ず。うろ／＼としてゐると。かのお侍が大根屋のかほをきつと見て。われはきつう。うろたへて居るぞよ。まづ銅盥から出して。大根の數

をかぞへてみよといはるゝ。大根屋は惣身に冷汗を流して。モウ切れる歟、ぶたれるかと。ワナ〳〵ふるひながら。かのかな盥を。恥かしさうにソット出して。土に手をつき。旦那さま眞平御免なされて下されませ。何をかくしませう。先刻も申シまするとふり。今朝からまだ一文の商もいたしませず。このまゝ歸まするとおす親子五人が。食まする事が成ませぬ、かなしい貧のねすみ根性。めんぼく次第もござりませぬ。七ッをかしらに子どもが三人。どうぞ親子五人の命を。お助なされて下さりませと。色青ざめて。土にあたまをすり付て。詫言する。かのお侍おもひの外。氣だてのよい人で。さらに立腹のけしきもみえず。イヤ〳〵其詫言には及ばぬ。まづ大根の數をよんで見よといはるゝ。恐〴〵ながら大根を椽へつみ上たところが。二十三把。かの御侍。やがて七百六十四文の錢をとり出し。かの大根うりをよんで。サア其方がいふ通りに。二十三把。七百六十四文。序にかなだらひをそうへて遣す。貧のねすみとはいひながら。われが根性は。餘ほどよごれておると見へる。此銅だらひは。顏や手あしを

あらふ道具なれど。たゞ顔手足をあらふ計では有まひ。心のあらひやうも。ありさうなものじや。無禮は咎めぬ。この銅盥を遣はす。持て歸つてとつくりと思案をし。心の垢をあらひたとせと。云捨て障子をしめて。うちへはいる。大根屋は夢見たやうに。有がたいやら。恥かしいやら。禮もいはれず詮方なさに銅盥と錢を。荷の中へ入て早々にかのやしきをにげて出て。はじめて生たやうに覺たが。恥かしいと思ふ心が。腹のうちに横たはつて。ウツ〳〵と家に歸る。是から經文に說てある。觀音の御利生刀刃斷々壞の。功德の段じや。常ならば小歌。うたひながら門口を這入と。荷籠を投すてゝ。錢財布を提げ。庭に立てゐながら。まづ翌日の手くばりじや。百が米かへ。廿四文が薪をかへ。十六文があぶらかへと。子どものはなぐすりから。今夜の寐酒のさかなまでのこる所もなう。でかしがほで。さはいする所なれど。けふは何と思ふてやら。いつにない門口をそつとはいり。しほ〳〵と上り口にこしをかけてわらぢのひもをとかうともせず。物をもいはず。さし俯てゐる。女房はくしまきあたまに。乳呑子を。

ふところへねぢこみ。埃はらひ持せながら。三寳荒神ともいふべきいきほひ。一調子はり上てうり上の錢をも見せず。あやまつたきつねどのゝやうに。俯いてばかり。居ねむつてゐるのか。但しはくらひ醉ふて戻つたの歟。見たくもない倒博奕と。御詫宣を上て見ても。一言も返答せぬ。ソコデ女ばうが。合點がゆかず。荷の中をみれば寳上の錢もろのまゝ。外に見なれぬ銅盥があるもゑ。これはこなたどこから持て歸らつしやつた。こちの内には不似合なかなだらひ。顔つきといひ。銅盥といひ。何ぞわけが有さうなとたくしかけて問つめる。こゝで亭主も面目なげに。けふの始末を。いちぶ始終はなし。さて〳〵其方が手まへも面目ないとはじめて夢がさめてきた。これが是ありがたいものじや。かの御侍が。心を洗へと。御意見の一言大根うりのはらに横はつたは。孟子のいはもる。羞惡の心は義の端なりと。仰られたもこれじや。此はづかしいといふは。本心の發見。恥をさへわすれねば。人は身はたつもの。わるうすると恥をかいても。恥かしいともおもはぬ人は。こゝろがよでれきつて。たとへば

鏡のくもつて影のうつらぬやうなものじや。幸に此大根うりは。よいお侍に出あふて。有がたい御意見に預かつたので。本心に立戻られた。これを觀音の御利生といふ。もし此ときに。銅盥をぬすみおふせたら。段々盗みにおもしろみが付て。はじめに恐ろしいとおもふたのが。後には心ようおぼへる様になる。古歌に「鳴子をばおのが羽かぜにおどろきて。心とさはぐ村すゞめかな。これはこれ。ぬす人も。はじめには己が足音におどろけども。後には石で戸をたたき割て。這入るやうになるは。鳴子におどろく村すゞめの。後には鳴子に馴て。とまるやうになると。同じ事じや。これを習性と成といふて。よい加減に目をさまさぬと。一生すたりものに成まする。この大根うりも。後には大盗人にもなり。首の座に直るやうに成のじやけれど。かのお侍の御意見の聲が耳に入て。たちもどりが出來て見れば。首きらるゝ氣づかひはない。これで見れば。御侍は觀音さまじや。則刀刃斷々壞のくどくでござります。洛東清水寺の。御寳前にかけたる。繪馬を見ますれば。罪人がしばられて。首の座に直つて。首を

さしのべてゐると。其後に太刀取が。太刀をふり上てゐる。其上の方に。觀音さまのたすがたがあらはれて。光明をはなつてござると。太刀とりの太刀が。段段にをれてある所が。書てある。どなたも御ぞんじでござりませうが。これが刀刃斷斷壞の功德を。書あらはしたものでみな心の事じや。こゝろさへ正しければ。刃向ふつるぎはないものじや。かゝるがゆゑに。仁者に敵なしとも申てある。されば此大根うりも。これから女夫こゝろを合せ。本心に成て。夜晝はたらき。終に三年目には。相應の八百屋になつて。はじめてかの銅盥を御侍の方へもどし。厚う御禮を申て。この御やしきの御出入になりました。これが舊染の汚をせんだくしたと。申すものでござります。是について話がある。さる片田舍に俄に目くらが出來て。大にくるしみ。諸方の醫者殿に見てもらふた處が。内傷眼でなほらぬといはるゝ。いかゝはせんと。あんじ煩ひましたが。幸ひ近國に。華陀流の療治をする人が有て。腦体をひらいて。頭痛の虫をとるの。目の玉をくりぬいて。洗濯するのと。とり〴〵の評判。かの病人。さつそく尋ねて

もき。療治をたのみました。醫者どの心易くうけあひ。これは目の玉をくり出して。洗濯すると忽に見へる様になるとやがて療治にかゝり。難なく目の玉をぬき出して燒酎であらひ。つるし柿をほすやうに。二の眼の玉を。竿にかけて干ておかれた。時に氣のどくな事ができました。屋根にゐる烏が見付て。目の玉を一ッくはへて逃ました。その羽おとにおどろき。醫者どのが見付て。肝を潰し。これはこまつた事ができた。目の玉が紛失しては。病人へいひわけがない。どうしたらよからうと。工夫してゐられたが。工夫もあればあるものじや。側にねてゐる。狗の子を見付て。これは屈竟なものがある。此狗の目の玉を借用して。病人を本復さそうと。忽ち狗を胯にはさんで。苦もなく狗の目をぬき出した。狗こそ迷惑。きやん／＼いふて。舞あるけど。醫者どのは。おさめた顔つきで。是も燒酎であらひ。よく乾かして。烏の殘した。人の目と一對にして。やがて病人の目の穴へはめまするど。奇妙に目が見え出した。病人は大きによろこび。狗の目が交つてゐるともしらず。きよろ／＼としてうれしがると。醫

者どのも。たかしさをかくして。どうじや。見ぬはかはつた事はないか。イヱイヱ何にも替りました事はございませぬといふ。醫者どの押つけて。何ぞ替つた事が有さうなものじや。ヨウ氣を付て見さつしやれと。いはれて。成ほどツゐれつしやると。少しかはつた事がござります。さうであらう／＼。どう替りました。ハイ只今雪隱へ參りまして。下をのぞいたとき。右の目ではきたなふ見ぬ。左の目では。何とやらこのもしう思ひますといはれました。好もしい筈じや。ひだりの目は狗の目じや。これが是銘々どもにヨウ似たはなしじや。忠孝はよい事と思へども。又どうやらするといやになる。とくとれ考へなされて。御らうじませ。うろたへると人も半分獸の仲間入をしてゐる事があるものじや。盜むの殺すのといふ樣な。大よそれはあるまいけれども。また少々づゝの垢づきがあるまいともいはれぬ。目の玉のせんだくより。心のせんだくが肝心でござります。ある人の歌に「ふりにけるならのみやこの習はしも。あらたまりもく君がまことに。猶跡は明晩れはなし申しませう。下坐

詩云邦畿千里。これ民の止まるところなり。これまた大學の傳に。商頌玄鳥の篇を引て。經文。至善にとゞまるの工夫を。御しめしなされたのでござります。まづ邦畿とは。たとへば山城大和河內和泉攝津を。五畿內といふやうなもので。畿內は天子の御座所。千里とは其廣きをさして申しまする。惟民の止る所とは。からもやまとも。天子のおはします所を。都といふて。土地うるはしく。四方へ通路よく。何ひとつ不自由なる事なく。おのづから風俗もいやしからず。萬事につけて便よければ。人多く集りすむ。止るといふは。其所へうつり住で。外へ動かぬと申す事じや。されば此詩をおひきなされたる意は。人の本心もと明らかなるものなれば。是にしたがふときは。君に事へ。親につかへ。夫に事へ。目うへに事へ世間の人にまじはるまでも。力をいれずして。自由自在なれば。此にとゞまれとの。おしめしでござります。これを至善にとゞまるといふ。さてこの至善は。形の上で見ますれば。孝弟忠信。禮義廉耻。そのあぢはひをいはんとすれば。啞がゆめを見たやうなもので。人に對して話されませぬ。しか

らば何もない歟と申せばないではない押て申さうならきよろりとした様なものでござります又斯申すと早合點してさては何もしらぬきよろさくを見るやうなもの歟とおもへば先師堵菴先生の道歌に「きよろりとはいかなるものかしらねども味噌をねぶれば味をしると申してたとへば長吉どのが晝寐をしてゐる男ともしらず女ともしらずまた寐てゐるともしらずなにもしらぬところへ旦那どのがコレ長吉とよびなさると其聲は下からハイと返事が出るまたおさよどのが長吉どんと呼ぶ聲のしたにチイと返事が出るこのハイとチイとは何ものが分別して返事をしはけたチトかんがへて御らうじませ味噌をねぶれば味をしるしかも知るといへば何ぞしるらしいものがある様に聞ゑますれどなにもしるらしいものはござりませぬ又ないといへば何もないと御合點なさるれど中々さやうなものではござりませぬ所詮あるともないとも分別はとゞきませぬ只きよろりといたして用が勸まるのでござります今ひとつ申して見ませう赤子の生れ

れちた所は。只芋虫を見る様にうごく〳〵と動くばかり。目もみえねば。さため
て耳も聞へますまい。もとより物はいはれず。たゞホギヤア〳〵。此とき知恵
らしいものも。分別らしい物も。何もありさうには見へませぬ。しかるに母れ
やが乳ぶさをふくめると。赤子が舌をもつて。其乳ぶさをまいて乳を吸ます。
この乳首を。舌でまかねば。吸れぬといふ事は何者が分別したぞ。ナント奇妙
なものではござりませぬ歟。その赤子がどうもせずに。只大きうなりました
のでござります。三ッのとし知恵を貰ふたのでもなし。五ッから分別が出來
たのでもなし。もとより。たゞ赤子が成人したのなり。しからば三十も赤子。五
十も赤子。八十も赤子。赤子となにも變りはない。おか子には私の心がない。至
善ばかりじや。大人には私の心が有て。夫だけおか子とちがひます。かるが故
に。孟子も大人は。その赤子の心を。うしなはずと。仰られました。赤子の心とは
只私の心のない事を申しまするのじや。私心なければ。至善ばかりで。我とい
ふものはない。我といふものがなければ。只むかふまゝなり。向ふまゝなれば。

忠孝はおのづからつとまる道理。この我なしを見つけよと。先師がたの御世話をなされるのでござります。すでにいろはうたにも我をたてねば悪事は出來ぬ。しれよとこゝろにわれはないと。堵庵先生も仰られて我なしの勤は。勤といふことをしらぬ。もし勤をしる事あらば。それは我ありといふものでござります。それは嫁じや。それは姑じや。それは旦那じや。それは娘じや。それは親を大事にかけてゐる。それは奉公に。精を出してゐると。覺たらば本眞ものではござりませぬ。たとへば人つねに額を忘れてゐれども。額を覺ると。かならず頭痛がしてある。齒はつねに忘れてゐれども。覺るときは齒がいたんである。此方にこたへがあると眞ものではござりませぬ。今一ツたとへて申しませう揚弓をひくに。的にあたれば。カチリと音がして。矢が戻りてこたへがある。然れども。是は的の眞中に。中つたのではない。きりといふて。的のまん中に穴がある。これにあたると。矢もゝどらず。カチリといふ音もなく。こたへがないてゝが至善の場じや。これを我なしと申します。カチリ〳〵

と書のする間は。まだ我があると思しめせ。若また大間違にまちがふて。人の道を失まするとずる事なす事。矢が幕へあたつた様なもので。尻すばりにでう〳〵と落てしまふ。埒もないものでござります。道は須臾もはなるべからず。道にあたれば。生れるも。死ぬるも。苦しむも。樂しむも我なしでするゆへ。我にはあづからぬ。かるがゆへに。大安樂でござります。又人のみちを失ますると。生死苦樂。しつかりとこたへが出來ます是は丁度。いたむに依て齒をおればに。いたむによつて額を覺るやうなものでござります。このところをヨウ味はふて御ちうじませ。兎角道でなければなりませぬ。朝に道を聞て。ゆふべに死すとも。可なりと。孔夫子の仰せられたは。僞ではござりませぬ。斯う申ても。かしこいお人は中々御合點なされぬ。聖人の道じやの。仁義五常のみちじやのと。そんなまはり遠いみちでは。今の時節に。世わたりが出來るもの歟。とかく近みちでなければならぬと。滅多に近みちをこのむ人があるものじや其ちか道トントあてには成ませぬ。これについておかしいはなしがある。さると

ころに勘辨者が有て。何事によらず。近道をこのむ人じや。あるとき一人旅を致されましたが、途中にれねて尾籠な事じやが急に大便にゆきたうなつた。目ざしを見れば四ッ半すぎ。いま一ト息あるいたら驛までゆくのじやに。こまつたものじや大用に隙がいると。餘ほどの道を損せにやならぬ。どうぞあるき〳〵。用を便じる仕かたはない歟と。色々と近道をかんがへても。小用とちがふて。大用は工めんがわるい。とかくするうち。ます〳〵急に成てくる。せんかたなさに道ばたの野雪隠へ。はしりてみ。ほしいまゝに黄海にまたがりながら。是はつまらぬ。斯隙どつてゐると。大分のみちがおくれる。どうぞ仕やうはない事かと。勘辨を廻らしたが。忽ち一ッの近みちを思ひついた。其子細は。時は晝まへ。今こゝで隙をいれて又むかふの驛で晝仕度をすると。二重三重の休息になり。どさら茶の錢もいり。かた〴〵もつて不勘辨じや。それより斯してゐる隙に懐中の辨當をしてやると。茶の錢もいらず。二重やすみもせず。至極よい近みちじやと。靜にやき飯をとり出し。菰だれのすきまから。菜種

ばたけを遠見して悠々と給てゐられた。扨樂あれば苦ありじや。氣のどくな事が出來た。山蜂の大きなやつが。かの雪隱へ飛こんで。大事の所をさしれつた。びつくりして蜂はらう拍子に手にのせた皮包みの燒飯をれもはず野壺へとりおとして。又びつくりし。暫くのぞいてゐられたが横手を打てハヽアこれは近道じやといはれたナントおもしろいはなしではござりませぬか。是ほどの近道はない燒めしをかみこなして喉を通し腹を通して。而して後。下へおとすのでござります。それを直に手のひらから。野つぼへおとしたものなれば。弓と弦ほどちがふ近みち。此上の近道はない。こゝが大事の聞どころでござります。近みちはちか道なれど。喉をこさぬと。やき飯が實にならぬ。やはり遠いやうでも。本街道でなければ。近道はやくにたゝぬ。金もうけの近みちしては。相場事にかゝり。立身出世の近みちしては山事にかゝり。婚禮のちか道しては。主親の家をほり出され。葬禮の近道しては。心中身なげ首くゝり。みな氣のみじかい人たちじや。短慮功をなさずのうたにいろがずばぬれ

ざらましを旅人のおとよりはるゝ野路のむらさめ。しばらく見あはせて辛抱すると。時節到來のあるものを。さり迚は短氣ものが多い。綿蠻たる黄鳥。丘隅にとゞまるといふて。聲面白うさへづる小鳥も。身の大事はようしつて。高いところや。木深いところの。枝葉のしげつた中に身をおいて。やすらかに遊んでゐる。これは。弓鉄炮もとゞかず。うつ事のならぬ所を考て。とまるのでござります。さるによつて。孔子もこの詩を御評判なされて。止るにおいて。其とゞまるところをしる。人をもつて。鳥にだも如ざるべけんやと。仰られた。これは。鳥におとるといふ事ではない。人として。鳥にもおとるべき歟と。激まして。志をおこさせ。我なしの場所にとゞまらさうと。有がたい示しでござります。すべて鳥にかぎらず。蜘蛛は。大風ふく前には。巣をたゝみ。狐は。雨ふるまへに穴をふさぐと申しつたへて。未然にそのわざわひを。用心いたします。人は只。利欲のために。まなこくらんで。目の前に倒るゝともしらず。あれがほしいこれがすまぬと。何事も自分の才覺で。出來るものゝ様におればねならぬ事も

なる様に心得て。無理無躰にくるしみます。其實はおくびひとつくつさめ一ツ。指一本うごかす事も。時節到來でなければ。本眞の事は出來ませぬ。心學をするは。何も外の事を。稽古するのではござりませぬ。なる事はなるとしり。ならぬ事はならぬとしる。故に甚安樂にござります。此安樂をせうとおもへば。本心をしるが始じや。本心をしれば。無理は出來ぬ。もし本心をしつて。無理をする人が有たらば。それは本心をしらぬのでござります。かく申せば。わたくしが無理せず。無理いはぬやうに聞ゑますれど。中々さやうではござりませぬ。箕うり笠でひると申て。かへつて常に無理をいたします。これについて今ひとつ話がある。てうど私のやうなものが。死で極樂へ参りました。觀音勢至が御出むかひなされて。やがて阿彌陀如來の御前へつれて御出なされた。如來のおつしやるには。向後其方も。極樂の仲間いりをするものなれば。ごくらくのやうすも。見覺ゑておかねばならぬ。今日はまづ見物をしたがよいと。觀音さまに案内を仰付られました。觀世音心得て。かの亡者を導き。そこゝと極

樂の体相を御見せなさる。七寶莊嚴目をおどろかし。天人の舞樂耳にみち。八功徳池には蓮のはなざかり。伽綾頻伽のさえづる聲はうぐひすよりもおもしろく。あなたこなたと見物するうち。一の堂へ御案内なされた。見れば質屋の藏の中見るやうに。四方に棚をつりまはして。夥しいきくらげ。數の子がつみ上てある。さては百味の飲食を。調進する御臺所かともおもひ。觀音さまに申すは。あの仰山なきくらげは。佛達の食物になりますの歟と問ましたればイヤ〳〵あれはきくらげではない。それなら何でござりまする。されば。あれは人娑婆にありしとき。常に忠孝の話を聞て。實にもと思ひ。また談儀說法を聞て。ありがたいと思へども。身につとむるところの所作は。惡いとばかりして。ゐる者が死ぬると。からだは無間地獄へおち。耳ばかり極樂まゐりする。あれは耳の佛になつたのじやと。仰られた。ソコデ又たづね申スは。耳の干物は聞へましたが。あのかずの子は極樂には不似合なもの。あれはどうしたとでござりまする。觀世嘆れ叱りなされて。めつさうな。極樂に腥いものが。あつて

たまるもの歟。おれはかすの子ではない。娑婆にあるとき。口に忠孝をのべて。人を教訓し。口に經論を說て。人を濟度し。しかもろの身は。氣ずい氣まゝをはたらく。そんなやつが死ぬるぞ。からだは忽ち地獄へゆき。舌ばかり極樂まゐりする。おれは舌の干物じやと。仰られた。ナントこはい話ではござりませぬ歟。私どもは舌ばかり極樂まゐりする連中。またわるうするとあなたがたは。耳ばかり極樂まゐりする。お仲間うちじや。御油斷はなりませぬ。感心上手のれてならひ下手。口ばかりの龍がしらで。尻のないにはこまつたものじや。堯舜の御代といへば。遊んでゐても。口過の出來るものゝやうに思ひ。延喜天暦の聖代といへば。只酒のんでゐらるゝとそれもふは。みな迷ひでござります。聖人の御代ほど。家業に精出し。正直にせねば。世わたりは出來ませぬ。互に今日。けつこうな御代に生れ合せ。亂ばう狼藉の患もなく。山家の隅々。海のはし〴〵まで。何ひとつ不自由のない。有難い御上様の。御仁惠をかうむり。せめてもの冥加のために。めい〳〵分限をかへりみて。其止るべき所にといまり。大切に御

法度を守て。少しでも御苦労を。かけたてまつらぬ様にいたさねば。罰があたりますかした物を返さぬ歟。何ぞつまらぬ事が出来ると。御上様の御存じ遊ばした事の様に。假初にも公事訴訟勿体ない事ではない歟。これ皆其とゞまるところに止らぬによつてじや。止る所とは。主人は家来をあはれみ。家来は主人をうやまひ。子は親に孝。親は子をいつくしみ。世間の人とは眞實にまじはる。これが互の止り所じや。もし此場所をふみはづすと。何處まで落てもかうやら。むしろの着物に竹の杖まで。うろたへると落まする。自分の不了簡には氣もつかず。時節がわるいの。鬼門がたゝるのと。雪隠をたて直したり。親のゆづりの家蔵を。切くだいたり。時節に科を負せて見たり。家蔵に科をれふせて。我とがを遁れうとすれども。天罰はのがれぬ。尤家相も方角もかまはぬと申すのではござりませぬ。それ〳〵道理のある事なれど。所詮算用しあげた所は。心の事じや。家の本は身。身のもとは心じや。其心がゆがんで有たら。人相がよふても。家相がようても。方位がようても。どても叶はぬ。内のやまひは。

外から膏藥はつても治らぬ。人相がわるいといふて。ゆがんだ鼻が。ねぢ直されるものでもない。然れども。心のたて直しさへすれば。恐い顔も柔和になり。下品のすがたも上品になる。只大せつなは心のもち様じや。わが友何がしといふ人。商賣の透間。なぐさみに。面をつくられましたとき或人のいふは。此頃は顔色もよからず。何ぞ腹のたつ事はないかと。問れました。何がし合點ゆかずさらに腹たてた覺はござらぬといふ。尋ねし人。ふしぎさうにして歸られました。其のち半季ばかりたつて。又面を作る。さきに尋ねし人。折節また來あはせました。何がしさきの事をおもひ出し。此頃わが顔色は。いかにと問ましたれば。かの人うち笑て。至ごく柔和で。前に見し顔色とは。大きなちがひじやといはれた。何がし此ときはじめて心付ましたさきに顔色の。恐ろしといはれしときは。鬼の面を作つてゐた。此面を作るには。かならず齒をくひしばり。眼をいからせなど。こゝろにさま〴〵工夫してつくる。其心わが顔色にあらわれ。恐ろしう見ゑたものと見ゆる。今またおたふくの面をつくる。心はいか

にも。愛敬を思ふて。作るゆゑわが顔色。おのづから柔和に。見えたものと覺へる。さるにても。心は大事のものじやと。物がたりいたされました。これでヨウお考なされませ。古人の語に。一切の法は。一心の異名なりといふてある。心をすてゝ。別にとるべき法はない。心を正しうし。家業を精出して。家相も人相も。見ておもらひなされませ。休息

「水鳥のゆくもかへるも跡たえて。されどもみちはわすれざりけり。ナント有がたい歌じやござりませぬか。飯たきのおさんどんが。目をこすり〳〵。釜の前で火うちカチ〳〵。此とき何がある。わしは大和の新口村で生れ。藪際の。次郎兵衛後家の。むすめじやともおもはず。手でうつやら足でうつやら。さつぱりと何もない。されども道はわすれざりけり。見事茶がまの下がもえる。旦那どのが嬶の棚のまへで。どんがめや鯉鮒をよぶやうに。かしは手パナ〳〵。此とき金もちらしいものが有た歟。百貫目もちやら。千貫目持やら。立てゐたやら。居つてゐたやら。されどもみちは忘れざりけり。影もかたちもない人が。子

孫長久。商賣繁昌といふ。何がいふたぞ。うまいものじやござりませぬ歟。朝から晩まで。我なしで勤めてござる。樂なものじや。これを至善に止まると申します。至善に止るといへば。何ぞ至善らしいものがある樣にればね。窮屈がつてきく事もいやがる。至善はそんな。石で手をつめた樣なものではない。あなたがたの。日がな一日。何心なう仕てござる事が。皆至善の働きじや。斯いふと。早合點する人は。ろんならぬれが。れやま買うのも。ばくちうつのも。皆至善歟と。れつしやらう。さううまうは。立合ぬ。至善は何もればねませぬ。我なしのきつすいじやばくちうつたり。れ山買のは。われなしでは出來ぬ。人が見付はせぬ歟。聞てはゐぬ歟。内の首尾はどうあらうと。何かはしらず。苦しいものをになひあるく。ナント至善に止まらぬといふものは。窮屈なものではござりませぬ歟。心に何ともなかつたら。至善じや。心に咎めるとが有たら。我なしではござりませぬ。どうぞ御機嫌よう。一日我なしでれ勤なされませ。樂なものじや。此我なしをようつとめた人がある。序にればなし申しませう。越前の國。大

野郡。大野領に。西市村と申して。御城下をはなれまする事半道ばかり。高八石あまり。持ましたる。次郎右衛門といふ。百姓がござりました。女房には早うはなれ。倅一人もちまして。名を次左衛門と申しまする。親子さしむかひで。農業をつとめて。居まするうち。親類よりも。この次左衛門に。嫁の世話を。してくれるものも。ござりましたれど。次左衛門。合點いたしませず。その故は。次第にとしよられる親の事なれば。せめて心づかひを。懸ぬ様にいたしたい。他のむすめをもらへば。少々親の氣にいらぬ事が有ても義理なれば。辛抱もせねばならず。左すれば親に苦勞をかける事ゆゑ。まづ女房はもちますまいと。かたく斷を申して。心やすう親子くらされました。ナント有がたい志じやござりませぬか。是に引かへ。世間には。年のゆかぬうちから。女房を待たがり。百文の錢をまうけるすべもしらず。親のお蔭で。ひだるい目せぬを。己が力とおもひ。わが口ひとつ。給るほどの手覺もないくせに。あんな器量は氣にいらぬの。こんな娘でなければ。ならぬのと。小言八百いひちらす。不孝な子もあるのに。此次

左衛門は。親の心をやすめうと。女房をとはりいふは。さりとは。やさしい志じや。これがほんの我なしと申すもの。則ち至善に止まつて。ゐるのでござります。さて父の次郎右衛門は。との外長いきしたる人で。すでに年八十あまりに成て。老にぼれじや。ことばも所作も不揃になりたゝ小児の様になられましたたとへのふしに。八十の三ッ子と申通り。ぐはんぜのない所作にて。九十六才まで。存命せられました。すべて此十六ヶ年の間。あとさきわかぬ親につかへて。一度もろむかず。實に我なしの行状。ろの一二ヶ條をればなし申しませう。あるとしの冬。みぞれのつようふりまする日。次左衛門村用にて。御城下の郷宿。油屋何がしと。いふかたへ参られました。亭主何がし。次左衛門が形を見まするに。蓑かさもきず。半道あまりをみぞれにうたれて。参りましたれば。衣類は悉くづぶぬれ。亭主大にれどろき。今朝よりのみぞれに。何もゑ。みのかさも。着てはござらぬぞ。若寒氣にあたらばいかゞせらるゝ。早う衣類をぬがつしやれ。火にあぶつて進ぜませうといふ。次左衛門笑ひながら。イエ〳〵ぬれあ

るくは常の事じや。親どものいはれるやうに。致しますれば。おかげで寒氣も身にいりませぬ。出がけに簑かさの用意をいたしたれば。親どもがいはるゝには。此天氣のよいに。簑かさをきたら人がわらふ。やめにせよと申されました。夫ゆゑに。簑かさはきませぬと何氣なき体に申されました。此の事は油屋某がし。私へ直にはなしでござりまする。すべて忠孝の人は。寒暑もたやすく。身を傷る事が出來ませぬ。何ゆゑなれば。常に精神みちて。少しのすき間がないゆゑ寒邪その虚をうかゞふことが成ませぬ。銘々どもは。飽までにくらひ。暖に着て。猶それでも飽たらず。火燵に寄り。すき間の風をふせぎ。其うへ居間に火鉢をたくはへ間をあたゝめると名附て。しきりに暖氣をこしらへ。剰へ酒をのんで晝寐まする。これでは寒氣にあたらねばならぬ筈じや。其うへに間思雜慮で氣をやぶり。透間だらけのからだへ。滅多に陽氣をかり込んだものじやによつて。立居する拍子に。必陽は陰をまねいて。かのすきまより寒邪をうちへ引いれまするど。夫から肩がてるやら頭痛がするやら。歯がいたむや

ら。難なく。至極の病者となる。はなはだこはい事じや。わたくしどもが。年中かやうなことをして。すたれものに成ました。御用心なされませ。忠孝はよい事といふばかりではない。第一はからだの養生。長生する妙術じや。どなたもお勸なされませ。父あるとき次左衛門。菜種を賣まして。金三歩をうけとり。てゝ親に見せて。これ程になりましたといふ。父はにこ〳〵して。其うち二歩。それによこせといはるゝ。ハイといふて。金二歩をわたし。さらに其子細を問ませぬ。父は二歩のかねを財布にいれ。首にかけて。うちの馬が大分よはつた。此二歩の金を。あの馬に足して博勞どのへ往て。よい馬と仕かへて來うといふ。次左衛門大によろこび。ホンニ馬がよはりました。御くらうながら。よい馬と。お仕かへなされて下されいと。申されました。實は小百姓の事なれば。馬を持はいたしませねども。父が馬といへば。其意にしたがふて。馬といふ。さらに一言も咎めませぬ。菜種代。金三歩は。小家では。いたつて。大切の金でござりますれども。父の望むときは。明日の事も思ひませずたゞ父のこゝろにまかせて。一言

も口でたへをいたしませぬは。いたつて成にくい事では。ござりませぬ歟。さて次郎右衛門は。老にてこそぼれたれ。もとより達者なれば。かの二歩の金を持て杖にすがりて御城下へ出。あなたこなたと。古道具屋をあるきましたが。或家にて。塗盃のかけ損じたると印籠のろんじたるを手にとり。直段を尋ねましたれば。此家の亭主。心ざまのよからぬ者か。代金二歩なりと申しました。次郎右衛門よろこんで。二歩の金をわたし。かの印籠と。さかづきを持て。家に歸り。コリヤ〳〵次左衛門。よいものをもとめて來た。これを見よと出して見せる。次左衛門これをみて。是はよいものを御買なされました。次郎右衛門笑ふて。欠ろんじたる所を直してくれくと。れ客のあるとき。間におはうと思ふて買てきた。左様なら。ぬり物やへやりませう。チヽさう仕やれ。又此印籠は。くすりを入て。其方が腰にさげてゐると。田へ往たときには。かに腹でもいたい折に。間に合うとれもふて。かふて來たといはれました。次左衛門落涙して。有がたうござります。ヨウ氣を付て。買て來て下されたと。眞實に悦ばれたと申す

事じや。すべて此次左衛門。老に耄たる父につかへて更に父を老にほれたる人とせず。何故なれば。只親にむかへば親ばかりにして。我といふものをたてねば。詞を返す世話もござりませぬ。此一條。古人のいはゆる。孝子に私のたからなしとあるは。これでござりませう。されば次左衛門の孝心。人を感せしむる所あるにや。はるかに日がたちまして後。かの古道具屋。孝心のほどをつたへきゝまして。心に恥かしう思ひましたか。ひろかに二歩の金を持參し。無調法のよし。ことはりいふて。欠損じたる道具を。乞もどして歸りましたと。うけたまはりまする。又ひとゝせ秋のはじめ。父の次郎右衛門わが田を見まはりに。出ましたが。俄にかゑつてしかり聲にて。餘所の田はみな苅入をしたのに。ナゼこちの田は苅らぬのじや。早う往て田をかれといふ。次左衛門。こゝろよくうけ合ひ。この頃はとにわくれました。ドレ往て苅て來ませうと。鎌を腰にさいて出かけましたが。頓て少々苅てもどりました。父大に悅び。よう苅て來たと。一段のきげんであつたと。承はりました。この時まだ秋のはじめ。青田で

ござりまするを。一言も詞をかへさず。親の意にまかせて。青田をかつて來ました事。見る人みな感心せぬものはなかつたと申す事じや。實にめづらしい孝子でござります。猶この外次左衛門の行狀。中々一夕二夕には申し盡されませぬ。中にも耳をおどろかす行狀。いま一ツおはなし申しませう。父次郎右衛門。どし九十あまりのとき。何おもひました歟。次左衛門にいふやう。そちが月代は。きつう延て見ぐるしい。久しぶりでおれが剃てやらふ。剃刀を合せて。持てこよと申されました。次左衛門こゝろ得て。いかさまこのごろは。いそがしさに取まぎれて。髮月代もいたしませぬ。夫はありがたうござりまする。どうぞ剃て下さりませと。剃刀をとり出し。能とぎて父にわたし。其身は水にて。さかやきをぬらせば。父はわが膝を叩いて。こゝを枕にせよといふ。ハイといふて横になり。父の膝を枕として。すこしも恐れたる。色はござりませぬ。さて此はなしを致しまするど。中には理屈をおつしやる方があつて。夫は孝子といふものではない。大膽ものといふ者じや。九十にあまつて老耄したる親に。

剃刀をもたせるといふ事があるもの歟。もし親の身に疵が付たら何とするぞ。またおのれが身にあやまちがあつたら。どの命をもつて。親を養ふぞ中々孝子といふものは。其樣なあやうい事はせぬものじやとおつしやる。隨分御尤でござります。去ながら大舜か。または孔夫子が。此次郎右衛門に。おつかへなされたらば。常に髮さかやきも。立派にして。加樣に不意のとばを。聞かぬ樣になされませう。邊鄙にうまれて本もよまぬ。百姓一むきの人なれば。夫ほどにまでは。どゝきませぬ。しかし此理屈は。其場の時宜。そのときのもやうをしらぬ人が。疊のうへで。分別して。いふとじや。めい／＼共は兎角。ろの智惠づかひがあつて親のこゝろにしたがふとが出來ませぬ。此金がみあに成たら。あすはどうせう。青田をかつたら。あとの工めんが。わるからうと。とかく前後に氣がつき過て。得て親の氣をやぶりまする。孝子は親ある事をしつて。我ある事を知らぬ。晋の王祥が。氷をたゝいて鯉をもとめ。吳の孟宗が。雪中に筍をぬき。後漢の郭巨が。兒を埋ころさんと致したとなど。今の人に見せたら。氣違ひ

のやうに思ひませう。是はこれ親に鯉がたべさせたいと。たれもふ心ばかりで。氷をふむのあやうきをしらず親に筍をまゐらせたいと。思ふ心計りで。時節をわするゝ。これみな古今孝子の常でござります。日月はいまだ地におちず。神明のてらし玉ふ所。孝子のこゝろざし。感應のないといふ事はござりませぬ。もとより次左衛門は。父を老耄せし人とは生涯思はず。さるによつて。その危きをしらぬのでござります。このしらぬが。中〱常人の。およぶ所ではござりませぬ。しかればといふて。親が盗をしにゆくのに。子が其提灯もちをするを。孝行じやといふのでは。ござりませぬ。幸ひおたがひに。加様の變に出合ぬは。ありがたい事でござります。さて父の次郎右衛門は。ふるふ手に剃刀をもち。次左衛門が左の鬢のかみを。何の苦もなく。ゴツ〱とそり落し。手を以て其跡を撫ながら。さてもうつくしう成たといふ。次左衛門も又。自らなでゝ。ホンニうつくしう成ましたと。親子もろとも。うち笑ふて居たるとき。庄屋何がし。折ふし用事あつて參りましたが。此体を見て。大にあきれ。其子細を問まし

たれば次左衛門。ありのまゝにはなして。顔つき平生にかはらずと承はりました。さればこれらの行狀。終に御領主樣の。御聞に達し。御褒美として。御米おびたゞしく。下したまはりしかば。隣境これをつたへ聞て。おのづから。不孝の子弟も。かれこれ行狀を。あらためましたるものも。ござりましたといふ事じや。語にいはく。徳孤ならずかならず隣ありとの聖語。むなしからず。此西市村は。小村にて。家數わづかに十五六軒。しかれども。孝子順孫。相つゞいてたゆるときなく。今なほ。又市長右衛門など申して。御褒美頂戴いたしたる人々。堅固に耕作をつとめて。ゐられまする。さて父の次郎右衛門。九十六歳にて。病死いたされました。次左衛門もそのゝち。甥をやしなふて。子といたし。その身は生涯無妻にて。長壽いたされました。寛政二年。すでに年七十才。そのころの太守樣。とゞ[illegible]に御仁惠ふかく。老人御いたはりとして。御領分中へ。御酒下さるゝにつき。六十[illegible]以上の老人を。村々にておしらべなさるゝ事が。ござりました。去るによつて。西市村に[illegible]村役人の宅へ。次左衛門をまねき。其としを尋られまし

た所が。次左衛門さらに年を申しませぬ。何ゆへぞととへば。さる子細あつて。私の年はどうも申されぬといふ。村役人もこまり。此度の事は。御領主さまの。御慶事につき。御酒代を下さるゝとなれば。有がたいことじや。何も年をかくすには及ばぬ。あり体にいはれよといふ。然れども次左衛門。一向承知せず。何ぶん年を申すとは。御免にあづかりたいと。ひたすらに申しまするゆへ。拠なく段々。このよし。御重役へ聞へまして。終に御役人さまより。御吟味になり。何ゆへとしを申さぬぞ。もし申されぬ子細あらば。其子細を申せと。仰られました。ソコデ次左衛門も詮方なくさやうならば。年の申されぬ。子さいを。申し上ませう。私親次郎右衛門。存命中。わたくしへ申まするには。其方がとしを。人がたづぬるとも。必ずいふてくれな。うちが四十になるの五十になるのと。年をいふてくれるとそれはいかう。心ぼそう思ふによつて。必としをいふてくれなと。申されました。親とも相果まして。年月は立ますれども。申されましたるとは。猶耳のそこに残まして。今のやうに覚まする。ことさらに佛檀に見てござる

もへなんぼう御上様のとでも。こればかりは。御めんなされて下されいと。落涙して。申されました。是によつて。此段御聞に達しましたれば。殊の外御感心あそばされ。其せつ又。御褒美を頂戴。仰付られました。誠にありがたい。珍しいとでござりまする。孟子に。大孝は身を終るまで。父母を慕ふと。見えましたるが。この西市村の次左衛門は。實に其人とぞんぜられます。これについておかしいはなしがある。さる所に。不孝な息子どのが有て。母御の手にあはぬ。友だちが。氣のどくがつて。さる先生のかたへ。道話を。聽聞に。つれてもきました。其夜の道話にむかし或國に。孝子が有て家まづしい。しかるに親子とも。大病にとりあひ。こしが抜て。たつ事が出來ぬ。巳に餓死にもおよぶ所に。孝心のほど天の感應ありしや。隣の鷄がある日土のかたまりをくはへて。かの孝子のまくら元に運ぶ。ふしぎにおもひ。碎き見るに。古金一歩を得たり。これをはじめとして。日々にはこぶ。終に此かねをもつて。藥をもとめ本腹して。剩さへ。のこる金を元手として家をおこしたりといふ話を。かの不孝もの。大に感心して。

聞て居ましたが。内へもどつて。はゝおやにいふは。おれもこれから孝行する
ほどに。鷄を二三羽かふて來て下されといふ。母おやよろこび。孝行は嬉しい
が。其鷄は何にするのじや。ハテさて買ふてござれといふに。跡でしれるとじ
や。それでも。雛が。孝行になりさうなとでもない。殊に此米のたかいにと。半分
いはせず。ハテやかましい。こなたの樣に小言いふと。孝行も出來るものじや
ない。老ては子にしたがへじや。往て買ふてござれといふのに。母親もせんか
たなく。にはとりを二三羽かふて來た。ソコデ息子はうれしがり。舌つゝみ打
て鷄をよび餌をやりながら。コレ母者人そちら向つしやれ。脊中さすつてや
らう。イヤ／＼わしは肩がつかへはせぬ。又こなた小言をいふ。だまつて肩を
出さつしやれと。無理無躰に肩をさする。鷄がうらへゆくと酒のんで寢て居
をる。とかくして。卅日ばかりたちモウ鷄が。土くれをくはへて。來さうなもの
じやと。毎日まてども。しるしがない。不孝もの大きに氣をゐらちさりとては
目のあかぬ鷄じや。これほどに孝行するのが。おのれが目にかゝらぬ歟。よい

かげんに目をさませと。鷄をつかまへて。述懐いふ。雛も氣のどくに思ふた歟ある日。土のかたまりをくはへて來る。息子は悦び。これは大ぶん大きなかたまりじや。小判であらう歟。二歩金であらうかと。碎て見たれば。蚯蚓が出た。ネ孝者肝をつぶし。ナンボウ時節柄でも。せめて一朱ぐらゐは。有さうなものじやに此ざまは何じやと。にらみ付て叱ますれば。雛もかんしやくに障たやら。大きな口明て。ベッカコウ。と啼ました。ナントおもしろいはなしで。ござりませぬ歟。家業もせずして。金がほしいの。わるい身持でよいところへ。嫁入がしたいの。遊んでゐて。うまいものがくいたいの。博奕うつて譽られたいのと。そんなといふ人は。みなベッカコウにおふ。御連中じや。此無分別をやめにして。どうぞ至善の場に。とゞまり。我なしで。おつとめなされませ。ある人のうたに。「よしと見る其ひとふしをなにはねの。おしかるかたにうつさずもがな。」おとは明ばんおはなし申しませう　下坐

鳩翁道話續編終

鳩翁道話　續々編

男　武修聞書

天の命これを性といふ。性に率ふこれを道といふ。道を脩る之を敎といふ。この三句は。中庸の首章に見えて。則大聖孔子の御孫。子思はじめて是を御發明なされたる所にして。實に千歳の確言でござります。されば今にいたつて。猶道學相つたはりまして。我々どもの様な者まで性理の端をうかゞひまする事は。ひとへに子思のお力でござります。扨天の命と申すは。天のいひつけと申す事じや。時に天といへば。青い雲や。黒い雲じやと。思しめさうが。左様ではござりませぬ。天は音もなく。香もなく。たゞ物を生ずる理がござります。これをさして天と申ます。形の事ではござりませぬ。しからば。其形もない天が。何をいひ付ると。御不審におぼしめさうが。キツトした云つけがある。則天のいひつけは。元亨利貞と申て。元ははじまる。亨はとほる。利はとげる。貞はなるといふて。此元亨利貞を。天の四徳といふ。則これが。天のいひつけでござります。さ

りながら加樣に申しては。子供衆に分らぬ。今一段ハツキリと申さうならば。春
夏秋冬。これ元亨利貞の德にして。人の目に見ゆる所の天のいひ付でござり
ます。天ものいはねど。何かはしらず。春になれば。梅さくら桃柳。誰が催促もせ
ぬに。花がさき芽を出す。これを元と申ます。さて夏になれば。枝葉がしげり。草
木のすがた。うるはしう成まする。これを亨といふ。扨また秋になれば。栗の木
には。栗が出來る。柿の木には柿が出來る。梨も木も皆實が出來る。これを利と
申ます。又冬になれば。木の葉はちり。實は熟して。種になる。これを貞といふ。こ
とをさして。天何を歟いふや。四時をこなはれ。百物なると。孔夫子も仰られま
した。則中庸の。天の命とは。此事でござります。扨之を性と謂と本文にござり
まするは。之とは。上にいふ。天の命をさして申し。性とは人のうまれつきの心
と申す事じや。則元亨利貞の天理をうけて。性となる。かるがゆゑに。朱文公は。
性は理なりと。仰られまして。則本心の事でござります。此本心は。天理を其まゝ
まうけましたるゆゑ。仁義禮智信の德をそなへます。この仁義禮智が。則天の

元亨利貞じや。所詮くはしう申せば。天徳の元は。物のはじめなり。四季にとれば春なり。五行にとれば木なり。方角にとれば東なり。性の徳にとれば。仁でござります。又天徳の亨は物のとほるなり。四季にとれば。夏なり。五行にとれば火なり。方角にとれば南なり。性の徳にとれば。禮でござります。さてまた天徳の利は。物のとげるなり。四季にとれば。秋なり五行にとれば。金なり。方角にとれば。西なり性の徳にとれば。義でござります。又天徳の貞は。物のなるなり。四季にとれば。冬なり。五行にとれば。水なり。方角にとれば北なり。性の徳にとれば。智でござります。さるによつて。小學の題辭にも。元亨利貞は。天道の常。仁。義禮智は。人性の綱と。仰られました。扨五常の信は。四季の土用。五行の土。方角の中央と同じ事で理にゐて。少しも替る事はござりませぬ。このかはらぬ理。が。人々に具はるうへは。天のいひ付に。違ひはない。故に天の命。これを性といふと。申してござります。わるういたしまするとも。茶碗とりれとしても。天命じやといひ。どうろう發で。鼻たとしても。天命じやといふ。これは天命の取ちが

へ。天命は其やうな。細工ものや。干物ではない。人は仁義の性をうければ。すこしでも無理すると。直に氣味わるう覺へる。これがいきた天命でござります。ある人の道歌に

「やみがたきよしあればこそとしごとにさけばかならず匂ふうめが香」

石川五右衛門でも。熊阪の長範でも。盗するのは。よい事とは思はぬ。これが則天命の御合點なされぬのじや。さるに依て。人の性は善也と。古人も仰られました。此性にしたがひますれば。するとなす事。皆人の道にかなひまする。故に性にしたがふ。これを道といふと申してござります。道とは自由自在の出來るといふ名じや。無理すると。自由自在は出來ぬ。無理のない本心にしたがへば。自由自在で。安樂にござります。これを道と申しまする。されば性と道と。別のものではござりませぬ。斯申すと。そんなら。世界中の人が。みな天命の性をうけて生れれば。無理する人は。一人もない筈じやと。思しめさうが。いやな事には。性は天命の性なれども。形をうける事は一樣ではござりませぬ。凡形

は陰陽五行の氣のあつまつて。出來まするものなれば。その氣の清濁によつて。人の氣質もいろ〳〵になりまする。生れつきのこゝろは。一列に善なれども。氣質のちがひで。下愚も出來賢もできる。過たるもあり。およばぬもあり。天命の性は無欲にして。義理ばかりで。ござりますれども。形に墮在まするど。形の欲にひかれる所が。出來まする。ソコデ得ては道をふみはづす。難儀なものじや。かるがゆへに。道を脩むる。これを教といふと。申してござります。脩るとは。ものゝ損じたるを。修覆するこゝろもちじや。人の性は善なれども。形にひかれて次第に欲が出來る此欲が段々ふかうなり終には大ゆがみにゆがんで。人の道をうしなひまするソコデ。をしへをたてゝ。人々の分に應じて。其ゆがみを修覆いたし。もとの本心に立もどらせ。人の道を勸めさすのが。是則道をさむる。之を教へといふと。御示しなされたので。ござります。さて中庸と申す事は。能う人の口くせにいふ事なれど。多くは中庸の取違を仕てござる。其取ちがへは。たとへば。銀五匁やらう歟。拾匁やらう歟。一向中取て。七匁五分

やると。これで丁度中庸じやと思ふてござる。夫は子莫の中といふて。まことの中庸ではござりませぬ。譬ば夏は帷子を着。冬は綿入を着るこれ自然の中じや。然るを中とつて。一年中。袷きるといふて。それでよいもの歟。チト考て御らうじませ。名聞の心で。拾匁やるのでもなし。又しはんばうで五匁やるのでもなし。只先方へつかはすべき道理にしたがふて。此方に一物なければ。眞の中にて。これを君子時に中すと申ます。されば鏡の空なるがごとく。衡の平なるがごとく。只何ともないが中の極意じや。もし一物があれば。鏡は影をうつさず。衡目はくるふ。さるによつて。堯舜も。中を執れと仰られました。甚大切な事じや。わるうすると。中庸は只書物の名とばかり。心得まして。受用にならぬと。詮ない事でござります。さるに仍て前に申す旨を。わが身に引うけ。心に工夫して。用ひねば成ませぬ。故に古人も孔門傳授の心法とは仰られました。かほど大切なる心法なれば。中々私どもの樣な。文盲な者が。申つくされる譯ではござりませぬ。よし又説盡したりとも。子ども衆や。女子衆のお耳には。入悪

いしかし此まゝでやむのも。本意ないものゆへ。今一度。ちかく譬を取て。首章三句の意をくりかへしれはなし申しませう。御退屈にあらうけれども。よう聞下されい。此意が御合點がまゐりまするど。一生身をまもる。よい便になりまする。たとへば道中で。足のつかれたる時に。二三里駕籠にのると。甚安樂な。しかも僅の間じや。其わづかな安樂も。駕籠賃はらはぬと出來ぬ。ましてこれは一生涯安樂になる法でござります。それを駄賃なしにはなし申す事じや。せめて眠たいのを。辛抱してヨウ聞なされて下さりませ。先天の命。これを性といふは。たとへば此あたらしいきせるの樣なものじや。此煙管も。天陰陽五行をもつて。萬物を化生する中に。眞鍮となり。しの竹となり。すでにきせるのかたちが出來ると。チャント。天理が具はつて。煙草がのめるやうになる。其たばこのゝめるのが。きせるの性じや。これが直に天理。天の命でござります。しかも天理は。どのやうなものじやと。吸口から覗て見れば。广首の中もらう竹の中も。すひ口の中もすつぱりと。奇麗に何にもない。唯天氣の通ふば

かりじや。此天氣のかよふ所が。則きせるの生れつきのこゝろじや。丁度赤子と同じ事で。わだかまりのない奇麗なものじや。しかしながら奇麗なはよいけれど。煙管も煙草のまずにさらさせるでれけば。いつまでたつても。きせるの用はない。人もいつまでも。赤子で居ると。腸は奇麗なれども。ホギヤア〳〵では。間に合ぬ。ソコデ性に率ふ。これを道といふて。さらざせるで。煙草をのめば。心よう煙が通つて。工合がよい。たばこのゝめるが。きせるの性にしたがふ道じや。おか子も次第に成人して。親に事へ。主につかへ。身をたて。名を後世に揚るが人の道じや。きせるも天の一物。人も天の一物。非情をもつて。有情に譬へるは。異なものなれども。何も替つたものではござりませぬ。扨道をたさむる。これを敎といふは。かのさらざせるで。煙草をのめば。はじめの程は。よけれども。次第に煙草を。のむにしたがひ。ソロ〳〵中によごれがつき。段々と脂がたまつて。後にはやにがつまつて。天氣がかよはぬやうに。成ますると。ほうべたをふくらして。吸ても。ズウ〳〵いふて。煙草はのめぬ。是がおか子の成人に。

能う似たものじや。段々と大きうなつて。人にまじはり。ものにふれ。人欲のよごれがつき。後にはたれが〱の。氣隨氣まゝが。かたまつて。天理をふさぐ樣になる。丁度きせるの。脂でつまつたと。かはつたものではござりませぬ。見れば立派な煙管じや。取上てたばこのんで見れば。ちよつとものめぬ。然ればといふて。きせるの形があれば。さすがに捨ても。仕廻れぬ。ソコデ據なう。煙草盆の中で。コロ〱ところついてゐる。人もこれと同じとで。人欲のかたまつて。天理を失ふた人は。どうも仕方はござりませぬ。見れば立派な男じや故に。取上てつかふてみれば。ちよつとも間に合ぬ。さすがに人の形して。生てゐるものなれば。殺しても仕まはれず。また用にも立ぬ故。親兄弟に勘當しられて。あちらではごろ〱。こちらではごろ〱と。雷のやうに。なりちらして。ごろついて居る人がある。これみな脂のつまつた。きせる仲間じや。得て天竺には。たんとござります。さるによつて。きせるのつまつたは。小捻を通し。藁すべを通して。中を掃除すれば。本の通りに。煙草がのめる。これがきせるの道を。修む

る教でござります。人もこれと同じ事で。氣隨氣まゝの。かたまつた人でも。聖人の教を聞て。腹の中を。掃除すれば。もとのあか子とおなじ事で。腹の中が奇麗になり。本心にたち戻られます。ナント。よう似たものではない歟。天の命。これをさらぎせるといひ。煙草のゝめる。これを道といひ。掃除をする。之を教といふ。御合點がまゐりました歟。ある人の道歌に「きせるさへ心のやにを掃除せずがん首ばかりみがく世の人。これでおもひだした話がござります。さる町内に。年寄役をつとめらるゝ人が。ござりました。あるとき其息子殿が。親御へいはるゝには。此ごろ町内でも。隣町でも。親父さまの事を。さらぎせるじやと申ます。どうでも。おまへさまの異名じやろうな。何の道理で。さらぎせるとは。付たでござりませうと問かけられて。かの親父が。嬉しさうな顔付して成程さらぎせると。付さうな物じや夫はなぜでござります。されば。何事を取捌いても。能う通た人じやと。おれを誉て。つけた異名とみゆると。半分聞ず。息子がかぶりふり。イエ〳〵ろうではござりますまい。ソンナラ何じや。ハイ

私のぞんじまするには、どうしても、つまらぬ人じやと、いふのでござりませうといはれた。ナントおかしい話ではござりませぬ歟。此親父さまもおれがの脂がつまつてゐるのじや。それもしらずに、黒の羽織に唐桟の袴、お太刀一本きめこんで、がん首ばかりみがいてござる。これは男ばかりの事ではない。鼈甲のくし笄じやの、緋鹿子の髷くゝりじやの、生白粉じやの、ながし白粉じやのと、さまざまのみがき道具。むかしは足が二本あれば、済だものじやに、今は首すぢに、又二本足こしらへて、都合四ッあし。どうでも、狐や狸のまねがしたいさうな、氣のどくなものでござります。兎角賑はしい土地にすむ人は猶猶つゝしみが大事じや。たとへば、あまり煙草をすかぬ人のもつきせるは、おのづから脂のつまりが少い。夫は何ゆへなれば、煙草の數をのまぬ故じや。又朝寐處からきせるをくはへ、日がな一日、こゝを大事と、きせるを離さず、尻から烟の出るまで、のんでござる。たばこ好の、もつきせるは直に脂がたまります。これはたばこの數をのむによつてじや。人も是と同じ事で、三ケの津をは

じめ其外繁花の地にすむ人は。朝から晩まで人まじはりが多い。それのみならず。あちらむけば芝居。こちらむけば浄瑠理。かる口ばなし。軍書講釋。うなぎすつぽん。どじやう汁。呉服みせやら。小間物店やら。見るに目の毒。かぐに鼻の毒。これでは脂がたまる筈じや。官刻の孝義錄を。拜見するに。忠孝の人は。とかく遠國邊鄙に多い。これは是人交はりがすくなく。見るに目の毒がないに依てじや。人間一生五十年。付合するは。二ヶ村歟。三ヶ村じや。ある人の狂歌に

「ほとゝぎす自由自在にきく里は。酒屋へ三里豆腐屋へ二里。またある人の發句に

「醫者どのゝ不自由な里の賀ぶるまひ

これらで御推量なされませ。かた田舍に育つ人は。自然と心のよごれが少ひ。すべて人にかぎらず。道具衣類家居まで。手數が入れば。よごれるはしれた事でござります。かるがゆへに。道をゝさむる敎によらねばならぬ。扨此をしへをたとへてれはなし申ませう。脂がつまると。こより歟藁すべで。掃除せにや

ならぬ掃除はよけれどうろたへると藁すべが折こんだり。こよりがちぎれたりする。脂のつまつたは。あたゝめると通る事があるけれど。小よりや藁すべの折こんだのは。温めても茶を通しても。中々通らぬ。やいてしまはにや埓があかぬ。これでようお考なされませ。掃除道具の。學文はよけれど。わるうすると。學文がをれこんで。お醫者さまにも成らず。先生にもならず。又御出家にもならず。親の仕にせの商賣がいやになり。めつたに鼻がたかう成て。つかへてお辭儀が出來ぬやうに。なりまする。これが掃除道具の。をれこんだのじや。こんなきせるは燒ねば直らぬ。甚怖い恐ろしい事でござります。御用心なされませ。是畢竟學問のはじめ。心むけのくひ違で。身をおさめ。家をとゝのふる學文が。一生疵になつて。親類縁者。知音近づきにまできらはるゝ様になるはまつたく。書物のとがではない。學ぶ人の心得のわるいのと。お師匠さまを撰まぬ過ちでござります。これを人のみちを爲て。人に遠ざかるは。以て道とすべからずといふてある。一たびわるい癖がつくと。どうしても。止にくい。兎角

わる癖を直す分別が入用じや氣質を變化するは。學問の功。わる癖を直すが。則氣質を變化するので。ござります。此くせ付てたもひ。出した。譬のはなしがござります。さる處に。いたつて。烟草ずきの男がござりました。用事有て。紀州へ下る道すがらも。六ぷくつぎの大ぎせるに。たばこの烟の絶る間もなく。長の道中をくすべあるいたが。世には似た人もあるものじや。六十ばかりの親仁が。これもくはへ烟管でフト道づれに成まして互に烟草ずきなれば。はなしの間があひ。かの親仁がいふには。わしは。是から一里許り向ふの在の者じやが。ナント今夜はわれが内にとまらッしやらぬ歟。何も馳走はないけれども。少々貰合せた烟草がある。ふるまひ申さうといふ。京の男も大によろこび。夫は近頃かたじけない。烟草さへふるまひ下されたら。湯も茶漬も。入用にはござらぬ。辭儀なしに參ませうと。打つれてかの親仁の宅へ參りました。さて洗足もすみ。夕飯もしたゝめ。座敷で。一ぷくくすべてゐる處へ。主の親仁がたばこ盆をひつさげ。雙手には紙袋二三十もち。さて御退屈にござりま

せう。さらば約束の御馳走を。はじめませうと。紙袋の烟草をひねり。雁首へねぢこみ。吸付て客へわたし。是から取かへ引かへ。透間もなく。すひ付ては出し。吸付ては出す。客も圖にのり圖づくしよむ様に。烟草の行所。ソれか是歟と。いふてゐるうち。座敷うちは烟でつまり。胸はいら／＼。わたしはふら／＼！今二三ぷく強つけられたら忽息が絶さうで。すでに負色に成ました。さすが年よりの悲しさは。主のれやぢ。小便に座をたちました。此体を見て。客はいきたこゝちして。この隙に迯てかへらずば。いのちもせも。たまるまいと。ろこら捜して。風呂しきづゝみを引かたげ表へ出たらば。又れやぢに見つけられて。烟草せめに出合ふてはたまらぬ。裏道から出奔せうと。切戸をはづし。畠道を横すぢかひに。めつた無性にかけ出したが。れもひがけない。行先に大河がある。川の上下見はたせば。幸ひわたし舟が見へる。やにはに飛のり。さて此川は何といひます。これは日高川と申します。京の男きもを冷し。さり迚は拍子がわるいと。胸を抱て居るうち。船は向ふの岸につく。ソコデ船頭へ頼むには。もし

あとから。年の頃六十ばかりのおやぢが。たばこ盆をさげて。おれを尋ねてくる事があつたら。必わたして下さるなと。いひすてゝ。また一文字にかけ出したが。大きな。寺でもき留りました。走りこんで。様子を咄し。かくまふて下されといへば。和尚しかつべらしく。聲づくろひして。むかし此處に。まなごの庄司といふ者ありと。ながながと。道成寺の講釋がはじまる。かの男は氣をいらち。御說法はあとで聽聞いたしませう。どうぞ早うかくして下されうろたへてゐると。親仁の烟草で責殺されにやならぬといふ。和尚も氣のどくにおもひ。しからば。先例にまかせ釣鐘をおろして。隠してやらうと。鐘樓堂へつれてもき。大勢よつて釣がねをおろし。難なく彼男を隠しました。氣のどくなものは。宿の主じや。客がかけ落したとは夢にもしらず。今二三ぷくこと仕んと座敷を見れば客はみえぬ。さては烟草に聲あげて。出奔したに極まつた。おのれにげたとて。逃さう歟と。尻引からげ。ねぢ鉢卷し。紙袋と烟草盆ひつさげ。跡を慕ふて川ばたへ。かけつけた。船頭は此体を見て。さては最前の追手じやさうな

と急に船を川中へ出す。かの親仁は船をよべども。返事せぬ。よし〳〵。船はなくとも。此河を渡らいでおかう歟と。鬼にも成らず。蛇にもならず。難なく川を歩行わたりして。道成寺へかけこみ。客殿方丈椽の下。雪隠までさがして見たが。流石男だけで。つり鐘には氣もつかず。是程にたづねても行衛のしれぬは。大方道がちがふたのであらう。いづくまでも追かけんと。また門外へかけ出しなした。此体を見て。和尚はよろこび。皆よつて釣がねを引あげて見れば。京の男は湯にもならず。默然としてゐる。サア〳〵モウ氣づかひはござらぬ。おやぢは道が違ふたといふて。どれへやら行れつた。安心をさつしやれといふと。京の男が。胸なでおろし。ヤレ〳〵うれしや助かつた。モウ親仁は來ませぬ歟。そうれなら息休めにまづ一ぷくいたしませうといはれた。ナントおもしろい咄しやない歟。燒頬。火にこりずと。烟草買に出あふても。ヤッパリ一ぷくいたしませうといふ。これ癖付と申すものじや。古歌に
「人ごとにひとつの癖はあるものをわれにはゆるせ敷しまの道。」又諺に

もなくて七くせとも。申ますれば。いづれ何なりとも癖付のない事はない。迚もくせ付ものなら。心のやにを掃除するくせ付に成たいものじや。少しでも心わるう覺る事があれば。是必こゝろのよごれ。やにのたまりでござります。何分をしへによつて。掃除を怠らぬやうにいたさねばなりませぬ　休息

「いつはりのなき世なりけり神無月たがまことよりしぐれそめけん」此歌を。我得かたにとれば。元來天人一致なれば。誠もまた一なり。天誠あればこそ。冬になれば。必時雨する。天のみ誠ありて。人豈誠なからんやとよみし歌と聞へまする。中庸の二十章にも。誠は天の道なり。之を誠にするは。人の道なりと見へまして。誠は天理自然の道。則本心のとでござります。さて本心を思ふて。本心のごとく有たしと。かへり見るが。之を誠にする人の道じや。誠は勉ずしてあたり。思はずして得ると申すは。何の造作もなく。又思慮分別もいらず。唯本心のさし圖にしたがへば。主親につかへるを始として。萬の事。みな程よう出來まする。これで。中庸にかなひまする故甚樂でござります。此樂な味が。則聖

人のお心持じや。さるに依て。從容として道に中るは。聖人なりと云てある。從容とは無造作。無分別。無知。無心の事で。たゞ何ともなく。時に中するの自然の妙をいふのでござります。天無心にして。四季おこなはれ。人無心にして。忠孝がつとまる。天人一致。萬物一体。ナント。明白なものではござりませぬ歟。之を誠にするは。善を擇んで。固くこれを執るものなりとは。修行の仕かたをおしめしなされたのじや。善を擇むは。此道理を一たび合點し。本心を見付るのでござります。固執は。常に本心に目をはなさず私心私欲はまじらぬ歟と。朝夕に吟味して。本心をとり失はぬやうに。致すのでござります。これを精一の工夫といふ。所詮前もつて申す。天命の性にしたがふの事じや。ある人の道歌に

「わが性の人にかくれてしられずばたかまのはらにたち出て見よ。　おもしろい歌じやござりませぬ歟。チトおかんがへなされませ。人己が性ある事をしつて。其天にいづることをしらず。朱子も仰られて。おたがひに。わしが心じや。おれが心じやと。心のある事は知てゐて。此心直に天じやといふ事を知

らぬ若この心を天命の性じやと。合點したら。曲たうてもまげられるもので
は。ござりませぬ。ヤッパリおのれが心じやと思ふ故。身欲のために。さん〴〵
に曲まする。生れ付の心が。主となつて。身欲がしたがひますると。何事も程よ
う参ります。とかく欲心が主に成て。義理の心が。つかはれまするゆへ。人心こ
れあやふく。道心これかくると。申てある。何分わが心直に天じやと決定して。
疑ひがなければ。自然と私心はしたがひまする道理じや。さて加樣に申せば。
人心じやの道心じやの。私心じやの天心じやのと。いひならべてみれば。心が
二ッも三ッもある樣に。聞へますれど。左樣ではござりませぬ。其實は一なれ
ども。人の道を勸めさへすれば。又一とも思ひませぬ。只何ともない所が。はじ
めて道にかなふのでござります。かれこれ名目を立るのは。道ををさむる敎
でござります。わるう心得た人は。聖人を意地わるじやと覺へ。忠義じやの孝
行じやの。仁義じやの。五常じやのと。六かしい敎をたてゝ。人を自由にさせぬ。
責道具じや。たとへば。氣ちがひに猿ぐつはをはませ。手がせ足がせをいれて。

しばり上た樣なものじやとれもふてござる。是は大きな了簡違ひじや。たとへてれ話し申しませう。稻荷山の松茸も。丹波の松茸も。松たけにかはりはない陰陽五行にむしたてられ。松茸の形が出來ると。たべられるといふ天理がろなはる。夫を松たけが了簡ちがひしてたべらるゝのは。己が力じやと心得天理じやといふ事をしらぬ。ちやうど。それが心じやといふて。天の性じやと。知ぬやうなものでござりますさて松茸をたべるには。かならず柚をおいてにする。ソコデまつたけがれもふには。それをつかふに。兎角柚をおいてにしれる。チト胡椒か。山椒か。からしでも入さうなものじやと思ふ。柚をいれるは。人間がこじつけるのではない。松茸のうまれ付に。かなふに依てじや。人も是と同じ事で。忠孝をすゝめるは。人の生れつきにかなふ故でござります。馬にはくつは。牛には鼻づる。これ皆人のこじつけではない。大きな獸をつかふに。轡がよければ。牛にも。轡でありさうなものが。鼻づると替るは。牛のうまれつきにかなふ故じや。されば忠孝をれすゝめ申すは。人の生つきに。かなふ故

ドやと思し召せ。さるによつて、朱子も事の道あることをしつて、其性によると
をしらすと仰られた。扨かの稲荷山の松茸は、御獻上にもなり、風味もしごく
よろしければ、かつをぶしじやの、酒しほじやのと、出しを入るに及ばぬ。又丹
波松茸は味がわるい。ソコデ出しをいれる歟、生ざかなの一切もいれねば、味
がようない。出しをいれて稲荷山の松茸の素焚と、丁度同じ様になる。ソコデ
丹波まつたけが、腹をたてゝ、めんようおれをたくには、出しを入れる。ナゼ素だ
きにはせぬぞと、小言いふ。ナンボ無理じやでござりませぬ歟。味ない持合せが
ある故、據なう出しを入るのでござります。同じ松茸といへども土地によつ
て、風味のよいとわるいとが出來るは、丁度人の氣質に清濁のある様なもの
じや。濁つた生れつきには、聖人のをしへをいれにや、人のみちがつとまらぬ。
しからば、教は意地わるではない。此方に持合せがある。風味のわるい、丹波松
茸の道中じや。仁義五常の、出しをいれねば、人なみには成ませぬ。聖人君子は
稲荷やまのまつたけで、ござります。かるがゆへに、聖人の教へあることを知

て。其我もとよりある所のものによつて。裁する事をしらず。其子も仰られました。是ひやによつて阿分教をきかねば成ませぬ。是についてありがたい話がござります。ひと、せ播州へ下りました節姫路の親友近江屋何がしの物がたりを承はりまするに。同國林田領太田村の出屋敷と申すところに卯右衛門と申しまする奇特の信者がござりました。此人若年の頃はことの外身持あしく假初にも大酒博奕喧嘩口論を仕出し。もとよりまづしい暮しでござりますれば。農業とてもはかゞしういたしませず。馬追ひを渡世として常に姫路の町へ通ひ駄賃を取れば。ことゞく酒にかへ。その上酔狂しては。人を打擲する。是によつて。姫路の御城下は申すに及ばず近村みな。もてあましたる。男でござりますが。女房にははやう離れ。男子一人でござりました。されども子をたもふ心もなく。只氣隨氣まゝに。とし月を送りましたが。いかさま宿因の催す所歟。あるとき例の如く。姫路へ出ましたが荷物のつけ合せあしく馬を牽て。あちこちと荷をたづねあるくうち。東本願寺の御坊の前を通

りかゝりました。折から御本山より。講師のお下向にて。御勸化最中とみえ。おびたゞしく。參詣群集いたしまする。卯右衛門も思ふ所あつて。馬を門前につなぎ。うの身は參詣とゝもに。御門內へ入ん。御堂の椽に腰うちかけ。あながち聽聞する心ではなけれども。參詣の人數多ければ。よい喧嘩のあいてもあつたら。酒代にせんと考へ居ながら聞ともなし。聞ぬともなしに。ボツ〵と。御勸化の聲が耳に入る。其大旨は。造惡の凡夫一善を修したる覺えもなし。たとひ其身阿修羅王のいきほひありとも。無常の殺鬼はふせぐ事あたはず。閻王の使に引たてられ。紅蓮大ぐれん焦熱大焦熱のくるしみを受る時。血のなみだを流したりとも。萬劫苦患をまぬがるゝ事かなはず。しかるに彌陀超世の悲願と申すは。かくのごとき十惡五逆の罪人を目あてとしてたてたまふ。本願なれば。一たび此佛に歸命したてまつれば。たちどころに光明の中におさめとられ。命終れば。極樂淨土に。往生せん事。何のうたがひかこれあらんと。こまぐ〵と。聞へました。此とき卯右衛門宿善開發の時節到來したる歟。發露

涕泣し。信心肝にしみて。夢のさめたるがごとく。年ごろの惡行を後悔し。のちには大聲をあげて。泣なした此とき卯右衞門。年四十ばかりと承はりまする古歌に「さへられぬ光のあるをおしなへてへだてがほなる朝霞かな。」かソトありがたい歌じやでございませぬ歟。今此卯右衞門が忽惡念をひるがへして。大信心を得ましたるは。化導の利益とは申しながら。ひとへに佛智力の致す所でございます。去ながら。たとひ佛智力ありとも。卯右衞門に佛性がござりませずば。善人にはなりますまい。宿善すなはち。佛性がある故じや。是を孟子も。性は善なりと仰られました。凡一切の有情非情。佛性を具へぬは。ござりませぬ。さるによつて。釋尊も。草木國土悉皆成佛の金言がござります。甚ありがたい事じや。諺に佛法と藁屋の雨は。出てきけと申しまする。何樣聞ねば信心も起らぬ。是じやによつて。敎によらねば成ませぬ。佛法はおのづから佛法の妙がある。儒はおのづから儒の妙がござります。神道もまた此通りじや。おの〳〵その趣はちがふやうにござりますれども。所詮人を敎へ善をすゝ

め。惡を懲すの外はござりませぬ。こゝにいたつては。三教一致でござります
或人の道歌に「雨あられ雪やこほりとへだつれど解ればおなじ谷川の水」
法華は佛になられぬの。念佛は地ごくへゆくのと。さまざますがたは替り
ますれど落るところは谷川の水じや。何もかはつた事はござりませぬ。是で
をかしい話がある。さる所に法華寺と淨土寺と垣をへだてゝ。隣づから毎朝
花を折に出ては。顏見あはすと宗論がはじまる。あるとき淨土の和尚がいふ
には。どう考て見ても。法華は佛になられぬといふ。法花のお上人腹をたてゝ。
法花經は諸經第一。何ゆへにほとけに成られぬ。何ぞたしかな證據がある歟。
サ、證據がある。法花宗は。そろばんに懸らぬ故佛にはなられぬといふ。上人
ますます腹をたて佛法が算盤にかゝるのかゝらぬのとそれは何のお經に
出てあるぞ。イヤお經には出てなけれども。目の前そろばんにはかゝらぬ。其
譯は。まづ釋迦如來の御命日は。二月の十五日。三五十五日とそろばんにかゝ
る。淨土の元祖は。正月の廿五日。五五廿五日と算用が出來る。一向宗の開山は。

霜月の廿八日。四七廿八日と。勘定が出來る。眞言の祖師は三月の廿一日。三七廿一日とそろばんにかゝる。其外聖一國師でも。また傳敎大師でも勘定の出來ぬはないたゞ勘定の出來ぬのは。日蓮宗の祖師じや。二七十四では。一ッあまる。三四十二では。一ッたらぬ。どうしても。十三日の。御命日は。そろばんに。かゝらぬといはれた。甚味のある話でござります。畢竟勝ても負ても。罪にも報にもならぬ。たなじ高根の月をみるのじや。かやうに申すと十把一とからげ。胡椒丸のみと思しめさうが。左樣ではござりませぬ。かれ壁をはらいでも道理はちやんと分つてあるめい〳〵御宗旨を大切にまもり。人とせり合ぬやうに。いたしたいもので。ござりますたとへば男山も。劍菱も。諸白も並酒も。もとは一色の米じやうの趣意は。酒に酔ふのじや。されども身分に上下が有て諸白で酔ふ人もあり。並酒で酔ふ人もあり。銘酒で酔ふ人もある。酔ふた味は同じ事じや。上酒に酔ふた人が。極樂の夢を見るでもなし。濁り酒に酔ふた人が。地獄の夢をみるでもない。釋迦一佛より。八宗九流とわかれたれど。つゞま

る所は、人を善にみちびくのじや、たとひどのやうな、有がたい宗旨でも、親に不孝、主に不忠、せけんの人に不義理をしては、極樂は思ひもよらず、先此世から、たすからぬ、當來の果をもつて、未來の因をしると申せば、どうぞ此世を安樂にくらしたら、極樂まゐりは疑ひはござりませぬ、此世の安樂は、いかゞいたしたら、安樂に暮されませうぞ、チトおかんがへなされませ、忠孝より外に安樂の道はござりませぬ、さてかの卯右衛門は、此日を始めとして、志大にあらたまり口に稱名を絶さず身に一寸の惡行もせず、まことに前日の卯右衛門とは事替り、別の人のやうにござりました、是より馬士をやめ、農業を出精し、かりそめにも、人とあらそはず、唯法義をよろこんで、無二の信者となられました、しかるに卯右衛門の子、成人のゝち、嫁をむかへました、此嫁生得慳貪邪見にござりました、舅卯右衛門への、つかへかた、甚不孝にござりますれども、卯右衛門一言も、とがめませず、すべて是約束事とあきらめ、却てわが子をなだめ、嫁をそだてゝ日を送りまするに、あるときかの嫁が、舅の物のいひざ

またのが心にかなはぬとて。庭におり合ふ。横槌をとつて。舅へ投付ましたれば。かの横槌舅の額にあたつて。血はおびたゞしく流れまする。息子はこれを見て。もはや堪忍なりがたし親仁さまが何といはるゝともすみやかに追出さんと。女房を引たて門口へ出かけまするを。舅は大きにおどろき。隻手には流るゝ血を拭ひ。隻手にはわが子の袂をひきとめ。さま〴〵にわび言すれば。是ほどの不孝もの。切きざんでもあきたらぬものを。何故におひ出す事を留さつしやると。尋ねましたれば。されば夫はその不孝ものゆへ追出すを留るのじや。其わけは。此家でさへ。辛抱の出来ぬ嫁が。他へよめ入して。一日も辛抱が出来るもの歟。此家を追出すと嫁は片時も身を置ところがない。それさへ辛抱すればなに事なうをさまる。此様な心得ちがひな嫁を。もらふたは其身の不仕合せ。それが宿業のわるいのじや。何事も堪忍せよといひ宥めて。お佛だんに御明しをあげ。血をふきながら称名を悦んでゐらるゝ。是を見て。さすがの嫁も。大に後悔し。ひたすらにあやまりまするを。亭主も漸く納得して無

事におさまりました。又あるとき卯右衛門。嫁もろとも麥ばたけへゆき。畝をこしらへまするに嫁は舅の先に立て。鍬づかひして。畝をけづり。舅はあとより土をかけて通ります。然るに嫁のくはづかひあらく。畝ことの外。ゆがみまする故。舅は後より聲かけ。チト心得て鍬づかひを仕やれ。畝がゆがむといふ。嫁は元來短氣者なれば。これを聞と其まゝ鍬を畑にうちつけ。ものをもいはず。一さんに歸ります。舅はおどろき。これもまた家にかけ戻り。其まゝお佛だんへ御明をあげ。如來前に跪て。扨も地獄一定の。惣領のおやぢが。あさましいこゝろより嫁を叱りました故。嫁が腹を立ました。是全く此親仁めが。わるうござりました。御ゆるされて下さりませと。繰返〳〵ていふておらるゝ。是を聞てさしもの嫁も。だまつても居られず。舅の側へ行。是はわたくしが了簡ちがひでござりました。堪忍して下さりませといへば。イヤ〳〵そなたの惡いのではない。このおぢいが惣領なからじやといふ。イヱ〳〵わたしがわるかつたといひ終に嫁のきげんが直りました。是等の行狀。たび〳〵ござりましたゆへ。

邪見の嫁も舅の信心に化せられ。いつし歟我慢の角もをれて。後々は孝行なる嫁に成ましたと。申す事じや。蓮如上人の御示しに。佛法は無我にていへば。人にまけても。信をとるべしと。あるよし承はりました。何さま此卯右衛門は。實に我なしの行狀にて。よく法義をきゝ得たる信者と申すものでござります。是に引かへ。口に宗旨の意味をのべて。假初にも珠數をはなさず。いかにも後生願ひとみへたる人が。思ひの外に其所作を見ますれば。不足錢を拂ふたり。かりたるものをかへさなんだり。念佛題目となへながら。妄狂ひしたり。聟や嫁をいおり出したり。つまらぬ信者がわるうすると。天竺にはあるものでござります。此様な信心は。みな引あてのある事で。畢竟神佛が。ものをれつしやらねばこそ。恥かしいことじやござりませぬ歟。是について譬のはなしがござります。さる所に其日ぐらしの。困窮な夫婦が有て。その女房が産の氣がつき。おやにく難産で。三疊敷をウン〳〵いふて這まはる。常にとりあげばいさまにも。醫者どのにも。無沙汰してれくゆへ。呼に往ても來てはくれず。亭主

一人が打たり舞たり。さながら女房が苦しむを。よそに見てもゐられず。されば とて我腹は痛うもなし。詮方盡て。門口にある井戸へかゝつて。水汲あげ。二三ばいあたまからかゝり。合掌して。高聲に南無日頃念じたてまつる。象頭山金びら大權現。たゞ今かゝが難産にてくるしみます。どうぞ恙なう出産をいたす樣に守りなされて下されい。もし出産いたしたら。其れ禮に銅の鳥居を。奉納いたしませうと。大聲でいふを。女房がもがきながら是を聞て。コレ〱めつたなことをいはつしやるな。ひよつと安産したら銅の鳥居はどうして工面さつしやるといへば。亭主は目顔手さきで。女房をれさへ。やかましういふな。こういふてだましてゐるうちに。チヤツト産でしまへといはれた。ナントおもしろい話でござりませうが。銘々共も神佛をだますとは思はねども。わるい事して極樂をねがひ。商賣不精で。金もちになりたいと。無理なことを神佛へいのるは。わが本心をだましてゐるといふものじや。我本心を欺すは。直に神佛をだますのでござります。勿体ない事じや。罰の報のと申事は。小歌ぶ

しではござりませぬ。罰利生があればこそ。神佛は尊ひのじや。御用心なされませ。さてかの卯右衛門。次第に年よりまする程。ます〳〵信心堅固の法義者になられました。ある年の冬姫路の町で。同行がござりまして。朝より其方へまゐりましたが。晝七ッ下り。いとま乞して姫路の町を出。野邊をとぼ〳〵歸りまするに。後より聲をかけて。呼者がある。ふり返つて見れば。隣村の馬士。馬を率て。卯右衛門に追つき。かねておまへは信心者と聞たが。今夜わしが處で。お座をつとめまする。大事なくば。初夜時分から。どうぞ參詣して下されといふ。卯右衛門大きによろこび。夫は近頃ありがたい事じや。左やうならお辭義なしに。參詣いたしませうと。約束を定めてわかれました。此馬士。元來心ざまのよからぬ者なれば。よい心で申したのではござりませぬ。是は卯右衛門があまり法義を悦ぶと聞て。かた腹いたくおもひ。なぶつて見んと。今夜お座があると僞て。出しぬいたのでござります。實は御座も何もないのじや。ます〳〵と欺て。おのれが家に歸り。馬をわらひ。そこらかた付。初夜を相圖に。火をふき

消し門の戸かたくしめて。寢いりました卯右衛門は。かやうの事とはぞんじませず。わが家に歸つて後。刻限にも成りますれば。かの馬追のかたへ出かけまする。折ふし暮すぎより。雪つようふり。野風はげしく。一向顏出しもならぬほどの。氣立でござりますれど。約そくを違へじと。簑笠をきて草鞋をはき。杖にすがつて。二十町ばかりの路をも。念佛をつれにして。寒きを凌ぎ。やう／＼かの村にたどりつきまして。馬士の家にいたり。門の樣子を見るに。甚靜にでござります。やがて簑笠をぬぎ。門の戸をあけんとするにあかず。ほと／＼と戸を叩き。卯右衛門が參りました。卯右衛門でござりますといへども叩けども音もせぬ。かの馬かたは。寐ながら此聲を聞。さてはかの親仁めが。よほど／＼と來たさうな。よもや今夜の雪には。つら出しは出來まいと思ふたに。さても／＼かた意地な信心じやと。肝をつぶし。息をのんで。うら寢入して聞てゐました。卯右衛門は。音信ても返事もなく。又ともし火の影もみえませぬ。さては馬かた殿が。俄に用事でも出來て。他所へゆかれたるか。但しは刻限が違ふた歟何

にもせよ。此まゝ御目にかゝらずに歸つては約束にそむく所もあればいさや此軒下にてしばらく歸りをまたうと。菅笠うちしき座をしむればをりふし西風つよく雪吹しきりに身にかゝりますれば。竹の子笠を前にあてゝしづかに念佛せられました。此とき野も山も。平一めんの銀世界と變じ夜のふくるにしたがふて寒氣身をさくやうに覺ますれば。思はず聲をあげてさても〳〵かたじけなや。馬方どのゝおかげで。今夜こゝへ來たればころ御開山の北國御經回の。御苦勞のほど萬分が一。思ひしられて有がたいと。いよ〳〵信心いやましたれば高らかに。念佛を悦ばれます聲。彼馬士の耳に入て。身にしみ〳〵とこたへ。何となく尊く。ありがたく覺えましたれば。今はたまりかねて表の戸を引あけ。卯右衛門を內へ伴ひ。空寐入して歎きたる。身の科をわびて。これより此馬かたも志をあらため。終に同行となり。無二の信者となられました

蓮如上人のうたに

一火の中をわけても法をきくべきに雨かせ雪はものゝ數かは。卯右衛門の

行狀此歌のこゝろにかなひて有がたいとでござります。されば是等の始末御領主樣の御聞に達し。奇特の信者なりと。御感心遊ばされ。御褒美頂戴仰付られました。此時年六十五歳。なほ此餘ありがたき行狀あまたでござりますれども。事長ければ略いたします。すでに卯右衛門去ぬる天保辰のとし。往生を遂られましたと。物がたりに承はりました。これ全く。佛法のをしへによつて。一文不通の卯右衛門が。よく人の道をおさめられました。專ら文字をしり。古事來歷をしるが學問ではござりませぬ。神儒佛の三敎何れなりとも其根機にかなひたる敎へを聞て謹んでこれを守らば。人の道の勤まらぬといふとはござりませぬ。猶あとは明晩。おはなし申しませう　下坐

道は須臾も離るべからず。はなるべきは道にあらず。是故に君子は。其睹ざるところを戒愼しみ。その聞ざる所を恐るると。これ則心を存じ。性をやしなふの工夫にて。道に離れたうても。はなれられぬと申す事を。おしへなされたのでござります。既に藤樹先生の詩に。道は譬へば水のごとし。人はたとへ

ば魚のごとし。魚水にある時は悠然としてたのしむ。水をはなるゝときはくるしむ。はなれて久しきときは死すと。仰られました。何さま此通りで。人が人の道を勤めてゐまするとたのしむ。人の道にはなれまするとくるしい。人の道にはなれ通しで居まするど。首くゝる歟。身をなげるか。切れるか。うち殺されるか。いづれ死まする。これ魚と水とのやうなものじや。人と道とは暫くも離れるとは成ませぬ。はなれたらしまひじや。諺にも。合せものは。はなれると申ます。人と道とは合せものでござりませぬ。道は性にしたがふの道で。うまれ付の道にするのが道じや。道の外に物なく。ものゝ外に道はござりませぬ。又古人の説に心は道なり。道は天なりとも。みえまして。心をしれば道をしります。道をしれば天をしります。これをしれば。天人一致。萬物一体の道理がしれます。よし又この道理はしらいでも。目は見る耳はきく。手はもつ。足はゆく。譯を知たもしらぬも。生れつきの道じやによつて。自由自在に出來まする。ある人の發句に

「子もふまず枕もふまずほとゝぎす。おもしろい事でござります。郭公の聲が耳に入と。いつのまにやら。立てゆき窓を明る。しかも側にねてゐる子もふまず。また枕もふまぬ。何ものがあるいて往たぞ。只郭公ばかりじや。チト考へて御らうじませ。ナント奇妙なものではござりませぬ歟。しかしながら身びいき身勝手が少しでも交ると枕もふめば。親御のつむりも蹴ちらかす。こはいものじや。さるによつて朱文公も。道は日用事物。まさに行ふべきの理。みな性の徳にして。心にそなはると註をお下しなされました。その心にわれがといふ身勝手がまじると。性の徳をうしないまして。朝から晩まで。する事なす事。工面のわるい事ばかり思ひ付て。我とわがでに。ハアスウいふて苦しみます。心學の有難い事は。我ないといふ道理を。合點いたしますれば。道のはなれられぬ事を。よく知ります。大歟小歟の違ひはあれど得て身勝手がまじります。さるによつて。平生道を辨まへて。おかねばなりませぬ。事のないときは。道しつた人も。知らぬ人も何もかはりはござりませねど。何ぞ事があると。天

地のちがひに成まする。たとへて申さば。私のやうな目くらも。あなたがたの
やうな。目あきも。斯して居まする時には。何もかはりはござりませぬ。今にも
あれ。ヤレ火事じや。盗人じやと。立騒ぐとき。あなた方は目があいてあるゆへ。
道をよう御存じや。ソコデ怪我もせずに逃られる。私どもは。其段になると。逃
る事が出來ませぬ。目がみえねば。道はしれぬ。されども。手足がござりますゆ
へ。さながらさきよろり共してゐられず。探り廻つて。逃て見ても。あちらでは。天
窓うち。こちらではふみかぶり。どうやらこうやら。逃れふせると。始のうろた
へた事は忘れて仕舞ひ。目を明うとも。道をしらうともれもはず。結構な目く
らじやと。思ふてゐる。道ぎらひのれ人は。私によう似たものじや。事は何どき
にれこらうやら。しれぬが浮世でござります。子が死なうやら。親が死なうや
ら。掛損せうやら。火事にあはうやら。其とき俄に。泣がほをせぬやう。前もつて
道の修行はいたして置たいものでござります。是故に君子は。其睹ざる處を
戒しめ愼しみ。ろの聞ざるところを。恐れろると。事にのぞんで泣づらさげぬ

御用心を。聖賢君子は前もつてなされまする。これに付て。たとへのはなしがある。さる所の隠居が。杖をついて板橋をわたるに。中程の板にふし穴がござりました。かの隠居。杖をふし穴へ突込れた。思ひがけない事ゆゑ。是はと驚き。手をはなすと。杖はするすると。節あなより下へぬけて落ると。川下の方へ流れまする。隠居これを見て。ふしぎさうな顔つきして。腰にさした扇をぬき出して。又かの節あなへさしてみ手を放して見れば。扇も穴から。川へおちて。是も川下へながれまする。隠居つくづくとうちながめて。やうやう合點がいたやら。横手を打て。ハヽア此理屈じやナといはれた。これがよう似た話じや。銘々どもは。一ぺんや二へん。鼻ついても。天窓うつても。なんぼうでも合點がゆかぬ。ソコデ學文がきらひ。道のはなしが嫌じや。小人と君子とのわかちは。外ではござりませぬ。しくじつても懲ぬのは。小人。しくじらぬ先に。御用心なされるのが。君子でござります。誰しも。それ慎む心のないものはなけれど。小人凡夫の悲しさには。人の見る所。人のきく所では随分慎しんで。用心をいた

しますれど、人の見ぬ所、人の聞ぬ所では。どの様な事しても。大事ないと心得。高なしの氣隨氣まゝ。さるによつて折々鼻がへこみます。聖賢君子はこれに引かへ。人の見ぬところ。人の聞かぬところを。いよ〳〵大事とれ愼みなされる詩にいはく。爾が室にあるをみれば。こひねがはくは屋漏にも愧ざらんと見ゑまして。吾子は御一人でざつても。不行儀な事はなされぬ。實に人の見聞ぬ所は。いたつて大事の曠の場所でござります。うろたへると。人にも見落され、大恥をかゝねばならぬ。中むかし。世の亂れまして。こゝかしこに。盜賊れて り。在方町かたれびやかされて。一日もやすき心はござりませなんだ。其頃盜人二三人。夜ふけて。ある家を窺ひ。戸のすき間より。内をさしのぞいてみれば。としの頃。四十斗の女。たゞ一人。圍炉裏の前にすはり。粥を煮て居りまする様子じや。此外にも人やありと。なほ窺て居まするうち。彼女粥のにゆ加減を試る有さまをみれば。鍋のふたをとり。淸らかなる箸にて。粥少し蓋の上にはさみ上、指にて押潰して試み。更に口中に入れませぬ、其行儀の正しいを見て。盜

大きに恐れて。にげ歸つたと。ある書物にみへました。是がこれ。獨を愼むの奇特でござります。私どもは。とかく合點がわるうて。これは人の見ぬ處じや。これは人の聞かぬ所じや。是程の事は大事あるまい。此位な事はしれはせまいと。我ひとり合點して。道のない方へあたま突込。これが理屈じや。おれがりくつじや。是ではどうもならぬ。おれではどうもならぬ。かうすれば勝手がよい。斯せぬと勝手がわるいと。滅多に身びいき身勝手でこじつけ。心易う渡られる。世の中を。無理無体に苦しみます。ある人の歌に「岩根ふみからたちわけても人は。やすき大路を。すぎがてにする。と朝から晩まで。邪道を横ばいする。不行儀な蟹仲間が多い。さりとてはこまつたものじや。其くせ人の横ばひするのは。よう目にかゝつて。見事人の小でとはいへど。おのれが横にあるくのは。トントめにかゝりませぬ。又ある人の發句に「蟹を見て。氣のつく岨の清水かな」おもしろい句じやござりませぬ歟。此句を。我得かたに取て見れば。人の横ばいが目にかゝつたら。チャット。わが身にたちかへつて。我もよこ這はし

てゐぬ歟と。氣をつけてごろうじませ。此氣がつくと。愼みの心がおこる。愼みの心が起れば。おのづから生れつきの性をやしなふ便になります。もし少しでも愼しみがぬけると。離れられぬ道を。無理無体に離れるによつて。甚苦しい。此故に朱文公も。是をもつて君子は。常に敬畏を存して見聞ずと雖も。またあへてゆるかせにせず。天理の本然を存して。しばらくの間も。離れしめざるゆゑんなりと。註をお下しなされました。すべて敬畏の心を存するは。人にむかふばかりの事ではござりませぬ。萬物に向ふに。此心をもつてむかへば宜しうないといふとは。ござりませぬ。我友何がし。播州三草の人で。ござりまするが。いたつて農業の事にくはしく。米麥はいふに及ばず。何にても此人の手に植つけますると。豊凶にかゝはらず。世間の人より。作徳がたんと有て。至極見事に出來まする。ふしぎにぞんじまして。そのゆへを尋ましたれば。大きに謂れある事でござります。先籾種は隨分よい種を撰んで。前年より俵に入れ。庭の天井に釣おきまする。これは火氣が自然とまはつて。あたゝかなる様の

心得でござります。尤所によつては。只土藏にたくはへて。たく所も。ござりな
すれど。北國筋や。あるひは山分などでは。多く寒氣が。つようござりまするも
へ。火氣を借て。おたゝまりを入置まするとじや。さて翌年にいたり。種附時分
になりますれば。かの俵をおろすに。竿のさきに鎌をゆひ付。下よりかの釣縄
を切ておとし。池水に漬まする事。廿日ばかり。其のち苗代へまきつけまする。
これが三草邊では。すべてかやうに致します。然るにわが友何がしの心得は。
大にちがひまして。籾だねといへども天地生々の氣を。ふくんでゐる。活物な
れば。疎略にあつかふときは。生々の氣をくじく事があらう歟と。いかにも大
切に。つゝしんで病人をあつかひまするやうに。しづかにかづき上て。つりお
きます。又おろすときも。階子をかけ。ソツト肩を入れて。縄をとき。靜におりて。
池へもち行ときも。大事にして持ゆき。又水へおろすときも。小口から。ソロソ
ロと少しづゝ水へひたし。次第に水へおろして。つけ置ます。上るときも。また
はじめのやうにして。ソロ〳〵と引上まする。是らの心得は。人のおたまより。

水をかけますれば。一驚をくらひ。氣しゝまつて。暫はのびませぬ。足もとより次第に水をかけますると。胴ぶるひも出ず。氣もしゝまらぬ。此理を考て。すべて種物をあつかふ事。大切の人をあつかふやうに。敬畏の心をそんして。あつかひまする故。種ものゝ氣がおのづからしゝまらず。さるによつて實のり格別。世間にすぐれて出來るよし。咄されました。成ほど有がたい。心得でござります。尤土地所により。又は寒暖によつて。さま〴〵種漬植つけなどの。仕かたもござりませうけれど。只おそれ敬しむの心を主として。其所々の法にならひ。種漬植つけ。すべてとり入まで。此敬畏の心で仕あげますれば。いづれ世間よりは。餘計とれねばならぬ。筈でござります。是は種ものに限らず。茶碗ひとつ。扇一本。取あつかふにも。おそれつゝしむの心があれば。とり落してわる様な。無調法は出來ますまい。まして主親に向ひ。夫兄にむかひ。此心があらば。忠孝貞節。おのづから勤まります。但し畏れつゝしむといふて。ワナ〳〵とふるいながら。致す事ではござりませぬ。敬畏といふは。只大事大切とぞんじ詰ま

する事でござります。別して大事大切にせねばならぬは。御銘々の家業じや。この家業は。みな是其家々の御先祖さまや。大祖父様。親御の代から。出來りの家業でござります。此家業をはじめるとは。一朝一夕のとじや。ござりませぬ。鎗に血を付たり。鎧の袖をしきねにしたり。又は肩に棒を置たり。或は草鞋を作つたり。雨にそぼぬれ。雪にうたれ。食ふものも得くはず。着物も得着ず。口をしい目も堪忍したり。難儀な事も辛抱したり。千辛萬苦して。この家業のもとひを。御立なされたのじや。其子孫として。己が勝手の氣隨にまかせて此仕事は引あわぬの。畑仕事はきらひじやの。こんな小商しては。渡世になる物歟などゝ。とかく餘所ほかへ。目がついて。仕來りの家業が。いやになります。ソコデ百姓が商をし。商人が醫者になり。いろ〳〵にばけて。世間の人をたぶらかす。恐ろしい事でござります。ヨウ思ふて御らうじませ。引あはぬ。商賣でも。埒のあかぬ細工でも。見事先祖代々。世渡が出來て來のじや。夫が今更渡世にならぬといふは。皆これ。家業に。精が出ぬのでござります。是を怠ると申ます。此怠

りの起る所は。身の分限を辨へませぬによつてじや。分とは士農工商それ〴〵の分ち。限とは。町人は是だけ。百姓はこれだけ。職人はこれ丈と。みな夫それに住居衣類。食物は申スにおよばず。身分だけの限りがござります。是を分限と申すのじや。その分限を過す所から。物入がつようなり。入目が多いに付ては金まうけが足らぬやうになりまする。ソコデ家業のこしがぬけて。おのづから精出して勤ることがならぬ故。トフ〴〵先祖から仕來りの家業を取替るやうになります。こはい事じや。めん〳〵身にたち反て。愼しまねば成ませぬ。たま〳〵據ない事で。家業をかへる人は。まとに止事を得ぬのでござります。夫を手本にして。めつたに商賣をかへたがる人は。烏鵜の眞似をして。水をのむと申スものでござります。こゝによい譬の話がある。さる貧地の和尚様が。急に賽錢をしてやらうと考へ。有きたりの本尊あみだ如來は。古めかしく。世間に類も多い。當時世間をうかゞふに。專ら子をうむ事が。はやる時節なれば。子安の觀音を本尊として。安産の守りを出したらば。寺門の繁昌うたがひな

しと。俄にあみだを觀音にしかへ。門前には。本尊子安の觀世音と。墨ぐろに書しるし看板をかけたれば。參詣の人。肝をつぶし。あやしんで門内へはいりませぬ。和尚大きに氣をいらつて。これではいかぬと。又々工夫し。其翌日は。辨才天。あるひは金ぴら。弘法大師と。おもひ出すまゝ。とり替引かへ。日々本尊を仕かへましたれば。後には猫の子も來ぬやうに成たと申すとじや。商賣がへをしたがる人は。此和尚さまのお仲間うちじや。先祖開山上人の御苦勞なされた。家業如來を大切にお守をして。御先祖開山より傳來の家藏諸道具鍋かまの御寶物をば。大切に守護して。一向一心に。家業如來を信心さへいたしますれば參けいは門前に市をなし。賽錢は。米麥錢かね。雨のふるやうに。元日から大晦日まで。上り通しでござりまするに。此和尚さまのやうに。本尊を仕かへ。御開山の御苦勞をかへり見ず。不信心になるがさいご。參詣は日々にへり。賽錢は月々に減じ。仕かたがないゆへ。寶物をうり喰にすると。本堂たちまち大破におよびます。其とき一家親るいへ。奉加帳を持てまいつても。誰が一人。寄

進についてくれる者はない。是がこれ寺や本尊は。たれが物じやとたれもゑ。和尚の心得ちがひで。寳物を賣らねばならぬやうに。成ますするのじや。是を孟子も。家必自らやぶつて而して後。人これを毀ると仰られました。とかく家業に。怠つてはなりませぬ。ある人の道歌に「ねてたりも夏のかせぎもほど〳〵に。ほにあらはれて。見もる秋の田。六月炎天に。田はぶつ〳〵と。にえ返つてある中へ。四ッばひに成て。腰ぎりはいり。脊はでふんで灸點れろさにや。分らぬやうに眞黒に日にやけ。汗しづくになつて。一番草二ばんぐさ三番草と。ねんごろに手入した田も。またぶしやうかはいて。晝めしの箸はなすと。永の日を。七ッ時分まで晝寐して。のら〳〵と明しくらし。一ばん草もろく〳〵に取らぬ田も。青田のときは同じやうに見へますれど。秋になると。こはいものじや。手入をした田は。實がいつて皆俯てゐる。又のらかわいた田は。きよろりが。みうねぶつたやうに。ひよろ〳〵と。立てゐまする。人の怠りも此通りで。平生は格別だつた樣にも。あうんだやうにもれば。えませぬ。昨日はこれほど怠つ

たり。けふは是ほど油斷が有たとその折々はわかりもいたしませねども。十二月の大晦日には。書出しはつんで山のごとく。胸づかへして。飯も喉へ通りませぬ。ひろげて見れば皆それぐに覺のある事。此とき手を持て胸を打ても。モウおそい。是みな平生の油斷からじや。とかくおこたらぬやうに。いたさねばなりませぬ。かんざしは大事歟。花見は大事歟。此くらゐな事はしても大事ないと。ゆるす心の果ぞかなしきじや。所詮分限を辨へて。立歸らにや成ませぬ。かるがゆへに。中庸に。君子その位に素して行ふ。其外を願はずと。お示しなされたのでござります。これについて。おもしろいはなしがある。さる茶人の家へ。道具屋が參りまして。モシ旦那。この道具を御ろうじませと。さし出せば。旦那が手に取て。ホンニ此茶わんは時代が見へる。書付はない歟。誰が手づくねじや。ハイこれは武藏坊辨慶が手づくねの茶わんでござります。いかさま其時代と見へる。代金は何程じや。ハイ〳〵三貫匁でござります。ヨシ〳〵これは貰ふておかふ。時にこの蓋置は。またよほど時代がみえる。鼎足でもな

しまた三ッ人形でもなし。ハイこれは。むかし鴻門の會の節。樊噲が楯の板をはさんで門やぶりした時の鎧のかな物でござります。それはけしからぬ時代ものじや。これも序に買ふておかう。時に此香合は。大分わたらしう見へるが。これは誰が作じやハイ〳〵これは加藤清正。朝鮮征伐のとき。朝鮮王城の土をとつて。手づくねになされた香合でござります。それは一段もおもしろい。これもついでに。買ふておけ。いづれ近々。茶を出さねばならぬ。先辨慶の茶わん。樊噲の蓋おき。清政の香合。よい取合じや。しかしみな兵ぞろへじや。是はどうした事じやと。問れたれば。茶道具屋がぬからぬ顔で。つよい筈でござります。たんと家をふみつぶして來た道具じやといはれた。ナント恐ろしい話ではござりませぬ歟。茶碗や香合ばかりの事じやない。小間物やが持てくる。仕入箱の中にも。朝比奈や辨慶が本名をかくして。櫛笄になつて。ねようもしれませぬ。うろたへると。身代を兵共にたゝきつぶされます。其外古道具。古手見せ。質屋の藏に。つんであるしろものは。皆身代をふみ潰した兵。そこに埋伏し

て居ようもしれぬ。御油断は成ませぬ。とかく大事大切の慎みがぬけると。大騒動のもとゐじや。御用心なされませ 休息

隠たるより見はるゝはなく微よりあきらかなるはなし。かるがゆへに。君子は。その独を慎しむ。前には敬畏のこゝろを存して。天命の性をやしなふの工夫を御しめしなされ。こゝには今一段くはしうして。省察の工夫を御示しなされたのでござります。省とは常にこの心存するや。否やと省み。察は善歟悪歟と。あきらかに辨へて。天命の性を全うするとでござります。まづ本文に。隠たるより見はるゝはなしとは。人の心の事を申すのでござります。又微より顕なるはなしとは。念慮の微なる事を。いふのでござります。さて独とは。われひとり。知るところの場所にて。すなはち念慮の。うごくところを。さして申すのじや。大勢の人の中でも。己がこゝろの中は誰もしらぬものゆゑ。さればこそ。ひとりとは申ますれ。すべて。至善も。極悪も。この我ひとり知るところの場で。極めまするのじや。多くはこれ世間の人の。不忠不孝におちいりまするも。ま

たいにしへ。夏の桀王。殷の紂王などの天下を亂し。其身を亡しまするも。はじめ僅に此ひとり知る。念慮の微なる所より起るのでござります。たとへば螢ほどなる烟草の火より。大火事となるやうなものじや。さるに依て。省察の工夫をこらしつゝしみを加へねば成ませぬ。此獨をつゝしむ事。僅な事のやうにござりますれど。其しるしが。天地位し。萬物やしなはるゝに至りまする。又この獨しるところを。うか〳〵と油斷してれきまするど。其しるしが國を亡ぼし。家をやぶり。身をうしなふにいたるのじや。ナント恐ろしいものではござりませぬ歟。古語に。念慮萌さゞれば。鬼神も知る事なしといふて。此一念の萌さぬうちは。鬼神もはかり知る事が出來ませぬ。なぜなれば。知るべき事がないによつてゞござります。むかし飛彈の山中に。檜木の長へぎをこしらへ。世渡とする男がござりました。一日例のごとく。山に入て。細工をする折から。前なる杉の木の蔭に。脊の高い山伏が。たもひがけなう。立て居ました。かの細工人大きにあやしみ。さても此山伏は。天狗さうなと思ふうち。かの山伏大聲あ

げて。我を天狗さうなと思ひをるぞといふ。細工人。いよ〳〵怪み。これはいやな事じや。早く遁歸らんと思へば。かの山伏また聲をかけ。これはいやな事じや。早く遁歸らんと。思ひをるぞといふ。細工人。あわて騒いで。長へぎをたわめ。急に荷ごしらへするとき。手が脱れて。枌板一まい。はづみに飛で。かの山伏の鼻柱へ。きびしくあたれば。山伏一驚をくらひ。扨々おのれは。氣のしれぬ男かなといふかと思へば。かき消すやうに失たと。ある書物に見へまする。是夫天狗も。人の念慮のおこる所は。忽に知りますれど。念慮の起らぬさきに。長枌のはじけるとは。夢にもしらぬ。これ知るべき道理がないに依てじや。さるに依て。一念おこると。天地神明に通じ。世界中へ。つゝぬけに成まする。こゝを以て朱文公も。己ひとり知るときは。則これ天下の事。著見明顯なると。しかもこれに過たるもの有となしと。註をお下しなされました。さるに依て。常に腹の中を吟味して。用心を致しませぬと。どんな大事を惹出し。悪名を流さうやらしれませぬ。甚恐ろしい事でござります。先年私江戸表に居ましたる節。隣家の

事でござりましたが。おる呉服店の手代に。獨を愼む心得のない人がござりまして。いつの間にやら。二十兩ばかり。引おひが出來ました。されどもまだ節季までは。あらはれぬこともへ。とやかうと工面して居るうち。一日金二百兩の爲替手がたを持て。麹町邊まで。うけ取に往れました。先方で恙なう此金を受とりました所で。ふと惡念が起りました。恐いものじや。其故は。いづれ節季になると二十兩の引負があらはれて。請人に預けらるゝは必定。所詮この金の手に入た社幸なれ。此まゝかけ落して。京大坂へなりとも出かけ。ともかくもならうと。無分別を考出した。これが是物をかくせば隠されるものじやと。心得ちがひする人の。所作じや。大切なものは金銀。おそろしいものは人の心じや。指一本はじく間に。どのやうな無分別がおこらうやらしれませぬ。若いれ衆は別して戰々兢々。とはし〱のおつゝしみが。肝要でござります。さて此手代が。わるがしこう工夫をして。此まゝ逃なば。追人のかゝる事は必定いづれ二三日。江戸の町にかゞみゐて。其のちに上方へのぼらうと。覺悟をきは

め日ざしを見れば。まだ晝前何處でなりと。日を暮さうとれもひまして。よし町といふて。堺町の裏新道に。懇意の茶屋がござりました。先こゝへ逃込で。さてどうも仕様はなし。たいて持やら。燈籠鬢やら高なしに大勢呼よせ。酒肴と。どんちやんとで。日をくらさうと。ぞんじましたが能うした物じや。本心が合點しをらぬ。酒はなんぼ飲でも醉はず。太鼓三味線も面白からず。太皷もちの。かる口も。胸にこたゑて。さり迚はこゝろぐるしく。首をのばして日ざしを見れば。まだ八ッ前。いつもみじかう覺ゑる日も。けふに限つて。格別に長うればゑ。どうぞして日を暮したいものじやと。さし俯て思案してゐる。ナントこれが鼻たれの時分から。れせはに成た。御主人の恩を。知た人でござりませう歟。恩をしらぬものを。人面獸心といふて。面は人でも。こゝろは獸じやといふてあれど。畜生にも此やうな不義な心はござりませぬ。わが友何がしといふ人。町分にて年寄役を。勤めてゐられました。然るにこの町内に何處から來たとも知らず。迷ひ犬が一疋。居ましたが。いつしか町中の飼犬のやうに成て。こゝ

かしこでやしなはれて居ました。されば此犬が近頃往來の人をれどし。子供に噛付。あるひは非人などにかみつきまして。折々町內へ附てたへにあづかり。迷惑すると度々でござりました。あるとき町用につき。隣町へ。かの年寄相談にもかれ。夜ふけて歸る處を。件の犬が。さん〴〵にれどしました。やう〳〵我家へ逃こみ。寢て見ても。腹が立てねられず。翌朝會所へ髮を結に參られました。折ふしかの犬が。其會所の庭に。寐て居まする。ソコデ年寄が。にはかに氣色をかへ。犬にむかひて。人にいふごとく。れのれ町內のやしなひをうけ。命をつなぐ。恩義もれもはず。やゝもすれば往來の人をそこなひ。町中へ迷惑を掛るのみ歟。夜前町用にて。夜ふけて隣町より歸る節。何もゑ町役人をれどしたるぞ。これによつて。已來町分にさしれくと。罷ならぬ。いづれへなりとも立されと。大に叱りましたれば。かの犬首をたれ。つくばひ居て。いかにもあやまり入たる体にみへました。さすがに年月。町內に居ました犬もゑ。不便の心れこて。已來をきつとたしなみなば。これ迄のとほり。町分にさし置てやらうと。訓

が和らぎましたれば。かの犬うれし氣に表へ出ました。髮結はじめ。家内の人。この様子を見て。大にあきれ。お年寄は氣が違ふたる歟と。怪みましたと申事じや。扱ふしぎなは。件の犬が。その日より。往來の人をおどさず。其うへ。かの年より。他へまゐられまする節は。かならず町ざかひまで送り。また歸る節は。町ざかひまで。出むかひまして。先にたつて。門口に踞まりまする。畜生といへども。恩をしらぬといはれては。能々に恥るところありと見へまして。かやうに所作がかはりまする。これでおもへば主親の恩をしらぬものは。人面獸心とは。中々いはれぬ。畜生にもはるかに劣たる所作でござります。是全く。平生獨をつゝしむの心がない故。人の見ぬところ。人のきかぬ所と。わがでにゆるして。不忠不孝の所作になります。人は萬物の靈と申して。一切いきとしいけるものゝ中におゐて。尤すぐれたるが人じや。それに不忠不孝の名を取まするは。實にはづかしい。口惜い事でござります。しかも不忠不孝の名をとつて。せめて立身出世でも出事るとか。氣隨氣まゝがなる事歟。鳶烏でも遊んでゐて

はくはれぬ。鼠もいたちも。分相應にかせがねば。くちすぎは出來ぬ。わかいときの無分別には。主親の手をはなれたれば。格別自由が。出來るものゝやうに覺へるは。これが血氣のムチャクチャ思案。乞食非人になつても。あそんでゐてはくはれず。とても動き。はたらくものなら主親のれ膝もとで忠孝がつとめたい物じや。うろたへると。本心が眞黒に成て。いつのまにやら獸にも劣る心になりまする。古歌に

「生茂るむぐらの宿の道たえて人もかよはず月もてらさず。　此歌のこゝろは。仁義の良心をうしなふて。人の道に離れては。生てゐる死人じやと。たとへてよんだ。歌と聞へます。加樣なに人は。澤山にあるものではなけれども。得て一人や二人は。あるものでござります。御用心をなされませ。扨かの手代どものが。俯いてゐるを。氣のどくがり。ソロ〳〵。たいこもちが。たてかけて。ナントこれから。芝居へ御出なされませぬ歟といへば大勢の燈籠びんがわたしらもれ供いたしませうと。とり〴〵。にすゝめる。ソコデかの手代が思案に。ま

だ日は暮ず。酒飲でも醉はず。太皷三味線もうるさく。たゞ何となく。しめつけらるゝやうにおもふ最中なれば。イッッ芝居見にいたらば。まぎれるとも有う歟か。是から。大勢うちつれて。芝居見にゆく。ナニが錢はらはぬ芝居行なれば。めつたに廣う棧敷をとらせ。大勢の燈籠びんをまへにならべ。其身は頰かぶりで顔をかくし。後の方にちゞこまつて。もとより芝居見る氣でもなし。どうなとして日を暮さうと思ふもの。見るでもなく又見ぬでもなし。たゞウッウッとして俯いてゐる。此日の狂言が。敵討つゞれの錦といふ狂言で。伊兵衛佐兵衛といふ若黨が。たがひに女房を賣て。金の才覺し。主人にやらうといふ趣向じや。尤伊兵衛の女房は。佐兵衛が妹で器量がやうて。銀五百五十匁に身をうり。又佐兵衛の女房は。伊兵衛が妹で不器量ゆへ。錢一貫文で。身を賣る。愁歎のところを。かの手代が聞ば。伊兵衛の詞に。一貫の錢の。あたひは十二匁。世間通用の秤でかけたら。十二匁あるべきが。今日。此世界を照さつしやる。天道の秤では。此見よが五百五十匁の身の代も。お縫が其一貫の十二匁も。ちつと

もかるみはあるまいぞと。いふ聲が耳に入ると。かの手代がなにおもふたか。しく〳〵と泣出したが。たまりかねて。何ともいはず。其座をたつて。一さんに主人の家へかけて戻りました。これ本心の發見。地ごくのかまのふたの明どき。ある人の發句に

「一しぐれ時雨てもとの月夜かな

ナントおもしろい發句じやござりませぬか。若いときの不了簡は。たとへば晴たる空の。俄にかき曇つたやうなもので。善悪もわからず。主親の事もわすれ果。まよひにまよふて。つきあたつた所で。はじめて目のさめるは。一しぐれしぐれて。もとの月夜かなじや。人の性は善なり。一旦明德は昏んだれど今芝居を見て。畢竟狂言綺語とはいひながら。勸善懲惡のをしへにちがひなければ。此手代どのが。見るとも見ぬともなしに。狂言の趣向が。身にしみ〴〵と。こたゞ能々おもふて見れば。かれはわずかな切米を。もらふた。主人の恩義に。女房を賣て。金の調達した。恩をおくらうと。おもふものさへあるに。我は幼少か

ら。格別の大恩をうけて。人に成たとをうちわすれ。大切な主人の金を引負し。その上大金までぬすみ取て。出奔せうとおもふたは。われながら不思議なほど。恐ろしい了簡じやと。フト氣がついて見れば。座にもたまらず。叱られるとも。引負のとも。何もかも思はれず。只そのまゝに。主人の家へ歸つたのでござります。實にありがたい目のさめ様じや。これは是狂言のおかげじや。すべて芝居淨るり皆善をすゝめ。惡を懲す。手短かなをしへでござりますれど。得てはうまい處の身を喰ずに。味ない皮ばかり喰る人があるものじや。狂言が上手じやの。男つきが立派なのと。やく〳〵にたゝぬ所ばかり。見て戻るは。かへつて毒にこそなれ。をしへにはならぬ。さる所にいたつて實体な息子どのが有て。芝居などは。見た事もない。篤實なうまれつき。ソコデ謡講の連中が。かの實体ものを。放蕩仲間へ引入やうと。一日無理無体に。芝居へつれて行ました。かの息子どの。はじめから終まで。一ッ〳〵感心し。落涙して。よろこばれた。友だち衆が。此ていを見てさては芝居が氣に入たとみへると。その後度々さそへど

も。ふたゝび芝居へは往ぬ。ソコデ友達衆が。合點がゆかず。かの息子殿に。此間はしきりに感心して。面白がつたじやない歟。全体何を。感心せられたのじやと問はれましたれば。かのむすこどのが。いはるゝには。ナンボウ渡世に。精出すといふても。六月炎天に。わた入を。三ッ四ッかさねて。飛だりはねたりの所作事。中々我々が。一日そろばんはじく樣な。勤ではない。いかさまあれほど。渡世に精出さねば。身代はもたれぬものじやと。それで感心いたしました。さるによつて。ふたゝび芝居へ往たら。此方の身代がもてぬによつて。得參らぬといはれたと申す事じや。これらは是芝居の。うまい身の所をたべたと申すものじや。どなたも芝居を御らうじるなら。かやうなところを。御覽なさるがよい。むかし柳下惠といふ賢者は。水飴を製して。根機をやしなひ。學問のたすけとせられた。又盜跖といふ大盜人は。みづ飴を製して戶樞にぬり。盜のたすけとしたと申す事じや。同じ水あめでも。もちひやうに依て。學問のたすけとも成り又ぬすみのたすけともなる。强い物じや。芝居浄るりも此通りで。見樣に

よつては。忠孝のをしへとなり。又見やうによつては。不忠不孝の手本ともなる。幸にこの手代衆の。よいところで。氣のついたは。いまだ天道にも捨られぬ所が。あつたとみへる。有がたい事ではござりませぬ歟。是じやによつて。專ら獨をつゝしむの。修業をせねば成ませぬ。愼しむとは。一念のきざす時。良知の鏡をてらして。善歟惡歟を明らかにわきまへ。惡なればこれをやめにし。善なれば固くこれを執まするを。愼しむとは申します。このつゝしみが。癖付になつたを。聖賢君子と申スのじや。何分常に。わが腹の中を吟味して。少しも聡かしうない様にしておくが。學問の肝要でござります。此ひとりをつゝしむと申スとは。道を行ふの極秘傳。かへすぐ難有い。聖賢のお示しでござります。たとへば蝮に嚙れたるとき。其疵口をろいですつれば。急ちに治るやうなもので。一念萌して。惡としつたら。チヤツト止にすると。惣身へ毒はまはらぬ。これを捨ておくと。其惡が段々腹の中で大きうなり。潛滋暗長といふて。目にはたゝねど。いつの間にやら。心の惡が形にあらはれ。止にしたうても。相人が出

來て。やめられぬやうに成ます。吸がらの火は。ふみけしても。仕廻るけれど。火事に成てからは水も階子もとゞかぬ。只一念幾微の間に。善惡をにらんで。惡を止にするが。道の奥儀でござります。ドフヾどなたも。こゝをれ勤なされて下されませ。◎扨かの手代どのゝ主人の家には。今朝から爲替を取に遣たが。晝に成てももどらず。先方へ問合せにやれば。先刻手代どのへ。金子をわたしたとの事。サアこれから大騒になり。請人を呼にやるやら。卜者に見てもらふやら。上を下へとまぜかへす所へ。七ッ時分に。かの手代どのが。何氣ない体で。もどつて來た。此家の番頭どのが。いたつて發明なうまれ付ゆゑ。彼手代の戻るとき。其顔付をみれば。只ならぬ顔色。足もとを見れば。かたし〳〵の雪駄をはいている。しかもかたしは絹眞田の緒の付た女雪踏。さては此奴。餘ほどうろたへたものと見へる。何さま子細あらんと。しづかに金子を問へば。別條なく。二百両もち歸つて。番頭へわたします。ソコデ番頭がいはるゝには。歸りの遲う成た仔細も。尋ねたけれど。何歟つかれたやうすにも見へる。まづ二階へ

上つて。一寐入ねよといはれた。かの手代も。これをしほに二かいへ上つて。跡はともあれ。先金子を主人へわたしたれば。安堵して。氣をしづめました此番頭の叱らぬはたらき。甚感心な事でござります。さてその夜。しづかにぎんみする處。引負の金子二十両。有体に打あけ。なほまた。今日の不所存のこらず咄し。其うへ伊兵衛佐兵衛の狂言で。氣がつき。恥をしのんで歸つたる様子。委細に咄しました上。いか様ともはからひ下されいと。實に誤り入た体でござりました。これによつて番頭どのが。主人へ委細に申したれば。主人も分別ある人にて。芝居狂言を見て。本心にたちもどりの出來るは。まだたしかなる所がある。雨ふつて地かたまると。此後急度あらたむるならば。今一度つかふてやれといはるゝ。是からかの手代どのが。眞實主人の恩が有がたう成て。奉公を大切につとめ。難なく宿ばいりをしられたと申すを。承はりました。誠にあやうい事でござりまする。是で能う御合點なされませ。主親ほど。世の中に。目の長い慈悲ぶかいものはない。あまり結搆すぎるによつて。さま〴〵の小

言が起る。畢竟腹一ぱい物をたべて。ひだるい目をしらぬからじや。ある人の發句に

「その腹に何が不足ぞなく蛙

面白い句じやございませぬ歟。是は奉公人衆の事ばかりじやない。所帶を持たれき〱の旦那さまも。皆入用のとでございます。猶あとは。明晩れはなし申しませう　下坐

喜怒哀樂のいまだ發せざる。これを中といふ。發して皆節にあたる。これを和といふ。中は天下の大本なり。和は天下の達道なり。これ則人の性と情との德をいふて。道はしばらくも離れられぬと申事を。示しなされたのでございます。畢竟性と情と。わけてはいへども。心の事じや。たとへば。性と情とは。水と波とのやうなものではなれたものではございませぬ。風が來て。波のたつるときは。情の發したやうなものじや。風止んで水しづかなるときは。性のやうなものじや。波の外に水もなく。水のほかに波はない。人の性情も。これと同じ事

で。所詮動靜の二ッで。其實は一ッでござります。この性情をかねて。心と申します。心の体は性なり。心の用は情なり。心は道なり。さればこう性は道の体。情は道の用なりとも申してある。これで見れば人と道とは。離れたうても。はなれられるものではござりませぬ。さて此性を知らうと思はゞ喜びもせず。腹たてもせず。かなしみもせず。樂しみもせず。可愛がりもせず。惡みもせず。又はしがりもせず。此七情の發らぬ先は。只何ともない物じや。此何ともない所を性と申て。かたよりもせず。ゆがみもせぬ故。此德を中と名づけまする。此場所を見付たるを性をしつた人と申すのでござります。しかも見るといふて。何も見るらしいものはござりませぬ。しかれども。何もない性に。一切の理がふくんであつて能萬事に應じまする。かるがゆへに。中とは。あたるとの儀とも申してござります。則これが天命の性。道の大本といふてあるのじや。さて情をしらうとおもはゞ。何ぞ喜ぶ歟。腹たてる歟。事のあるとき主親は申すに及ばず。世間の人がこれを聞て。かれが喜ぶは尤じや。腹たてるは道理じやと。得心

して下さるのは。則情の正しいのでござります。この徳を名づけて。和と申す
のじや。和はやはらぎむつまじい事で。人がみな合點してくれる故。和は天下
の達道とも申してある則情の正しいのは。世間へ通用して。指支へがないに
よつて。達道と申すのでござります。この味を朱文公が。おたとへなされて。て
うど家のうちに人が居て。西へゆくのでもなし。東へ行のでもない。何ともな
い處が性のやうなものじや。さて東へゆくべきときは。東へゆきて。西へゆか
ず。南へ行べきときは南へゆきて。北へゆかぬが。情の正しいやうなものじや
と。仰られました。さて加様に。性じやの。情じやの。心じやの。体じやの。用じやの。
人心じやの。道心じやのと。申し並べて見まするに。女中がたや子供衆は。さだ
めて御合點もまゐるまい。また人の腹の中に。棚がいくつも釣てあつて。それ
〴〵の品物が積である樣にも聞へませう。けつして左やうではござりませ
ぬ。畢竟何ともない物に。さま〴〵の名を付たのでござります。さればこの道
理は。しひて知らいでも。大事でござりませぬ。只今日しれた通を。お勤めなされ

るど。此理にかなひまするのじや。こゝによい譬への話しがござります。さるかたに學問ずきの人が有て毎日先生の方へかよはれましたが。ある日何歟。店でとぎ物をしておらるゝ。折ふし宿坊の和尚さまが通りかゝつて。これは何をしてござるぞ。ハイ〳〵とぎ物をいたしております。それは何をおとぎなさるのじや。されば此ごろ先生に明德の玉をさづかりましたが。先生の申されまするは。これは是大切な玉じや。すてゝおくとくもりがかゝる。折々切瑳琢磨といふて。とぎみがきをさつしやれと。申されました。去によつて。たゞ今明德の玉を。といで居まするのじやと。いはれた。ソコデ和尚が。それは結構なものじや。かねて聞た明德の玉歟。ドレ拜見いたさう。見せさつしやれと手にとつてつく〴〵見て。イヤ〳〵御亭主。これは明德の玉ではござらぬ我方でいふ。面向不背の玉といふものじや。さても貴公は仕合な人じや。隨分この玉を。しん〴〵さつしやれ。中々明德の玉とは。天地の違ひじやと。いはれました。亭主は合點せず。イヤ〳〵それでもこれは。明德の玉に。ちがひはござりま

せぬと。せり合ふてゐるところへ。神主殿が來かゝつて。これは店さきで。何を争ふのじや。ハイ私が明德の玉を磨いてゐますれば。この和尙がそれはちがふ。面向不背の玉じやといはれますもへ。せり合ふてゐまする。神主どのが聞て。ドレ〳〵たれが見きはめて進ぜう。見せさつしやれ。ハヽアみな違ふた。これは明德の玉でもなし。また面向不背の玉でもないといへば。二人が口をそろへて。ソンナラ何の玉でござります。サレバ〳〵。この玉は我方にいふ。まが玉といふ物じや。中々貴さまがたのいふ。玉とはちがひますといへば。和尙がはら立て。ドレ見せさつしやれ。ヤツパリ面向不背の玉じや。亭主氣をいらつて。其玉をひつたくり。イヤ〳〵明德の玉にちがひはない。神主も目に角たてかの玉を又引たくり。ヤツパりまが玉に相違は無いと。たがひにせり合ひ。あちらへたくり。こちらへ取り。争ふうちに取れとして。玉はみぢんに碎けたれば。たゞ世界ばかりで。有たと申す事じや。ナント味のあるおもしろい話ではございませぬ歟。チトかんがへて御らうじませ。性じやの情じやの心じやの

と。さま〴〵の名は付てあれど。其名を取てみれば。たゞ世界ばつかり。何にもない。ある人の發句に

「踏くだく氷の下に水もなし

加樣に申まするところれは無の見に落るのじやと。思し召うが。落たうても。れちられる。ものではござりませぬ。何じやしらぬが。春になると花がさき。秋になれば紅葉する。柳は綠はなは紅。分別するほど。邪魔になる。柿の木に柿が出來る。桃の木には桃が出來る。鳶飛で天にいたり。魚は淵にをどります。此うまい無造作な味をしらさうと。聖賢君子が齒をくひしばつて。示しなさるゝけれど。きよろりとして居るにはこまつた物じや。なまなかに分別が有て。東へ行べきときに。東へもかずして。西へ行たがり。南へ行べきときに南へもかず。とかく北へ行たがる。これが天命の性にさからひ。情がねぢれて。正しう發せぬ。ソコデ明てもくれても。せつない苦しいと。顏をしかめて。泣あるくものがある。尤かやうな人は日本にありはいたしませぬ。唐天竺にはまゝこれに

似た人があるものじや。めつたに油斷は成ませぬ。心學の有がたい事は。名目をはなれて。たゞ何ともない。我なしのうまい所を見付まして。是にさからはぬやうに。いたしまするゆへ。分別せずして。おのづから樂になります。名を付て申ますれば性に隨ふ道が勤まるのじや。さるによつて。無學文盲でも。隨分修業が出來まする。よし又修業はせいでも。氣質のよい人は。稽古せずして。人の道をお勤めなさる。畢竟銘々どもは。氣質がわるいによつて。獨をつゝしむの稽古をいたさねばなりませねど。全体は稽古せいでもどうせいでも。忠孝はつとまるやうに。うまれ付てあるのじや。かるがゆへに。孟子も人の性は善なりと。仰られた。善なれば道に背かう筈はない。されども氣質の善惡によつて。修業をせねばなりませぬ。此事は前夜申したとでござります。幸ひに稽古なしに。人の道をつとめた人がある。序におはなし申しませう。周防國吉城郡岩淵村と申しまするは。則長崎街道小郡驛と。宮市驛との間に。臺道村といふ。間の驛がござります。此驛より。岩淵村へは八町ばかりござりまして、すな

はち街道筋にて。長門の國。萩の御領分でござります。此岩淵村に關藏といふ百姓がござりました。女房もあり。高七石ばかりの作りをいたされました。しかるに。此關藏病身にてはか〴〵しく耕作も出來ませぬうへに。わづかの作徳なれば。下作にあてますることもならず。もとより夫婦の中に子はござりませぬ。兄弟も大勢でござりましたれど。と〴〵死うせて。只今末の弟に。伊八と申者たゞ一人殘りました。これによつて此伊八を。順養子にして。高七石を讓り。關藏夫婦は隱居同前になり。近村より嫁をもらひ受。伊八に娶合せ。農業を致させました。此嫁の名を。れ石と申しまして。年十七歳にて。伊八が妻と成ました。此人後に孝貞の名。關西にきこえまして。太守様より御褒美頂戴いたされた人でござります。古人の語に。人生れて婦人の身となる事なかれ百年の苦樂他人にまかすと。いかさま女は一たび夫の家へ嫁入すれば。身終るまで。夫に從がふが道じや。さるによつて。其夫の心得次第で。かの氏なうて玉の輿にものりさはなくとも。衣裳に花を飾り。下女下男多く召使ふやうにならら

うやら。またろの夫の心得によつては。嫁入のとき。長刀をふらせて來た人も。貧苦かんなんにせまつて。身にはつゞれをまとい味噌こしを提あるかうやら。百年の樂しみも苦しみも只亭主の。心得次第でござります。幸ひに皆さまは。れ仕合がようて。結構なれ暮しをなさるゝは。ひとへに夫の御恩でござります。得てわるうするとこの道理もしらず。こちらは貧乏人の娘ではなし。よめ入して難儀する筈はないと。思ふてござる人が。あるじや。是はきつい御了簡ちがひじや。百貫目の身代も。萬貫目の身代も。亭主の了簡が。ひとつくひ違ふとたちまち。ちんからりで飯たかにやならぬ樣になります。是じやによつて。隨分御亭主樣を大事にかけなされませ。扨かのれ石は。嫁入してより後。舅姑によくつかへまして。眞實の親のやうに介抱をいたされます。それのみならず常に。夫伊八にしたがふて農業のたすけをなし。其實躰なる事。近所の人も目を驚かす程の事でござります。しかるにかの伊八といゝ。しは生得心ざまのよからぬうへ。兄の家督を繼でのち。れ石を娶りてより。いよ〳〵身持よ

ろしからず。第一に農業をきらひ高七石の作りを。女房一人にうち任せ置て。ろの身は小商にかゝりのみ酒屋をしては人に賣るより己がさきへ飲上てしまひ。古手屋をしては博奕の算用に取られ。菓子屋をしては損をし。豆腐屋でも損をし。其くせ短氣な生れ付で。かり初にも喧嘩口論人のむすめに疵付ては。ぐずりあるき。尤驛ぢかいところなれば常に驛場にたち入。たゝのらのらとして明ても暮ても。女房ばかり責せたげて。猿つかふ様に追迫し。日々に困窮にせまる。誠に氣毒千萬な惡黨ものでござります。これに依て。居村は申すにおよばず。隣村近村身ぶるひたてゝ。疫病神の様におそれられ。實にもてあまして居まする。されども。お石は。少しも恨みず一言も口答へせず。千辛萬苦して。舅姑のかいはうと高七石の農業と。亭主のわる遣ひの尻ぬぐひに。日をおくるとおよそ六ケ年ばかりナントめづらしい。有がたい女中ではござりませぬか。是に付ておかしい話がござります。去る所の下女が。客の物鉢をとりおとして。割ましたれば。內儀が大聲をあげて。おりん何をわつたのぢや。

ハイかうのもの鉢を取れとしまして。大きに不調法でござりました。ナンヂャ鉢をわつた。其鉢がれまへの二年や三ねんの。給銀で買るもの歟・先度も大事の茶碗をわつて。又けふも鉢をわつてじや。ソウ片端からわつて貰ふては。こちの身代は半季もつゝかぬとわめくを聞て。御亭主が。コレ〳〵どうした物じや。そなたはとかく。仰山なものゝいひやうする。世間体もわるいチトたしなましやれ。すべて女といふものは。何事もやさかたに。小さう取なしていふものじや。これが此間江戸から歸りがけに。原の驛でとまつて。朝立しなに。草鞋をはきながら。テモ富士山は大きなものじやと。いふたれば。宿屋の下女がいふには。イエ〳〵あのやうに。大きう見ゑましても。半分は雪でござりますと。いふた。兎かく女子は。かうやさしう。云たいものじや。うちがやうに。かりそめにも。仰山に物いふと。女子らしうなうて。聞ゑがわるい。己來チトたしなましやれと。叱ましたれば。内儀が頰ふくらして。其くらゐな事。わたしじやとて。知てゐますと。せり合てゐる處へ。懇意の人が見へて。これは八兵衛さん。此

間江戸からお歸りと承はりましたが。先御機嫌ようて。おめでたうござります。定めて長の道中。おつかれも有うと。ぞんじましたに。お見うけ申せば。能う肥てお歸なされたと。挨拶するのを。內儀が橫合から出しやばつて。イエ〳〵あの樣に。ヨウこゑて見へますのは。半分は垢でござりますと。いはれた。ナント出來のわるい。內儀ではござりませぬ歟。得てわるうすると。コンナ女中があるものじや。我身の恥になる事もしらずに。亭主のわる口を。近所合壁へいひまはる。鹿島のとふれ。山の神の御託宣には。こまり入たものでござります。おたがひに腹の中をさがして見て。亭主のわる口をふれ歩行はせぬ歟。かしこがつて。出しやばりはせぬ歟。頰べたをふくらして居はせぬ歟と。吟味するが肝要でござります。扨かのお石の親里は。相應に暮して居ますれば。これまで度々聟の伊八へ。金子も用立てやりましたれど。淵へ塩を投込やうにて。何ほど入足してもやくにたゝず。其上娘が。艱難辛苦するを見て。親の心には。いかにも堪られず。お石を呼にやり。二親が異見して。幸に子もなし。緣を切て歸れ

と申しますれど。よく心得たる女にて。全く夫伊八の身持のわるいは。私のつかへやうの能うないのでござります。いづれから申しても。麻につるゝ蓬とやらで。一方が直なれば。おのづからまつ直にならねば成ませぬ。伊八どのゝ心得違の。直りませぬは。ヤッパリ。私のわるいのでござります。其上伊八どのはともあれ。舅姑御は。この上もない。けつこうな二親じや。伊八どのがわるいと申て。ふり捨て帰られるものではござりませぬ。只此まゝに捨れかれて下さりませと。其志いたつて正しうござりますれば。里の親たちも。せん方なくてこのまゝに捨置たら。後には困窮にせまり。縁切て帰るともあらうと。これより後は一向におとづれもせず。又無心もきかず。ひとへに困窮に迫るを待てゐられましたと申す事じや。詩にいはく。桃の夭々たる。其葉蓁々たり。この子こゝにとつぐ。其家人によろしと。見へまして。こゝにとつぐといふてあるは。嫁入する事でござります。朱文公も。此註に。婦人嫁を謂て帰といふとござりまして。よめ入して夫の家へゆくのではござりませぬ帰るのでござりま

す。たよそ女子は。一たび嫁しては。夫の家を家として。外に歸るべき家はない。されば此石女が親里へかへるまいといふは。歸るべき家がないによつてじや。しかも此人學問をして。この道理をわきまへ歸るまいといふのではござりませぬ。發して節にあたる情の正しい處で。則天下の達道でござります。誰が聞ても尤と存じまして。一言も點をうつ事は成ませぬ。其根元は。天命の性に率ひ。本心の指圖通りにしてござる故に。無筆文盲でも。かやうの働が出來まする。こゝを以て見れば。あながち學問をせねばならぬといふ斗の事ではない。只本心にしたがへば。自から性情の德があらはれ。忠臣孝子にもなられまする。すべて父母のゆるしをうけて。夫の家にいたり。それから後に。さま〲の苦勞をするも。又結構な身になるも。皆天命じや。しかれば難儀こん窮にせまるといふても。天命の難儀困窮なれば。遁れんとすれども遁るべき道はござりませぬ。よし無理にのがれて。親里へ歸つても。同じ天地の間なれば。色しなかへて。また難儀困窮する。これが是自然の道理でござります。百人に一人

は。夫と見すてゝ。をや里へ歸りまた外へよめ入して結構な身になる人も。ないではないされども此人身は結構になつても心はかならず苦勞する事があるものじや。夫にしたがふて道をまもれば。形は苦勞すれども。心は安樂な。また道をそむいて。身は結構になつても。心の苦勞はたえぬ。ようした物じや。さてかの伊八は。次第に困窮の身と成ましたゆへ。一足とびのかね儲せんと。無分別ををこしまして。銀主をこしらへ多くのほうろくをやかせ。船積にして。下の關へをくり利徳を得んと。やがて自分上乘をして。乘出しましたが。天のゆるさぬ所でござりました歟。海上にて難風に出合ひ。船は岩にあたつて碎けほうろくは微塵になり。その身も海中にをち入ましたが。どうやらかうやら。命たすかり。今一人の船頭も是もふしぎに危きをのがれて兩人ともにたすけ船にうち乘り。陸にあがりました。伊八は今さら在所へ歸る事もならず。終に其まゝいづくともなく。逐電いたしました。かの船頭在所へ歸つてこの事を物がたりましたれば。關藏夫婦れ石のかなしみ申すまでもござりま

せぬ。しかるに在所中は伊八が逐電を聞て。かへつてよろこび。疫病神をおくり出したやうに皆々安堵いたしたと。申すことでござります。この伊八が行状は。天命の性にさからひ。なす所の所作一ッとして悪事ならぬとは。ござりませぬ。これらの情の乖戻するとて。ねぢれましたのじや。去によつて。人みなこれを忌悪み。五尺の身のおき所のないやうに成ました。これじやによつて。戒愼恐懼し。獨をつゝしむの修行をいたして。どうぞ互に人の道をはなれぬ様の用心が。肝要でござります　休息

中和を致して。天地位し。萬物育はると。これ則戒愼恐懼。ひとりをつゝしむの。功によつて小人も聖人の域にいたり。其徳天地と合して。萬物を生育す。所謂天人一致。萬物一体の理を。おしめしなされたのでござります。畢竟中とは。天命の性をいひ。和とは性にしたがふの道をいふ。致とは。修行して推極るのじや。平たういへば。本心の通りにして。少しも背かぬ事でござります。大きういふと。國天下もをさまり。小さういへば。一家一身もをさまる。有がたいことじや。

天地位すとは。聖人國を治めたまふ時は。雨風時にしたがひ。天は天の徳をあらはし。地は地の徳があらはれます。また一家でいへば。親は親のやうになり。夫は夫のやうになるのじや。萬物やしなはるゝとは。五風十雨。ときにしたがへば。人は申すにおよばず。米も麥もよう出來。鳥獸も其所を得て。おのれが生を遂まする。一家で申さば。家内の諸道具鍋かまゝで。質屋の藏へもはいらず。道具屋の店へも出ず。おの／＼其所を得て。其役を勤めます。これが。これ其本心にしたがふ歟。率がはぬ歟。この二ツのさかひで。天地位し。萬物やしなはるると。親子兄弟はなれ／＼になるとの。二ツに成ます。ナントこはいものではござりませぬ歟。その本は睹ざる所をいましめ愼しみ。聞ざる所を恐懼れ。わるい分別はおこりはせぬ歟と。腹のうちを吟味する。獨をつゝしむ工夫の。出來不出來によりまする。この道理を合點して。おこたりなう。勤めるが學問の極功。聖人の能事も。この外にあるのではござりませぬ。どうぞ本心におしたがひなされ。精出して勤めなされませ。ある人の歌に。「あすもまた朝とく

起てつとめばや。窓にうれしき有明の月」わが心學の得方にとつて申ますれば。味のある面しろい歌でござります。チト考てごらうじませ。さてかのお石が親里には。折もあらば。むすめを取かへさうと。考へて居ました所に。幸このたび。伊八が逐電したと聞付ましたゆへ。よい縁の切所と早速に娘をよびよせ。すみやかに離縁してもどつて來い。もし此度も縁をきらず。親の詞に背かば。餘儀なう勘當せねばならぬと。おどしかけて責ますれば。お石は興のさめたる顔にて。御勘當はかなしけれども。夫伊八のゆくゑ。しれませねば。誰に斷はつて縁を切て。歸りませうぞ。何事も私の不運。今更里へかへりましては。舅姑御の介抱は。何人が致しまするぞ。これからが嫁の入用。身を粉にくだいてなりとも。夫伊八と二人まへの孝行は。私がせねばなりませぬ。お詞をそむきまするは。不孝なれども。此儀は御ゆるされて下さりませと。中々承知するけしきもなく。これより終に親里と手切れになりました。此としお石廿二才。ナントめづらしい。有がたい。女中ではござりませぬか。人の親の心は闇にあら

ねども。子をおもふ道にまよふて。世間にはこれに似た無法な事をいふて。娘に縁をきらす親達があるものでござります。子もまたうろたへて。親のことばにつき。義理も法もうち忘れて縁をきつてもどる上に。猶へらず口をたゝいて。親の詞を背かぬが。子たる者の孝行じやなどゝ。利口にいふて居る人がある。氣毒なものじや。孝經には。父に爭ふ子あるときは則身不義に陷らず。かるがゆへに。不義にあたつては。子もつて父に爭はずんばあるべからずと見へまする。今お石が父母に爭ひ。勘氣をうけても。伊八と縁を切ませぬが則父母を不義におとし入れぬと申のでござります。しかもお石が孝經をよみ習ふた人でもなく。又學者でもござりませぬ。しかれども其本心の正しきを守るときは。發して節にあたる。天下の達道。これが中和をいたすと。申すものでござります。これよりお石は手ひとつにて舅姑につかへ。專ら農業を勉まする。しかるに天性。顔かたち見ぐるしからず。とに年も若ければ。居村は申すに及ばず。隣村の惡少年どもも其獨身なるを見あなどり。とかくいひよる者も。多く

ござりますれど。お石もとより。鐵石の志にて。髪に油をもちひず。衣類は膝を過ず。然もまた行儀正しく。人にあふて甚慇懃にござりますれば。これに恥て後々はいひよる者もなく。却てその行状の正しいを。譽る樣になりました。成ほど行儀は大事の者でござります。たとへば。奇麗に掃除して。水うつて。チヤント掃ちぎつてある所へは。塵芥を。捨に來る人はない。皆此方の仕向じや。せけんに埒もない事の出來るのは。みなムシヤクシヤと行儀がたらぬによつて。さまざまの塵芥を持つける。これはいものじや。御用心なされませ。ある人のうたに。汲てしれこゝろのそこの井をふかみすむもにごるも我ならはかは。さてその翌年の年貢も。滯なくおさめましたが。翌年にいたり。舅關藏かりそめの煩より。つゐに腰ぬけとなりました。かばかりのわづらひゆへ。藥代は勿論諸入用も多く。成ますれば。しうとめに介抱をたのみ置て。其身はいよいよ辛苦して農業をつとめました。何さま世の中に不仕合ナ人も多けれど。中にもお石は格別に不仕合にて。其翌年また姑も。同じく腰ぬけと成ました是に

依て高七石の作りも出來ぬやうに成まするゆへ。村役人へゆきて。委細をはなし。御大切の御田地なれば。若未進等も出來ましては。申し譯がござりませぬ。何卒れ預り下されいと段々とたのみましたゆへ。村役人も尤にぞんじまして。やがて下作へ預けてくれました。れ石はこれより僅なる作間をもらひ。晝夜兩親の介抱にかゝりまして。物半日と出あるくとは出來ませぬ。やう〳〵半道一里の使をつとめ。又は臺道村へ出まして少しづゝの小揚にやとはれ。家にあるときは。兩親を左右へねさせて。其身はまん中にゐて。草履わらぢをつくり。世わたりの助に致ますれど。女の手業といひ。殊によごれ物のすゝぎせんだく。何かと介抱に手がひけまする故。はか〴〵しきはたらきも出來ませぬ。さるによつて。次第に困窮にせまり。朝夕のたべものさへ。漸く兩親へ粥をすゝめまする位の事ゆへ。其身はたべるふりして。給ぬ日もをり〳〵はでざりましたと申す事じや。されども猶不自由なる体は見せず。かい〴〵しく介抱する事。すべて十一年の間。其こゝろざしいよ〳〵かたく。少しも弱りた

る。けしきはみへませぬ。誠に有がたい女中でござります。子のたまはく歳寒して而後松柏の凋むに後るゝ事をしると。論語に見へまして。君子も小人も。事のない時は別に替た様にもみへませねど。困窮にせまる歟。事の變に出合ふたときは。小人の悲しさには。利欲にまなこがくらむゆへ。手あしをはつてうろたへまする。君子の所作は。かやうのときにあたつては。いよ〳〵静にして。少しも騒ぐことはござりませぬ。たとへば冬に成て。木がらしのふく時分には。草も木も色かはり。葉もおちて。其姿ともみへませぬ。然れども其中に。松や柏は。なはみどりの色を失ひませぬ。これと同じことで。た石が此とし頃の行状實に此場所でござります。さてある日。た石くれ方より。人足に雇はれましたが。心いろがはしく。道をせいたれども。余儀なき用事にて。少し隙どり。其夜四ッ時分に歸りました。いつも門口より聲をかけますれば内よりも返事する。しかるに今夜に限つて返事もなく。これはいかにと内に入て見れば。両親はさめ〴〵と泣てござる。さては何ぞれ氣にいらぬとが有た歟。私の歸り

がれろい故に。た案じでござりましたかと。しきりに問へば。両親の泣々いはるゝには。我等夫婦いかなる宿業にや。伊八の不所存ゆへ。困きうにせまり。其上二人とも業病に取あひ。此としし月そなた一人の介抱で。けふまでは命をつないだが。今よひろなたの歸りのれろいゆへ。もしや我々夫婦をすてゝ。親里へ歸た歟と。ふと疑の心が起るにつけ。よく〳〵思へば。此年でろの艱難辛苦。中々眞實のむすめでも。是ほどに介抱はどいきはせまい。されども永の年月の事なれば。退屈の心のれてるのも。無理ではない。去ながら。其方が歸てくれねば。あすより我等夫婦は乞食もならず。立どころに餓て死ぬると思へば。ただ何となく物がなしく成て。たもはずもなきましたが。能う戻つて來てくれたと。又うれしなきに。さめ〴〵と泣れました。た石はきの毒さ。いふばかりなけれど。わざと打わらひ。今夜は余儀なき用事にて。すこし道で隙どりましたのじや。たとひ此後いかほど歸りが遲いとても。必心よわい事をたはしめすな。我身は死でもこゝろは死なぬ。いつまでも御介抱申して。御先途を見とゞ

けますぐれ〴〵も心づよう思しめせと。とかくいひなぐさめてくすりなど
あたゝめ。例のごとく両親の眞中にゐてはなしゝながら。草鞋をつくる。程な
く夜も更がたに成ましたれば。とくやすめと両親のいはるゝ故。うすき袷や
うのもの引かづきて。其まゝそこに寐いりました。ある人の發句に

「我が身に秋かぜ寒し親二人

ナント哀な句ではござりませぬか。チトかみ〆て御ろうじませ。扨關藏夫婦
は。宵のつかれに一ト寢いり。ね入ましたが。ふと目をさましてみれば。れ石は
しく〳〵と聲もたてず。しめ泣に泣てゐる故。大に驚き。何故ぞと問へば。寐て
見ても。目があひませぬといふ。それは何ゆへぞと頻にとへば。されば伊八ど
の。家を出られてより。すでに六年。里の親だちよりは。縁を切て歸れかしと度
度申されますれど。もとより歸るべき志はござりませぬ。夫のみならず。御大
病のゝちは。なはさら側を離れてはならぬと。心一ぱい御介抱申ますれど。折
折の雇はれ仕事に手がひけまして。十分に御介抱のとゞきませぬは。また私

の盡さぬ所があるによつて。親里へ歸つたかと。れ疑ひもれこりまする。これ全く私のとゞかぬのでござります。どうしたら御安心に成りませうと思へば。寐ても寐入られませぬと。いひわけする。詞のうちに。少しも舅姑を恨まする心もなく。たゞわが身の足らはぬを歎きまする。眞實がみゆますれば。關藏夫婦も大に氣の毒に思ひ。とやかくといひ慰さめ。其夜はやう／＼やすみました。實に此一條。一點も父母をうらむ心なく。たゞおのれが身をくやみまするは。實に難有志。よう我身に立かへつたものでござります。孟子に所謂行得ざるとあれば。皆返て是を。おのれにもとむと。見へましたるも。これらの事で。ござりませう歟。されば此翌日より雇はれ仕事を。かたくとはり只両親の側をはなれず。近隣の人をたのんで。わづかなる賃仕事を請とり。其日の煙をたてまする。其難艱困窮筆にも詞にも。つくさるる事では。ござりませぬ。あるとき隣の人が來て。關藏へ申しまするには。此ごろ隣村へ京都御本山より。御使僧が御下向なされて。ありがたい御勸化がある。ドウゾならう事なら。參詣

をさつしやらぬ歟とすゝめました。關藏もうちうなづいていかさま伊八が居ました時分は。隱居同前の事ゆへ。をり〳〵は御法座へも出ましたが今不自由なからだに成ては。夫さへおもふ樣になりませぬと。いふをお石が聞て。左樣の思し召ならば。とくにも供いたしませうものを。氣のつかぬ事でござりました。あすともいはず。善はいそげじや。今日おともいたしませうといふ。關藏も大によろこび。さらば御法談を。久しぶりで聽聞しませうと。その用意におよびました。則御法談のある。隣村へはおよそ道一里あまり。しかるをお石は。かの舅關藏を脊におひ。姑にしばらく留守をたのみ。やがてお迎ひにまゐりまするど。帶やうのものにて。小兒を負たるごとく。舅をおひ。一里あまりの所を女の身にて。かひ〴〵しく通ひまする。尤其道に川もあり橋もあり。とかくして寺へゆきつき。講中をたのみ。かの舅をおろし。堂の隅に。寒からぬやうに。こしらへおきて。是よりまた引返して。家に歸り。姑を脊に負ひ。隣へ留守を賴み置て。ふたゝび寺へたち歸り。講中へあつく禮をのべ。舅姑の二便の

世話などし。其身は側にあつて。なですりながら。御法儀を聴聞する。さて法話おはれば。講中へ姑をたのみ置て。まづ舅をはじめの如くに負ふて。道をいそぎて。家に歸り。舅をおろしてねさせおき。また寺へ姑をむかひに來て。脊に負て。講中に禮をのべ一さんに家に歸る。すべて一座の法話を聴聞するに舅姑を負ふて。一里あまりの道を。往來都合六たびにおよぶ。しかも一日のことではござりませぬ。法座日限の間。雨の日も風の日も。一日も怠ることなき孝順の行狀。見る人驚歎せぬものはござりませぬ。されば後々は參詣の人。お石が至孝の志を憐みまして。多くは。姑を負ふて。お石が勞をたすくる人もござりましたと承はりまする。猶また人の聞をおどろかしましたるは。かの法座を勤られし僧。お石が。日々に奇特の參詣を感じ。講頭植田何某といふ人に。くはしくその來由をたづねまして。名所を書しるし。法座おはつて後。歸京いたされ。此よし御本山の御聞に達しましたる所。御感稱のあまり。お石へ結構の御菓子一折。關藏夫婦へ。法名を下しおかれ。これを捧持して。翌年また〳〵か

の地へ御使僧御下向に相成り。法座はじまりし所。如例お石舅姑を負ふて參詣に及ましたる故。やがて御命のおもむき申しきかせ。右下されもの頂戴仰つけられましたるは。實にありがたき仕合。これひとへに至孝貞節の德と。隣國まで傳へ聞て。うらやまぬ人はないと承ました。さればこれらの始末。終に太守樣の御聞に達し。やがて御近臣柳井何某といふ士に。仰付られ。かの地へたち越ね。とくと相糺きたるやうとの。御命が下りました。さるによつて柳井氏卽刻小郡驛へ。發向せられまする道中すぢ。驛々にて繼立の人足に。かならず石が事をたづね問はれますれば。皆こたへて。たゞ一ト口に奇妙な人じやと申します。いかさま遠國邊鄙のこゝろなき。あらくれたる。人足衆も。此お石が行狀を。見聞しては。わるいとはさすがに思はず。然れども。何と譽てよいやら譽やうがないによつて。只奇妙な人じやと申まするは。尤の事でござります。實に又金玉の詞をつらねて譽たりとも。萬が一にもおよびませぬ。所詮言句におよぶところではござりませぬ。人足衆の口々に奇妙な人じやと申

まするは。實に的當の罸やうでござります。さて柳井氏。小郡驛にいたり。植田何某を召て委細にたづねられしところ。聞しにまさる行狀なれば。早速立かへつて。此段言上に及びますれば。太守樣との外感じ思し召れ。關藏夫婦へは生涯二人扶持を下しおかれ。猶またお石は。萩の御城下へめしよせられ。御目見仰付られ。御懇命を蒙られしは。實に冥加至極の事ども。身を立て道をおこなひ。名を後世に揚て。もつて父母をあらはすとは。これらの事でござりませう歟。扨爰に奇特なる事は。岩淵村の人は申すにおよばず。近村こぞつては。じめ疫病神の如く。おぢ恐れ毛むしの如くに。いやがつた伊八をこの兩三年已前より。そろ〳〵其ゆく衞を尋るやうに成ましたと申す事じや。其故はお石一人が。身心を碎て。舅姑につかへまする。行狀を見るに付ては。責て伊八が。家にあつて。少しは手助をする物ならば。嘸かしお石も喜ぶであらうと思ふ心より。人々いひ合さねども。小郡驛へ人足に出る度ごとに。必ず往來の人について。伊八が人相骨柄をはなして。かやうの人をば。見當り玉はぬ歟などゝ。おてな

しに尋ましたる處ふしぎに長崎にゐるといふ事を聞出し。やがて村中の人申あはせ一兩人伊八を迎ひに長崎へ參りました。これ全く。た石が孝貞。人をして感せしむる處より忌嫌ひし者をはる〴〵迎ひに參るやうに成まするさりとては孝行の德は廣大なものでござります。扨長崎へいたり。難なく伊八にめぐり逢まして。在所へ歸れと申ますれば伊八中々聞いれず。所詮かね儲せねば在所へは歸られぬといふ。かの迎ひに來りし人委細にた石が孝行評儀を咄しなして。借錢はともあれ速かに在所へ歸つて。た石が志を助けよと申ますれば。伊八これを聞て大に驚き。まだた石は居ますする歟といふ。居りまする所ではないろの孝順のありさま。見て居られぬ故。貴樣をむかひに來たのじやと無理に引立。在所へ歸りましたる所。在所中。大騒ぎの最中何事ぞと問へば。只今狹の御屋形より。た石が御褒美を頂戴して戻つた所じやといふ。さしもの伊八是を聞て。腹を洗ふがごとく。慚愧後悔して是より本心に立返つて。善人になられたと申すとじや。是ひとへにた石の孝德。他に及んで。此

奇特があるのでござります。徳孤ならず必隣ありの聖語。今さらおもひあたつて。驚くばかりの事でござります。されば此事隣國遠境に聞へまして。小郡驛御通行の御歷々さまがた。御本陣へお石をめされて。御目見仰付られ。御錢おびたゞしく。下し給はる事。度々とうけ玉はりました。中にも奇特に覺へましたるは。小野何がしといふ人。お石がことを傳へ聞て。十四才になる娘をつれて。はるばる岩淵村に尋ねきたり。お石に對面におよばれしとき。かのむすめのよまれたる歌とて。「立よりてしばし成ともならはめや。おやにつかふる人の心を。ナントやさしい志ではござりませぬ歟。習ふてよいものは忠臣孝子の心習はいでも大事ないのは。髮のかざりや衣裳の端手じや。すべてお石が。此十一ケ年の行狀。よそから習ふて來たのではない。性にしたがふの道を盡したのでござります。此性はお石にばかり。あるのではない。お互に具はつてある。生れつきの心じや。さるによつて。今にもあれ志を起して勤るときは。誰しも。出來ぬ人はござりませぬ。忠孝の出來ぬといふのは。出來ぬのではない。

せぬのじや。子曰はく。仁遠からんや。吾仁を欲すればこゝに仁いたると。仁は善の端。心の全徳。物を愛するの理。孝行忠義は。直に仁じや。仁其まゝ人の性じや。性則うまれつきの心といふ事じや。されば孝行忠義を勧めようと思ふと。何どきでも勧まるのじや。此結搆な本心を持ながら。うろ〳〵として。一生を終るは。口をしい事ではござりませぬ歟。これについて。やう似たはなしがござります。山家からはじめて京へ。奉公に出た下女が。夜るになれば。行燈をともすといふ事をしらず。内儀のさし圖で。暮がたに行燈に火はともしたが。只手にさげて。うろ〳〵と臺所や座敷を。持まはつてゐる。内儀が見つけて。ナゼ臺所にをかぬのじやと叱たれば。下女ぬからぬ顔で。モシ闇がりに置ても。大事ござりませぬかと。いはれた。ナント味のあるはなしじやない歟。どうぞ一たび。本心の明りを見しつてゐて。自由自在に。くらがりを照す樣に。いたしたいものでござります。朱文公觀書の詩に。半畝方塘一鑑開。天光雲影共徘徊。問渠那得清如許。爲有源頭活水來。チト御かんがへなさりませ下坐

鳩翁道話續々編畢

跋

士之相須也難矣非才之難其知已者則難矣而士有一見輙爲終身之交者何哉有所感也予か翁におけるはまたしかなり予庸愚の質人をしるの明あらされとも久しく莫逆の知己をして義骨肉のことく自家一般平素人に汝の交をなすといへとも笑談の間時として覺えす容をあらたむるにいたるは翁の令德睿敏人をして能く感發せしむるところあればなるべし頃年諸州に遊歷して道を唱ふ聽衆やゝもすれは千二千におよひ益を得る人常に多し嗣子武修侍座して聞ところを筆記せる積

て若干巻となりぬ往日或人上梓せむことを乞ふといへとも翁の許さゝること久し此頃友人頻りに武修に計り卒に世に弘くす武修爲人謹厚實踐學ひて倦ます且其記之詳にして遺さゝる以て其志を觀るに足れり冀は此編年々增秩して窮なからむことを予此擧あるを悦ひ贅言を後へに書するものは抑又爲有感也

天保甲午秋七月

前川常營誌

明治二十五年十一月十一日印刷
同　年十一月十三日出版
同　三十一年八　月　再版
著者　故人　柴田武修
大阪市東區博勞町四丁目百〇九番屋敷
發行者　中川勘助
大阪市南區塊町四丁目二百九番屋敷
發行者　岡島モン
同南區鰻谷仲之町五十三番屋敷（電話東八一二番）
印刷者　岡島幸次郎

中川明善堂發兌書目

柴田翁著
鳩翁道話　洋綴全一冊　正價金拾二錢　郵稅四錢

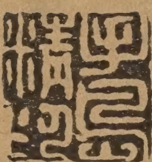
於館從其邇且易教諭世俗

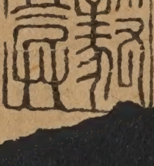
美覽者捨其言辭之俚近而取

深長者以為修身齊家之一助便

之本意矣云爾手島毅庵識於

之南窓





天保甲午夏六月朔近夕獨坐於
栗田氏之子偶來訪云請餘暇閒
且附弌言即取而覽之乃某所
翁之話而命曰鳩翁道話者也
夫言則似戯而悉是孝弟之實
俚尚不乖聖賢之旨語曰道在
諸遠事在易而求諸難令如

卿大夫。至馬官厩養婦女豎。悅而慕之。嗚翁鳩翁何其盛哉。翁有子曰武修。其侍講之之編爲三卷。名曰鳩翁道話。刻以行于世。使蒭蕘識之之旨。領其意。今又抄其吐屑之餘。爲三卷。以續之。吾邦之於漢土。言語不同。而文字亦異。漢人之字。一知吾邦一字一意。而又有古今之分。有雅俗之別。若不精密討究。則其於聖經之旨。或不能無差謬之乎濟世者也。竊慮其如是。欲於鄕閭設一學館。積求以致其義。以揚搉斯道。圖之三十年。于今落落恐將終身齎志無成。視彼浮圖氏之造千仞寶堂。易如何也。儒道之不行於吾邦。如斯邪。可慨歎。古以爲金口之木鐸。不知翁能笑而諾乎否耳。是

明○以耳爲眼○以人爲書○以耳讀人○而誦六經之語○
說性命之理○使人知其心○以望惡趨善○其有功于
矣聖人之道○廣矣大矣○顏子者○亞聖也○猶有彌高
而末由從之歎○則爾來之賢人君子○豈有能詣其
各見其所見○知其所知○遂自許我得聖人之蘊○自
爲非○互相排擊○而不知此亦猶彼也○謂之兄弟鬩
所據之狹○而所懷之不寬乎○道之廣大也○譬之猶
也○百滴水也○千滴萬滴○大溝小渠○同水也○同皆河
滴浸潤○萬滴浸潤○大溝小渠以漑以灌○皆以育物○
非瘴雨毒露也○其於彼此○何紛紛爭辨分駁之爲
得之於心○而發之於口○堅說橫說○控送在手○或
聞而笑○笑而拊掌○噱噱然不覺入其道○終歸